OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	現代中国語指示詞“这”と“那”の前方指示用法における選択基準
Author(s)	小野, 絵理
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55712
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

博　士　論　文

現代中国語指示詞“这”と“那”の前方指示用法における選択基準

提出年月　2015 年 12 月

言語文化研究科　言語社会専攻

氏名　小野絵理

要旨

本研究の目的は、指示詞の用法のうち、指示する対象が前方の言語的文脈に義務的に現れる前方指示用法に基づき、中国語の指示詞“这”と“那”の選択基準を示すことである。また、前方指示用法における指示詞選択について詳細な分析を行った上で、文脈指示用法における指示詞選択の全体像を明らかにすると共に、文脈指示用法と非文脈指示用法における指示詞選択の関係を示すことも目的としている。

中国語の指示詞選択に関する先行研究では、吕叔湘 1985 が、“这”と“那”の対立を「近」と「遠」の対立であるとし、空間的な遠近を基本としながらも、しばしば心理的な距離によっても区別されることを指摘した。しかし、その心理的距離について、具体的にはどのような場合に「近い/遠い」と感じられるのかについては検討されておらず、語用論的分析もなされていない。

現場指示用法を中心とした、非文脈指示用法における指示詞選択を扱った代表的な研究としては木村英樹 2012 があるが、そこでは文脈指示用法における指示詞選択の分析はなされていない。

文脈指示用法における指示詞選択に関与し得る具体的な要素を扱った研究には、丁启阵 2003、陈艳芳 2005、王灿龙 2006、杨玉玲 2010 などがあるが、どれも複数の要素が競合したときにどうなるのかについては全く、あるいはほとんど触れられていない。また、それらの研究では文脈指示のうちの一部の用法、あるいは一つから数個のごく限られた基準についてのみを考察しており、文脈指示用法における指示詞選択の全体像を示すには至っていない。

それに対し、本論文は、談話において相手の発言を指示する場合と、文章を含む自分の発言を指示する場合の両方を研究対象としているという点で、これまであった文脈指示用法の研究の中でも特に広い範囲を扱っている。また、これまでの先行研究と特に異なっているのは、単に指示詞の選択基準を主張して終わるのではなく、基準間の優先度を検討することで、文脈指示用法における選択基準はどのような体系を構成しているのか、その全体像を示したことである。それに加え、中国語の文脈指示用法における指示詞選択が、同言語の現場指示用法における指示詞選択とどう関係しているのかについても考察した。

本論文は全 7 章から構成されている。

第 1 章では、研究対象と研究目的を述べた。それから指示詞に関して全体的に概観するため、指示詞について、また現場指示、観念指示、文脈指示がそれぞれどのような用法であるのかについての概要を示し、本論文の基本的な立場を示した。次いで、研究方法、本論文で用いる用語、本論文の構成について述べた。

第 2 章では、中国語の指示詞選択に関する先行研究を挙げた。まず、指示詞の全用法における根本的な機能について述べた先行研究を紹介し、次いで、現場指示用法における指示詞の使い分け、観念指示用法において使用される指示詞について述べた。それから、文脈指示用法で既に指摘されてきた、指示対象と指示詞の距離、時間的要素、指示対象の発言者、話者の感情・態度、肯定/否定、接続機能の有無、前方指示/後方指示、話題/非話題といった要素がどのようなものであるのかについて、典型例を挙げつつ解説し、これらの基準がどのようにして妥当、或いは妥当でないと判断されたのかその経緯を述べた。そして、これまでに検討してきた基準のみからでは説明のできないどのような問題がまだ残っているのかについて述べ、本論文で扱う言語現象を指定し、そのように指定した理由を述べた。

第 3 章では､相手の発言を指示する場合における指示詞の選択基準を考察した｡そして、次のような基準を提案し、その妥当性を検証した。

> 話者が相手の発言内容を重視している程度が相手と同じほどかそれ以上に高いことを示す場合、また話者が自分の相対的重視度の低さをわざわざ示す必要の無い場合には“这”を用い、逆に話者が指示対象を相手ほど重視していないことをはっきりと示す場合には“那”を用いて指す。

そして、この基準が現場指示における指示詞選択とどのように関わっているのかを考察した。

第 4 章では、自分の発言を単独の指示詞で指示する場合について次のような指示詞の選択基準を提案し、その妥当性を検証した。

> 受信者が指示対象に対して抱く理解・期待・疑問などを、話者が想定済みであることを明示的に表現しながら指示するときは“那”を用いる。そのような想定を明示的に表現する意図なく指示する場合には“这”を用いる。

そして、上の選択基準がなぜ先行研究よりも優れていると言えるのか、また、相手の発言内容を指示する場合の選択基準とどのように関連しているのかを考察した。更に、この基準が現場指示における指示詞の選択基準とどのように関わっているのかを考察した。

第 5 章では＜代名詞＋指示詞＋量詞＋“人”＞という形式において、主に代名詞と後方の成分が同格関係にある場合の指示詞選択を分析した。そして、現場的指示、文脈的指示、観念的指示の全ての用法を考慮に入れて検討した上でこの形式における指示詞選択がどのようになされているのかを示した。

先行研究ではこの形式において、代名詞と後方の成分が同格関係にあるとき、代名詞が一人称と二人称の場合には“这”のみしか用いられないとされている。しかし、実際には代名詞が複数の場合には“那”が使用されることがある。なぜ代名詞が複数の場合には“那”が使用されることがあるのか、どのような場合に使用されるのかを扱った研究は管見の限り無い。本論文はこの問題に答えを出し、たとえば、“你们这些人”と“你们那些人”はそれぞれ用い得る言語環境にどのような違いがあるのかを明らかにした。

この形式において、代名詞と後方の成分が同格関係にあるとき、代名詞が三人称の場合の指示詞選択については、管見の限り、杨玉玲 2010 が非断定的な形で“他/他们”に対する肯定・中立・否定的態度という要素を指摘しているのみである(杨玉玲 2010：145)。しかし、実際にはその要素のみからは説明のできない指示詞の選択現象が多く存在する。本論文は、現場的要素、文脈的要素、観念的要素の全ての側面を考慮した上で、選択基準を設定するのに関与的な言語環境にはどのようなものがあるのかを検討し、杨玉玲 2010 の指摘した要素のみからは説明できない指示詞選択現象が生じる理由を明らかにし、中国語話者によって異なる意見が生じる場合がある理由を考察した。

代名詞と後方の成分が同格関係にある＜三人称代名詞＋指示詞＋量詞＋“人”＞(以下「三代＋指＋N」と称する)という形式で人物あるいは集団を非現場的に指示する場合の指示詞選択については、話者の語感により主に、「文脈的要素考慮型」、「人間関係的要素考慮型」、「基本“那”使用型」という 3 つのタイプに分けられる。

「文脈的要素考慮型」の話者は、「三代＋指＋N」が言語的文脈に現れたその人物あるいは集団を指していることを意識しているかどうかを重視して指示詞を選択する。したがって、このタイプの話者は、文脈的要素の差異に敏感で、前方文脈でその人物あるいは集団についての詳細な描写があれば、“这”の使用をより自然に感じる傾向を持っている。

「人間関係的要素考慮型」の話者は、「三代＋指＋N」が言語的文脈に現れたその人物あるいは集団を指していることを意識しているかどうかよりも、話者と、指している人物あるいは集団との人間関係的要素を重視して指示詞を選択する。

「基本“那”使用型」の話者は、多くの場合文脈的要素や人間関係的要素によってほと

んど左右されることなく、指している人物あるいは集団が発話現場にいなければほぼ一律に“那”を用いようとする。

ただし、「文脈的要素考慮型」、「人間関係的要素考慮型」及び「基本“那”使用型」話者は、それぞれ他の要素を一切考慮しないというわけではなく、主に第一直感では上記の要素を優先的に考慮する。したがって、たとえば「文脈的要素考慮型」の話者であっても、顕著な人間関係的要素があれば、それに促されて指示詞を選択することもある。

第 6 章では、まず第 3 章と第 4 章における研究成果によって新たに得られた指示詞の選択基準と、主に第 2 章で既に述べられていた選択基準が関わり合い、かつそれぞれの基準が主張する指示詞が対立するときには、どの基準がより高い優先度をもって指示詞の選択が行われているのかについて調べ、得られた結果を二分法で示して図にまとめた。

更に、第 5 章で得た研究成果を通して、純然たる文脈指示用法と、他の用法の指示が可能な状況における文脈的指示とでは、指示詞の選択にどのような違いがあるのかを考察した。純然たる文脈指示用法の場合には、非常に多くの要素が関わって指示詞は選択されてきた。ところが、ひとたび文脈的・現場的・観念的指示が共に可能な状況が生じると、どの用法を採用して対象を指示するのかが重要になり、採用する用法が決定した後の指示詞の選択は非常に単純化されるという特徴を指摘した。また、全ての用法を検討することを通して、中国語の指示詞には、本質的に次のような特徴があることを指摘した。指示詞の最重要機能は受信者を指示対象へと確実に導くことである。この点で指示詞が不可欠な役割を果たしている場合、たとえば指示対象の候補となり得るものが複数あり、受信者は指示詞を頼りにしなければ指示対象をはっきりと識別できないとき、指示詞の使い分けは、物理的な遠近に近い、より初歩的な意味を示し分ける。一方、言語環境によって、指示対象が明白で、受信者を指示対象へと間違いなく導くという面での指示詞の負担が少なくなるにつれて、指示詞の使い分けは指示対象に対する付加的な情報、すなわち指示対象に対する話者の見方や関係性といった、より高度な意味を示し分けるものへと機能を変化させる。

7 章では、本論文の研究成果と意義、及び今後の課題について述べた。

要旨

题目：现代汉语指示词“这”和“那”在回指用法中的选择标准

本论文的研究的目的是通过观察指示词“这”和“那”在回指上文时的使用情况，揭示现代汉语指示词“这”和“那”在回指用法中的选择标准。此外，希望本论文对学习汉语的非母语者在实际语言运用时，能够正确选择适当的指示词起到一定的帮助。很多先行研究都指出了选择指示词的标准，但是很少涉及到各类选择标准中的优先排列顺序。对于汉语学习者来说，这不能不说是一个棘手的问题。本论文基于这个问题，主要通过分析小说、电视剧对白、话剧剧本、语料库等不同形式的文本，力求明确指示词选择标准和其优先排列顺序。

第 1 章首先介绍本论文研究对象和研究目的。并说明在现代汉语指示词的所有用法中回指用法的定义。

第 2 章对相关先行研究进行整理和概括。第 1 节指示词在所有用法中的选择标准。其次，重点关注上下文指示词的选择标准。

第 3 章讨论说话人回指对方发话内容的指示词的选用标准。主要通过分析小说和电视剧里的对话，发现以下特点。一、说话人表示自己重视对方所说的内容，且重视程度跟对方一样高或比对方更高；二、说话人不想表示轻看对方说的话时，用指示词“这”来指示对方说的话。然而，如果说话人强调自己没有对方那样重视谈话内容，则用指示词“那”来指示对方的话。在现代汉语里，指示对方说的话时，说话人对对方谈话内容的赞同与否，双方关系好坏与否都不是指示词选择的唯一标准，而对所指内容的重视的相对程度才是更重要的选择标准。最后，谈及第 3 章得出的结论与当前指示词的选择标准有怎样的关系。

第 4 章揭示说话人对回指自己发话内容的指示词的选用标准。说话人会预测听话人头脑里可能浮现的疑问、反驳、期待等，并在此基础上做出解释。此时往往使用“那”；而说话人用“这”来回指时，对说话人来说，听话人是否对指示对象做出预测并无关系，而是说话人主动地解释自己想解释的事情。因此，本论文主张：所指对象的表面形式（陈述成分/名词性成分/定指成分/不定指成分）并不是指示词选择的根本性标准。说话人是否表示出自己对听话人心理的预测才是更重要的选择标准。此外，谈及第 4 章的结论与第 3 章的结论，及当前指示的选择标准有怎样的关系。

第 5 章分析“人称代词＋指示词＋量词＋人”（后文略称“代＋指＋N”， 如“我们这些

人”）的指示词的选用。尤其关注代词和后面的成分形成同位关系时的例子。并分析得出在此类型中，指示词的选择与人称代词、人称的单复数、所指对象是否全部在场等许多要素均有重要关系。

第 6 章把先行研究指出的指示词选择标准，及本研究于第 3、4 章发现的规律进行优先排序，并得出本论文的结论。并明示了回指用法中的指示词的选择标准的总括。在此，进行对比了得出的回指用法中的指示词的选择标准和第 5 章所述的上下文指示、当前指示、观念指示同时发生时的指示词选择。当这些用法产生关联时，针对选择使用指示词有怎样的特征一事，做出了阐述。

最后，在第 7 章谈及本研究的意义及今后的课题。

１．　はじめに 1
１．１　研究対象 1
１．２　研究目的 2
１．３　本論文のおける基本的な立場 5
１．３．１　指示詞について 5
１．３．２　現場指示 6
１．３．３　観念指示 6
１．３．４　文脈指示 7
１．４　研究方法 8
１．５　本論文で用いる用語 9
１．６　本論文の構成 10
２．　中国語の指示詞選択に関する先行研究 12
２．１　指示詞の包括的研究 12
２．２　現場指示 16
２．２．１　対話の場合 16
２．２．２　独言・内言の場合 16
２．３　観念指示 17
２．４　文脈指示 19
２．４．１　指示対象と指示詞の距離 19
２．４．２　時間的要素 22
２．４．２．１時間指示 22
２．４．２．２指示内容の時間と指示時間 24
２．４．２．２．１客観的時間距離と指示詞選択 24
２．４．２．２．２指示対象の内容が現在に属する場合 26
２．４．２．２．３指示対象の内容が過去に属する場合 26
２．４．２．２．４指示対象の内容が未来に属する場合 28
２．４．２．２．５指示対象の内容が特定の時間に属さない場合 28
２．４．２．２．６まとめ 29

２．４．３　指示対象の発言者 30
２．４．４　話者の感情・態度 31
２．４．５　肯定/否定 33
２．４．６　接続機能の有無 39
２．４．７　前方指示/後方指示 40
２．４．８　話題/非話題 44
２．４．９　まとめ 49
２．４．９．１上の基準から得られる指示詞選択規則 50
２．４．９．２指示詞選択規則の優先順位 51
２．４．１０　本論文で扱う言語現象の指定とその理由 59
３．　相手の発言を指示する場合 63
３．１　先行研究と問題点 63
３．２　本研究の提案 65
３．３　話者の相対的重視度が高いことを示す場合 67
３．４　話者の相対的重視度が低いことを示す場合 71
３．４．１　門前払い 71
３．４．２　言い訳をするとき 72
３．４．３　相手こそが重視すべきだという勧告を行うとき 74
３．５　慰めにふさわしいのは“这”か、それとも“那”か 76
３．６　まとめ 80
３．７　現場指示における指示詞選択との関係 80
４．　自分の発言を単独の指示詞で指示する場合 82
４．１　先行研究と問題点 82
４．１．１　コト指示/モノ指示 82
４．１．２　定/不定 83
４．２　本研究の提案 86
４．３　コト指示用法における指示詞選択 87
４．３．１　受信者の予想を覆す場面 87
４．３．２　受信者から受けそうな指摘について注解を加える場面 90
４．４　モノ指示用法における指示詞選択 93

４．５　まとめ 100
４．６　考察 102
４．６．１　先行研究で示された指示詞使用の分布傾向との関係 102
４．６．２　本研究の主張する選択基準が先行研究よりも優れている点 102
４．６．３　相手の発言内容を指示する場合の選択基準との関係 103
４．６．４　現場指示における指示詞選択との関係 104
４．７　結論 106
５．　指示詞が人称代名詞と共起するとき 108
５．１　考察対象 108
５．２　先行研究 108
５．２．１　「N1＋指示詞＋N2」構造の特徴 108
５．２．２　人称代名詞の種類と指示詞選択 108
５．２．３　人称代名詞と名詞句が同格関係にある場合 109
５．２．４　人称代名詞と名詞句が所属関係にある場合 111
５．３　人称代名詞と名詞句が同格関係にある場合の指示詞の選択基準 114
５．３．１　一人称代名詞と二人称代名詞 115
５．３．１．１　複数の一人称代名詞 115
５．３．１．２　複数の二人称代名詞 121
５．３．１．３　一人称代名詞、二人称代名詞のまとめ 133
５．３．２　三人称代名詞 134
５．３．２．１　指示詞選択に関する先行研究 134
５．３．２．２　現場的指示と非現場的指示 136
５．３．２．２．１　語用論的制約 136
５．３．２．２．２　三人称代名詞が単数のとき 139
５．３．２．２．３　三人称代名詞が複数のとき 141
５．３．２．３　非現場的指示 144
５．３．２．３．１　「文脈的要素考慮型」話者の場合 145
５．３．２．３．２　「人間関係的要素考慮型」話者の場合 151
５．３．２．３．３　「基本“那”使用型」話者の場合 154
５．３．２．４　三人称代名詞の場合の指示詞選択 156

５．３．２．５　考察 159
５．３．３　結論 160
６．　まとめ 163
６．１　本論文から得られた指示詞選択基準 163
６．２　指示詞選択基準の優先順位 163
６．２．１　前方指示用法における指示詞選択 163
６．２．２文脈指示用法における指示詞選択の全体像 174
６．３　文脈指示、現場指示、観念指示用法の関係と中国語の指示詞の特徴 175
７．　むすびに 176
７．１　本論文の研究成果の意義 176
７．２　今後の課題 177
参考文献 181

１．　はじめに

１．１　研究対象

下の例(1)(2)は、本論文が扱う、指示詞の前方指示用法の例である。指示詞は共に相手の発言内容を指している。日本語では、相手の発言内容を指示する場合には、コ系、ソ系、ア系の 3 系列ある指示詞のうち、ソ系を用いるが(阪田雪子 1971：136-137)、中国語では、“这”、“那”の 2 系列ある指示詞のうち、(1)のように近称の“这”が用いられることも、(2)のように遠称の“那”が用いられることもある。

(1)[自分が良い母親になれるかどうかを思い悩んでいる妻と、その夫との会話]

小登:我不知道，我不知道我能不能做一个好妈妈。

杨阳:肯定能。你没问题的。

小登:真的呀?

杨阳:当然啦。不用担心这个。

小登:那，那咱们也要一个。[*唐山大地震*、第 19 話]

小登:私は分からない、いいお母さんになれるかどうか分からない。

杨阳:必ずできるよ。君は問題ない。

小登:本当?

杨阳:当たり前だよ。それは心配いらない。

小登:じゃあ、じゃあ私たちも一人[1]。

(2)A:为什么你最近经常迟到?

B:那是因为最近路上经常被帅哥搭讪。(作例)

A:どうして最近いつも遅刻するの？

[1]本論文における日本語訳は記載が無いものは全て筆者によるもので、中国語に不案内な読者であっても、そこで論じている指示詞がどのような文脈でどの部分に用いられているのかが分かるようにすることを目的としている。そのため、論じている指示詞にあたる箇所が日本語ではゼロ照応詞も可能であるという場合でも、なるべく訳出するように努めた。本論文では中国語の指示表現の如何に焦点を当て、日本語訳における指示表現の如何は論じない。

B:だって最近道でよくイケメンにナンパされるんだもん。

中国語では、(1)と(2)で使用されている指示詞が異なるのはなぜなのだろうか。(1)の指示詞“这”を“那”に置き換えると、表現されるニュアンスはどのように変わるのだろうか。また、(2)では指示詞を“这”に置き換えると不自然になってしまうが、それはなぜなのだろうか。

本論文では、このように、前方に現れた語句や文、談話を指示詞で指すとき、中国語では2系列ある指示詞“这”と“那”のうちどちらの指示詞を用いて指すのか、特に日本人の中国語学習者にとって推測が難しいと思われる点を中心に検討し、上のような疑問に答えを出す。

また、＜代名詞＋指示詞＋量詞＋“人”＞の形式で、代名詞とその後の名詞成分が同格関係にあるもの、たとえば、“他这个人”“你们那些人”における指示詞の選択がどのようになされているのかを明らかにしようとする。一人称代名詞、二人称代名詞、三人称代名詞の単数と複数全ての場合を考慮し、たとえば、下の(3)のような例文において、現場的指示、観念的指示、文脈的指示の全ての側面を考慮した上で、ネイティブ話者は指示詞をどのように選択しているのかを考察する。

(3)你别看他像不良少年，其实**他｛这/那｝个人**学习很好。(作例)

彼は不良少年のように見えるけど、実は**彼って**勉強がよくできるんだよ。

１．２　研究目的

本研究は、指示詞の用法のうち、指示する対象が言語的文脈に義務的に現れる文脈指示用法を出発点に、中国語の指示詞“这”“那”の選択基準を示そうとするものである。また、複数の指示詞の選択基準について、どの基準が強制的であるのかを検討し、優先順位があるものについてはその優先順位を示し、拮抗する基準があるとすれば、それはどの基準であるのかを示すことも目的としている。さらに、文脈指示用法における指示詞の選択基準が、現場指示用法を中心とした非文脈指示用法における指示詞の選択基準とどのように関連しているのかについても検討する。

中国語の指示詞の選択基準はこれまでも指摘、検討されてきた。現場指示における指示

詞の使い分けの研究として代表的なものに木村英樹 2012 がある。木村 2012 は、現場指示用法を主とする非文脈指示用法における指示詞選択を扱った「指示詞のダイクシス――「近」と「遠」――」という章の冒頭で次のように述べている。

> 日本語の「コソア」3 系列に対して、中国語の指示詞は、近称の{这 zhè}と遠称の{那 nà}の 2 系列からなる。その〈近〉対〈遠〉の対立の仕組みを十分明確に特徴づけた例をわれわれは知らない。「話し手にとって近いものは{这}で指し、遠いものは{那}で指す」といった説明はどの辞書や文法書にも見られるものであり、事実は確かにそのとおりである。が、それはあくまでも結果を述べているにすぎず、問題は、なにがどうある場合に、中国語の話し手は「近い」と認識し、あるいは「遠い」と認識するのかということである。つまり、〈近〉か〈遠〉かという認識の決定に与る意味論的条件あるいは語用論的条件が具体的に明らかにされることこそが、指示詞の議論にとっては重要なことであり、また実用面でも必要なことなのである。(木村 2012：57)[2]

上で木村の述べた「なにがどうある場合に、中国語の話し手は『近い』と認識し、あるいは「遠い」と認識するのか……が具体的に明らかにされること」の重要性と必要性は、文脈指示においても同様であるにも関わらず、この面における研究は現場指示用法よりも貧弱である。木村 2012 は、非文脈指示的な用法における指示詞の使い分けを検討した章の最後の部分で次のように述べている。

> 以上、現場指示を中心とする非文脈指示的な用法について、{这}と{那}の使い分けの状況を観察し、検討してきたが、2 系列にも 2 系列なりの複雑さが存在することは、これらの観察からだけでも十分見てとることができる。今回取り上げることのできなかった文脈指示用法では、視点、共感度、主題性(topicality)、事実性(factivity)、定・不定、既知・未知など、もろもろの意味論的要因や昨日論的要因が絡んできて、状況は一層込み入ったものになるものと予想される。(木村 2012：15)

[2] 本論文では、本文中で指示詞を議論するさい、基本的に“这”、“那”と表しているが、木村 2012 は{这}、{那}と表している。本論文で木村 2012 を引用或いはそこで述べられている事柄を紹介する場合には、木村氏が使用している{这}、{那}というスタイルをそのまま使用して記す。以下同様。

このように、木村 2012 は文脈指示用法における指示詞の使い分けは一層込み入ったものになるという予想を述べるにとどまり、現場指示用法における指示詞の使い分けと文脈指示用法における指示詞の使い分けとの関係については述べていない。

文脈指示用法と非文脈指示用法を分けず全般的な用法における指示詞を扱った先行研究は、吕叔湘 1985 が、“这” と“那”の対立を遠と近の対立であるとし、空間的な遠近を基本としながらも、しばしば心理的な距離によっても区別されることを指摘したのに始まる(吕叔湘 1985：187-188)。しかし、その心理的距離が具体的にはどのような場合に「近い/遠い」と感じられるのかについては検討されておらず、語用論的分析もなされていない。一方、指示詞選択に関わる具体的な要素を指摘した研究には丁启阵 2003、陈艳芳 2005、王灿龙 2006 等がある。しかし、どれもそれぞれの研究者が、指示詞の選択に影響を及ぼしていると感じる要素を挙げては、数例の例を挙げてその例がその要素によって説明できる、と結論するにとどまるものばかりで、他の要素と競合したときにどうなるのかについては全く、あるいはほとんど触れられていない。またそれらの研究対象は文脈指示のうち一部の用法、あるいは一つから数個のごく限られた基準についてのみの考察を扱っており、文脈指示における指示詞選択の全体像を示すにはほど遠い。

このように、指示詞の選択について広範に扱った研究では漠然として具体的な使い分けが述べられておらず、具体的な指摘を行った研究では、それが他の基準と衝突した場合にどのように振る舞うかについて述べられず全体像が示されてこなかった。

中国語の文脈指示用法を扱った先行研究の中でも、杨玉玲 2010 は指示詞に関して他の研究と比べれば広範に扱っており、先端を行く研究の一つと認識しているが、それでも文脈指示の中でも“篇章用法”だけを扱っており、談話において相手の発言を指示する場合については扱っていない。また、杨氏は指示詞の選択基準として主に 7 つの対立を挙げているが、それぞれの基準で出てくる反例については、反例の中から幾つかの例だけを取り挙げてその例についてその場限りの理由を説明して終わるだけで、選択基準の優先順位は何も述べていない。したがって、もともと語感がある母語話者が納得することはできても、非母語話者の中国語学習者がその基準を知ったところで、実際の言語運用において適切な指示詞を生産できることはないと思われる。

文脈指示用法で指示詞の選択に関わる要素と非文脈指示用法で指示詞の選択に関わる要素との関係を扱った数少ない先行研究には讃井唯允 1988、牧野美奈子 1993 がある。讃井 1988 は、指示対象が話の場面に存在し、かつ言語文脈にも存在する場合、日本語では

deictic(現場指示的)な用法の表現しかすることができないのに対し、中国語では、anaphoric usage(文脈指示的用法)の指示詞を使うことができることを指摘した(讃井 1988：8-9)。牧野 1993 は、テクスト内指示とテクスト外指示の両方が可能な場合に、どちらが優先されるのかを検討した。どちらも興味深い点を指摘しているが、両者は、現場的指示がと文脈的指示が可能な場合にどちらの用法で指示をするのかのみを論じている。本論文では、先行研究で考慮されていない、現場的指示と文脈指示と観念指示が可能な場合にどの用法が用いられるのかについても検討する。たとえば、複数の人称代名詞と指示詞が共起した形(例：“我们这/那些人”“你们这/那些人”)で、指示対象が言語的文脈に存在し、かつ指示対象の一部が発話現場にいて、一部が発話現場にいない場合という更に複雑なパターンを含め、現場的指示、観念的指示、文脈的指示全ての要素を考慮した上でこの形式における指示詞選択がどのようになされているのかをも解明しようとする。

本研究は、談話において相手の発言を指示する場合と、文章を含む自分の発言を指示する場合の両方を含んでいるという点で、文脈指示用法の研究でも広い範囲を扱っている。また、ただ単に選択基準を主張して終わるのではなく、複数の指示詞の選択基準について明確な優先順位がある場合には優先順位を示し、拮抗する指示詞の選択基準がある場合にはそれがどの基準とどの基準であるのか示そうとしている点で、これまでにない研究となっている。更に、中国語の文脈指示用法における指示詞選択が、同言語の現場指示における指示詞選択とどう関連するのかについても考察する。

１．３　本論文のおける基本的な立場

１．３．１　指示詞について

指示詞は基本的に聞き手(また読み手)に、指しているものを探させる合図のような働きをするものである(白川博之 2006：2)。中国語では、指示詞は“这”系列と“那”系列の 2 系列があり、“这”系列は“近指”、“那”系列は“远指”とされてきた(王力 1985：299)。日本語では、指示詞は「コ」系列、「ソ」系列、「ア」系列の 3 系列があり、「コ」系列は近称、「ソ」系列は中称、「ア」系列は遠称とされてきた(堀口 1978：24-42)。本論文は、指示詞の用法のうち、主には文脈指示用法に焦点を当てるものであるが、指示詞全体の中での文脈指示用法の位置づけを明確にするため、以下、現場指示、観念指示、文脈指示が

それぞれどのような用法であるのかについて先行研究を概観することによりみていくことにする。

１．３．２　現場指示

堀口 1978 によれば、現場指示とは、基本的には、話し手と聞き手が同一の空間を共有する場面において、多くの場合身ぶり・手ぶり・表情などの表現行為を伴いつつ、話し手が現に知覚していて聞き手にも知覚されるはずだとする事物を対象として指示する用法である(堀口 1978：25)。

典型的な具体的としては次のような例が挙げられる。

(4) A・B と小王の距離は近い。A が B に、

A：小王穿的这件毛衣，挺好看的呀！

「小王の着てるセーター、いいね」(牧野美奈子 1993：101)

(5)甲が遠くの丘のうえにある塔を指さし、乙にはなしかける。

甲 ： 你看，那边山上有一座小塔。看见了没有?

ほら、むこうの丘の上に小さな塔があるよ。見えたかい？(讃井 1988：8)

１．３．３　観念指示

観念指示とは木村 2012 の中では「記憶指示」と呼ばれているもので、「話し手が過去に知覚・体験した事物を、言語的なコンテクストにおいてあらかじめ言及することなく、いきなり指示詞によって指し示す(木村 2012：77)」用法であるとしている。木村 2012 は観念指示について「発話の現場に存在する事物を指示対象とするものではないが、発話時点の〈今〉と発話時点の〈ここ〉を基準点とした deictic な指示表現であるという点では現場指示に等しく、その延長線上にあるものと見て差し支えない。広義の現場指示と見做し得る(木村 2012：77)」と述べており、研究者の中には牧野 1993 のように、この用法を個別には立てず「deictic な表現(牧野 1993：106)」の一部とみなす者もいる。ただし、本論文では、次節の文脈指示のところで述べるが、観念指示は言語的なコンテクストにおいてあ

らかじめ言及されているかどうかそのものによって決まるのではなく、たとえ言語的なコンテクストにおいてあらかじめ言及されていたとしても、話者がその言語的コンテクストを指しているのではなく、発話現場にない、頭の中にある事物を指している場合も含まれるという立場をとる。

観念指示の具体的な例としては次のような例が挙げられる。

(6) 今西嘴里叼着小截新生牌香烟，吐出一缕缕烟雾，眺望着窗外昏暗的景色。吉村在翻阅着周刊杂志。

今西：“吉村，那件衣服的下落怎么样啦？”

吉村：（抬起头来）“你是问那件运动衫吗？”（〈沙器〉）

今西、短くなった新生の煙りを吐き、暗い窓の外を瞶めている。吉村は週刊誌の頁を繰っている。

今西「吉村くん、あのシャツはどうなったンだろうな」

吉村「(顔を上げる)スポーツシャツですか」(「砂の器」) (木村 2012：78)

１．３．４　文脈指示

堀口は、文脈指示とは、話し手の観念に存在するものが文脈の中に明示されており、それを指示の対象とするものであるとした(堀口 1978：33)。一方、庵功雄 2007 は、狭義の文脈指示は先行詞が言語的文脈内に「義務的に」存在しなければならないのに対し、観念指示は「もちろん先行詞が言語化されていた方が話の展開が容易になる場合が多いが、先行詞の存在は義務的ではない」(庵 2007：39-40, 43)とし、実際に指示する対象が言語的文脈に現れるかどうかではなく、言語的文脈に現れることが義務的であるかどうかで区別した点が堀口 1978 と異なっている。本論文では、庵 2007 の言う狭義の文脈指示、すなわち指示対象が言語的文脈に義務的に存在する用法のことを「文脈指示」と呼ぶこととする。具体的には次のような例が挙げられる。

(7) “但是，我可嫁给了他，”茉特尔含糊其词地说，“这就是你的情况和我的情况不同的地方。”（《了不起的盖茨比》、巫宁坤訳 1996、亦凡公益图书馆、以下同じ）

「ところが、あたしはそいつと結婚しちゃったのよね」、マートルはちょっと含みのあ

る言い方をした。「そこが大きな違いなのよ。あなたの場合と、あたしの場合との」(村上春樹訳 2006：69)

本論文では、指示詞の用法として、現場指示用法、観念指示用法、文脈指示用法を認めるが、これらの用法の区分の詳細な検討は本論文のめざすところではない。本論文は、これらの用法は連続的なものであると考え、必ずしも全ての用例がいずれかの用法だけに明確に割り振られるとは限らないことを認めて、分析の便宜のために区別を行ったものであると理解されたい。本論文では、文脈指示用法と相補分布をなす概念として、文脈指示用法以外の用法を非文脈指示用法と述べることもある。非文脈指示用法は、文脈指示用法以外の全ての用法を含むこととする。

本論文では、文脈指示用法の指示詞選択を出発点として分析をするが、5 章では、“我们那些人”のような、指示詞は言語的文脈を指示していながらも、同時に発話現場に指示対象が物理的に存在し、また指示対象のうち、その全部が発話現場にいる場合と一部がいる場合があるような、文脈指示的要素と非文脈指示的要素が重なり合う用例についても深く検討する。また、文脈指示用法内の分析によって得た指示詞選択基準が、現場指示における指示詞選択基準とどのように関わっているのかについても分析する。

１．４　研究方法

本研究では、小説、ドラマ、話劇台本、作例、言語コーパスなどの言語資料を用いながら、どのような場合に中国語の指示詞“这”が用いられ、どのような場合に“那”が用いられているのかを詳細に検討し、指示詞の選択基準を分析する。神尾昭雄 1990 は著書『情報のなわ張り理論』においてその研究における方法論を次のように述べている。

> 本書における議論の展開は、基本的には一般の言語学の論考におけるものと変わらない。言語データの観察に基いて仮説を設け、その妥当性を示す証拠と考えられるものを様々な観点から捜し求めて行く。しかし、本書の議論には、データの取扱いに関して、いわゆる記述言語学あるいは理論言語学とは異なるところがある。これらの分野においては、与えられたあるいは語の文法性、意味および音形が中心的な観察対象になる。しかし、本書で取り上げる文または語句はほとんどすべて音形論的に正しく、

文法的かつ有意味なものである。本書における観察の中心は、与えられた文または語句がどの様な状況下で自然に用いられるかあるいは用いられ得ないかにある。そして＜状況＞とは、あるい文の前後に生ずる文によって形作られる談話あるいは言語的文脈と、談話の場面、話し手または聞き手の意図、知識、心理状態などを広く含む非言語的文脈の双方を含めた総体である。(神尾 1990：8)

本論文では、基本的に上に引用した神尾 1990 の方法論を踏襲して研究を行う。

１．５　本論文で用いる用語

“这”と“那”の品詞の名称には、指示詞、指示代名詞、指示形容詞、指示代名詞、指示代詞などがあるが、本論文は「指示詞」という名称で統一する。

指示詞が指す対象のことを指示対象と呼び、中国語では“所指”などとも呼ばれるが、文脈指示の場合には「先行詞(antecedent) (山梨 1992：4)」 (中国語では“先行语”(许余龙 2004 ： 1))と呼ぶこともある。後方指示では指すものは指示詞の後から現れるが、この場合も「先行詞」という語を使う(白川 2006：13)。小野 2013 では、現場指示の「指示対象」と区別して、文脈指示用法における指示詞が指すものに対して「指示事象」という用語を用いているが、本論文では用法に関わらず指示詞の指す対象を「指示対象」という用語に統一した。本論文では、以降、小野 2013 を引用する場合に「指示事象」という用語を「指示対象」に置き換える。

指示対象の解釈が発言場面で知覚できる非言語的文脈によってなされる用法には、「眼前指示」、「外界照応」(山梨正明 1992：4)、「直示」、「ダイクシス」、“exophora”(Halliday & Hasan1976：33)、“exphoric reference” (钱榕 2009：188)、“deixis”、“deictic usage”(讃井 1988：2)、“当前指”(吕叔湘 1985：202) 、“当前指示(deictic reference)”(陈平 1987：84)、“现场直指”、 “外指”等様々な名称があるが、本論文では「現場指示」という名称で統一する。

指示対象の解釈が言語的文脈によってなされる用法には、「文脈照応」(山梨 1992 ： 4)、“anaphora”、 “endophora” (Halliday & Hasan1976：33)、“endophoric reference” (钱榕 2009：188)、 “话语复指”、“语内照应”、“内指”等様々な名称があるが、本論文では「文脈指示」という名称で統一する。

指示対象が指示詞よりも前の言語的文脈に現れる指示は、「前方照応」(山梨 1992 ： 4)、「逆行照応」(安藤貞雄ら訳 1997：2) 、“back-ward anaphora”、 “referring back(石毓智 1997：3)”、“回指(吕叔湘 1985：203)”等様々な名称があるが、本論文では「前方指示」という名称で統一する。

指示対象が指示詞よりも後の言語的文脈に現れる指示は、「後方指示」(山梨 1992 ： 4)、「順行照応」(安藤貞雄ら訳 1997 :22)、 “cataphora / forward-pointing(陈平 1981：40)”、中国語では“前指(吕叔湘 1985 ： 205)”“后指(陈平 1981 ： 40)”“下指(照应)(刁世兰 2006)”“预指(许余龙 2007)”等と呼ばれるが、本論文では「後方指示」という名称で統一する。

指示対象が観念の中に浮かべている事物である用法は「観念指示」(庵 2007 ： 43)、「観念対象指示」(堀口 1987：30-34)、「エピソード記憶」(牧野美奈子 1993：103)、「記憶指示」(木村 2012)等と呼ばれるが、「観念指示」という名称で統一する。

話し手と書き手を共に「話者」と呼び、聞き手と読み手を共に「受信者」と呼ぶ。

本論文で、「文脈的要素」、「文脈的指示」、「前方の文脈」のように、「文脈」という用語を用いる場合、「文脈」とは基本的には「言語的文脈」を指すこととする。

１．６　本論文の構成

この論文の構成は以下の通りである。

第 1 章　はじめに
第 2 章　中国語の指示詞選択に関する先行研究
第 3 章　相手の発言を指示する場合
第 4 章　自分の発言を単独の指示詞で指示する場合
第 5 章　指示詞が人称代名詞と共起するとき
第 6 章　まとめ
第 7 章　むすびに

第 1 章では、研究対象、研究目的、本論文における基本的な立場、研究方法、本論文で用いる用語、本論文の構成を説明する。

第 2 章では、指示詞の選択基準として先行研究が指摘している点を紹介しながら解決されていない問題点を浮き彫りにして本論文が扱う言語現象を指定する。また本論文が扱う言語現象における指示詞選択の解明がなぜ特に必要であるのかを述べる。

第 3 章及び第 4 章では、相手の発言内容を指示する場合と、自分の発言を単独の指示詞で指示する場合に分けての指示詞の使用状況を分析し、先行研究のみからでは説明できない言語現象を説明可能で、さらに中国語学習者が使用するのに現実的でより簡明な指示詞の選択基準を提案する。また、相手の発言内容を指示する場合と、自分の発言内容を指示する場合の指示詞の選択基準が、互いにどのように関連し合っているのかを考察し、またそれらが現場指示用法における指示詞の使い分けとどのように関係しているのかについても考察する。

第 5 章では、指示詞が人称代名詞と共起する場合について、先行研究でほとんど触れられていない“我们这些人”“你们那些人”“他这个人”といった形式において、指示詞はどのように使い分けられているのかを分析する。ここでは、現場的指示、観念的指示、文脈的指示の全ての用法を視野に入れて検討する。

第 6 章では、本論文の第 3 章から第 4 章の部分で新しく得た指示詞の選択基準と、第 2 章で紹介したこれまでに得ている指示詞の選択基準の優先順位を分析し、中国語の文脈指示用法における指示詞選択の全体像を示す。さらに、純然たる文脈指示用法における指示詞選択と、第 5 で検討した、現場的指示、観念的指示、文脈的指示が同時に可能な場合の指示詞選択とでは、同じ文脈指示であってもどのように異なるのかを比較する。そしてその検討を通して、中国語の指示詞の本質的特徴に迫る。

第 7 章では、本論文の研究成果の意義、及び今後の課題を述べる。

２．　中国語の指示詞選択に関する先行研究

本章では、中国語の指示詞選択に関する先行研究を概観する。2.1 では用法に区分せず指示詞全体を総括的に扱った研究、2.2.1 では現場指示用法、2.3 では観念指示用法、2.4 は、本論文が主に研究対象とする文脈指示用法を扱う。そして、これまでの研究からでは解決されていない問題点を浮き彫りにして、本論文が扱う言語現象を指定する。

２．１　指示詞の包括的研究

吕叔湘 1985 は、中国語の“这/那”の使い分けに関して次のように指摘した。

> 这和那，一个指近，一个指远，本是对待的。…但这和那不并举的时候，这的近指性和那的远指性都会弱化而近于中性。近指和远指的分别，基本上是空间的，但也往往只是心理的。因此，有同一事物，先说那，后说这的，这是由于心理距离的改变，也可以说是观点的移动。(吕叔湘 1985：187-188)(原文では文字の下に点が打ってある部分を筆者が下線にした)

> “这”と“那”は、一つは近いことを指し、一つは遠いことを指しており、もともと対立するものである。ただし这と那が両方出てこないときは、“这”の近指性と“那”の遠指性はどちらも弱まり中性に近づく。近指と遠指の区別は、基本的には空間的なものであるが、往々にして心理的なもののみである。このため、同一の事物について、はじめ“那”といったのに、後で“这”ということがあるが、これは心理的距離の変化によるもので、観点の移動ともいえる。

このように、吕叔湘 1985 は“这” と“那”の対立を遠と近の対立であるとし、空間的な遠近を基本としながらも、しばしば心理的な距離によっても区別されることを指摘した。

梁慧 1986 は、中国語の指示詞の使用原則を次のように示した。

> ここまで分析してきて、中国語の「这・那」は、遠・近、既知・未知でとらえられていることが分かった。その使用原則は次のようである。

(a)「这」は空間的・時間的に話し手に近いもの、また、空間的・時間的に話し手から一定の距離にあるものであっても、聞き手にもよく知られ、精神的に近いと感じられるものを指示するのに用いる。

(b)「那」は、空間的・時間的に話し手から離れたもの、しかも聞き手がまだ知らないものを指示するのに用いる。

(c)ただし、空間的・時間的に話し手から離れたものを指す場合、その指示対象の存在する時間と発生する時間の客観性が強調されるとき、聞き手が知っているものであっても、「这」で指すことができない。(梁慧 1986：14)

吕叔湘 2000《现代汉语八百词(增订版)》の“这”系列と“那”系列の項目を見比べても、それらの指示詞の最も大きな違いは、“这”系列は「近」を指すのに対し、“那”系列は「遠」を指すことであることが見て取れる。他の特徴的な点としては、“那”は、〔代詞〕の④に記されているように、結果を表す節を導く接続の機能を備えている、という点が挙げられる。

这 zhè

〔指〕[3]1.指示比较近的人或事物。

2. 这 + 一 + 动／形。‘这’加强语气，同‘这么、这样’。

3. 口语中用在动词、形容词前，表示夸张,同‘这个’。

〔代〕 1. 代替比较近的人或事物。

2. 与‘那’对举，表示众多事物，不确指某人或某事物。

3. 等于‘这些’。

4. 口语中指现在,有加强语气的作用，后面常用‘就、才、都’等。

(吕叔湘 2000：656-658)

[3] 指示词 指示词包括指别词(作用类似形容词)和指代词(作用类似名词)两类。因为很多词兼属于这两类，也可以把这两类合成一类。(吕叔湘 2003：15)

指示代詞　指示代詞には指示詞(その機能は形容詞に近い)と代名詞(その機能は名詞に近い)の2種類があるが、多くの語がこのどちらにも属するため、合わせて1つとしてもよい。(吕叔湘 1992：7)

凡例によると中国語では〔指〕は“指别词”、〔代〕は“代词”を指す(吕叔湘 2003：15)。日本語訳では、中国語の“指别词”が「指示詞」、“代词”が「代詞」と訳されている(吕叔湘 1992：序ⅳ)。

这 zhè

〔指示詞〕①近くの人、あるいは事物を指す。

②这 + 一 + 动／形　‘这’は意味を強める。‘这么・这样’に同じ。

③(口)動詞・形容詞の前に用いる。誇張を表す。‘这个’に同じ。

〔代詞〕①近くの人・事物に代えて用いる。

②‘那’と対にして用いる。多数の事物を表し、特定の人や事物を指さない。

③‘这些’に同じ。

④(口)現在を指す。意味を強める。ふつう後ろには‘就、才、都’などを用いる。

(吕叔湘 2003 :478-480)

那 nà

〔指〕1.指示比较远的人或事物。

2. 那 + 一 + 动／形。要有后续句。‘那’加强语气，同‘那么、那样’。

3. 口语中用在动词、形容词前，表示夸张,同‘那个’。

〔代〕1. 代替比较远的人或事物。

2. 与‘这’对举，表示众多事物，不确指某人或某事物。

3. 等于‘那些’。

4. 引进表后果的小句，起连接作用。同‘那么’。

(吕叔湘 2000：396-397)

那 nà

〔指示詞〕①比較的遠くにいる人や事物を指す。

②那+ 一 + 动／形　必ず後ろに接が続く。‘那’は意味を強める。‘那么・那样’に同じ。

③動詞・形容詞の前に用いて誇張を表す。(口) ‘那个’に同じ。

〔代詞〕①比較的遠いところにいる(ある)人と事物の代わりに用いる。

②‘这’と対にして用いる。事物が多いことを表す。特定の人や事物を指さない。

③‘那些’に同じ。

④結果を表す節を導く。接続の機能を果たす。‘那么’に同じ。

(吕叔湘 2003 :274-275)

崔应贤 1997 は、全体と部分という対立に“这”“那”がどう対応しているかに関して次のような点を指摘している。

在同一语言环境里边,如果对人或事物多个现象特征的描述有总有分,需要用这两个指示代词去指称的时候,他们在往往有特定的分工：“这”用来统指整体,“那”用来列举局部：“这”所指对象的外延范围可包容“那”的所指。(崔应贤 1997：126)

同一の言語環境の中で、もし人あるいは事物に対する多くの現象特徴の描写に全体と部分とがあり、この二つの指示詞を用いて指示しなければならないとき、それらは往々にして特定の分業を行っている。すなわち、“这”を用いて全体を一括して指し、“那”を用いて局部を列挙する。“这”の指示対象の外延範囲は“那”の指示対象を包み込む。

崔应贤 1997 はこの点が、遠近の概念と関連があることを指摘し、次のように述べた。

这种分辨，仍是建立在两者原本存在的近指远指语以基础上的。在人们的观察意识里边，事物的大小与视觉距离多能构成相对关系: 大则近，远则小。(崔应贤 1997：126)

このような違いは、やはり二者に元来存在する近称語遠称語という基礎の上に成り立っている。人が観察意識の中に、物の大きさと視覚距離は互いに関係している。すなわち、大きいということは近いということ、遠いということは小さいということである。

このように、中国語の指示詞“这”“那”の最も基本的な使い分けは、“这”が「近」を指し、“那”が「遠」を指す、ということであることが先行研究で示されてきた。

中国語の指示詞選択において、具体的に何を「近」とし、何を「遠」とするのかについ

て現場指示用法で本格的に検討を行ったのは木村英樹 2012 の研究である。本論文では、文脈指示用法について主に論じるが、文脈指示用法における指示詞選択が現場指示用法における指示詞選択とどのように関連しているのかを検討するため、次の節で木村 2012 の研究を概観する。

２．２　現場指示

木村 2012 は現場指示を、話し手が聞き手めあてに発話行為を行う「対話」と、聞き手が存在しない、あるいは聞き手をめあてとしない、話し手一人の「独言」または「内言」の状況に分けて考察した(木村 2012：57-77)。以下にその内容を概述する。

２．２．１　対話の場合

木村 2012 によれば、現場指示用法では、「対話」において指示詞選択は次のようになされている。

話し手にとって「近い」と認識された現場の事物は{这}で指され、逆に「遠い」と認識された事物は{那}で指される(木村 2012：60)。

ナレの領域に対立してナレの領域というものをマークする指示形式を特に持ち合わせていない中国語では、対象が自分にとって遠い存在だと積極的に認識されない限り{这}で指されてよい。逆に、自分にとって遠いと感じられる対象は、聞き手に近いものであっても遠称の{那}が用いられる(木村 2012：64)。また、聞き手が話し手自身と共有の場にあると意識された視点である「包含的視点」がとられた場合は、聞き手に近い対象が話し手自身に近い対象として捉えられ、{这}で指し示され、「対立的視点」がとられた場合は、近距離の聞き手に属する対象であっても{那}で指し示される。さらに、中国語の対話においては、包含的視点がより常態的な状況としてあり、対立的視点は有標的状況として成立する(木村 2012：66)。

２．２．２　独言・内言の場合

木村 2012 によれば、聞き手をめあてとしない、話し手限りの「独言」や「内言(すなわ

ち心理内言語)」では、話し手は自分が知覚し、注目した対象について、一人叙述を展開するのみであるために、対象を自分(ワレ)の側に引き寄せる傾向が強い。木村は次のような場面の例を挙げている。

山の中腹から眼下に広がる海沿いの町並みを見下ろしていると想定してみよう。海辺の道路に沿って建つ白い瀟洒な建物が目に留まる。見慣れない建物である。そこで、隣に居合わせる友人に尋ねる。当然指示詞は遠称の{那}が用いられる。{这}はこの場合やはり不適切である。

(1) 你知道那是什么楼吗？那个白色的。
[あれ何の建物か知ってる？あの白いの。]
ところが、人に問い掛けるのではなく、「はて、何の建物だろう？」と一人つぶやく場合には、
(2) 这是什么楼?
［これは何の建物だろう？］
のように、{这}が用いられても一向に不自然ではない[4]。(木村 2012：74-77)。

このように、木村 2012 は、聞き手めあての対話とは異なり、独言や内言は、相手に対象の相対的地位を教えるという伝達行為を必要としないため、中国語では、その注目との対象と話し手との間の実空間上の相対的な隔たりは捨象され、対象は総じて「近い」ものと認識される、言い換えればワレの領域内のものと認識される傾向が強くなるとした(木村 2012：76)。

２．３　観念指示

木村 2012 によれば、日本語における観念指示[5]では、「その節」のような慣用句的なも

[4] 木村 2012 は、「ただし、次のように、空間移動の表現の場合には、たとえ独言や内言であっても、遠くの対象にはやはり{那}が用いられる。
到那个楼怎么走呢?
[あの建物へはどうやって行くんだろう？]」と述べている(木村 2012：76)。
[5] 木村 2012 はこの用法に「記憶指示」という用語を充てているが、本論文では同用法を

のを除けば、すべて遠称の「ア」が用いられるが、中国語でもやはり{那}が用いられている。この種の{那}が対話の場で用いられる場合、自分が指示する対象が、その指示表現だけで相手にも同定可能だという見込みが話し手の側にある場合のみ運用が可能になる(木村 2012：77-80)。木村は次のような例を挙げている。

(3)“次官，会开得怎么样了？”
“没有任何进展。”
“那么还是那个在作怪啰!”
“唉？那个指的是什么？”
“就是上次说的，贸易代表团中有两个人被拒绝入境，是不是？”(《金环蚀》)

「次官、どうですか会議は？」
「なんにも進展しないね」
「すると、やっぱりあれが祟っているんですか」
「え？……あれって何だね」
「例の、ほら、貿易代表団の中の二人ばかりを入国拒否したでしょう」(『金環蝕』)(木村 2012：79-80)

ただし、時点の表現については、日本語とは異なり、相手が同定し得ない時間的対象についても観念指示の{那}が用いて指すことが可能であることも指摘し、下のような例を挙げている(木村 2012：80-83)。

(4)那天我见着小王，他说他要到上海去做事了。
[あの日、王くんに会ったら、もうすぐ上海に仕事に行くって言ってました。]

さらに、上の例のように、聞き手は知るすべがなく、専ら自分の記憶にのみ存在するある時点を観念指示的に{那}が用いて指すのは、未来の時点を対象とする場合には語用論上不可能であり、未来時を指す指示表現は必ず、文脈指示的な環境でしか──すなわち、聞き

「観念指示」という用語で統一しているため、引用するさい「記憶指示」を「観念指示」という用語に置き換えている。以下同様。

手にもそれがいずれの時点を指し示しているのかが文脈によって同定できるかたちでしか――用いることができないことも指摘した(木村 2012：83-84)。

２．４　文脈指示

本節では、本論文で主に扱う言語現象を指定するために、すでに小野絵理 2013 において議論された文脈指示用法の指示詞選択基準にはどのようなものがあるのかを紹介していく。それぞれの指示詞の選択基準が一体どのような基準であるのかを説明し、典型例を挙げて、それが選択基準として妥当或いは妥当ではないと判断した結論を述べる。

２．４．１　指示対象と指示詞の距離

指示対象が言語的文脈に発生してから、それが指示詞で指示されるまでの距離(以下「時間的距離 1」と称する)は指示詞の選択に大きく関わっている。時間的距離 1 は、書面の文章であれば、テクスト間距離のことであり、音声による発話であれば、指示対象が発話されてから、それが指示詞によって指示されるまでの時間的隔たりのことである。

以下は時間的距離 1 が大きいと“那”が用いられることを示す典型例である。

(5)[名前の綴りをきく作業が他のやりとりによって中断された後に、もう一度その名前を聞き直す場面]

一点模糊的冲动促使警察疑心地看看汤姆。

“那么你的车是什么颜色呢？”

“是一辆蓝色的车子，一辆小轿车。”

“我们是刚从纽约来的。”我说。

有一个一直在我们后面不远开车的人证实了这一点，于是警察就掉过头去了。

“好吧，请你让我再把那名字正确地……”（《了不起的盖茨比》）

何かが漠然とではあるが警官を刺激し、彼はトムに疑惑の目を向けた。

「ところであんたの車は何色だね？」

「ブルーのクーペだ」

「僕らはニューヨークから今ここへ来たばかりですよ」と僕は言った。
彼らのすぐ後ろを運転していた人が、そのとおりだと口添えしてくれたので、警官は興味を失ってもとの作業にもどった。「さあ、しばらく邪魔をせんでくれ。（φ）名前の綴りをもう一回きちんと――」(村上春樹訳 2006：255-256)

次の例は、前方の言語的文脈で「ギャツビー」という名前が出てきてから、指示詞で指示されるまでの間に言語的にも、非言語的にも、様々な他のやりとりがなされ、ここでようやく再び「ギャツビー」について話を戻そうと試みている場面で、“刚才”という言葉も用いられているが、やはり“那”が用いられている。

(6) “This Mr. Gatsby you spoke of is my neighbor ——” I said. (*The Great Gatsby*)
“你刚才提到的那位盖茨比先生是我的邻居……”我开始说。(《了不起的盖茨比》)
「さっき君が言ったギャッツビーという人だけど、実はうちの隣に――」と僕は言いかけた。(村上春樹訳 2006：35)

時間的距離 1 が大きいことにより“那”が選択されるというこの基準は、他の前方指示に関わる様々な基準の中でも、かなり優先度の高い基準であるように思われる。なぜなら、例(6)は英語では this が、中国語では“那”が用いられているが、小説 *The Great Gatsby* 全体の中で、英語の指示詞 this が中国語の指示詞“那”に訳されている唯一の例であるからである。

筆者の見解では、時間的距離 1 が大きい場合、“那”が用いられるという基準は次のような理由による。指示対象が指示詞の直前にあり、聞き手に指示対象を取り違えて判断される可能性が少ない場合と比べて、指示対象と指示詞の間の時間が長く、特に指示対象と指示詞との間に他のやりとりが挟まっている場合には、指示詞は、指示対象が他の事物と過って認定されないように確実に受信者を指示対象に導くという機能が重視されるため、指示詞が指しているものは文脈的に「遠くにある」ことを示さなければならず、指示対象が誰に関することであるか、話者は指示対象に対してどのような態度をとるのか、などといった他の要素はあまり考慮されない。

この、時間的距離 1 の大小という基準は、指示対象が相手の提起した事柄であったとしても、話者がその指示対象を復唱する等して、指示詞を発話する直前で口にしたときには

“这”が用いられやすいことの説明にもなる。これは、時間的距離 1 が短くなると同時に、話者が自分で口にすると、その指示対象が話者の意識の中に取り込まれ、近くに感じやすいからでもあるだろう。

(7)“是你搞的，汤姆，”她责怪他说，“我知道你不是故意的，但确实是你搞的。这是我的报应，嫁给这么个粗野的男人，一个又粗又大又笨拙的汉子……”

“我恨笨拙**这**个词，”汤姆气呼呼地抗议道，“即使开玩笑也不行。”。(《了不起的盖茨比》)

「あなたのせいよ、トム」と彼女は咎めるように行った。「わざとやったんじゃないことはわかっているけど、でもとにかくあなたのせい。獣みたいな人と結婚すると、こういう目にもあわされるのよ。なにしろ人並みはずれてうすらでかくって、腕力のあり余った男と――」

「うすらでかい**という**言葉は気に入らんな」とトムは気を悪くしたように言った。(村上春樹訳 2006：29)

例(7)では、中国語の太字下線部の指示詞が指している指示対象が前方の文脈のどの部分に該当するかが明白で、話者が上のように“笨拙”という言葉を復唱する必要がなく、復唱せずに指示詞を用いて言うとしたら、“我恨**那**个词”や“我不喜欢**那**个词”でも不自然ではない。ところが、話者が指示対象を復唱したことにより指示対象と指示詞が隣あっているために、時間的距離 1 が近くなり、“这”の使用が促されている。

この点をより多くの例文から検証するために、北京大学中国语言学研究中心“现代汉语”コーパス(以下 CCLM)で“这个词”と“那个词”をそれぞれ検索してみたところ、“那个词”は全部で 37 の結果しかなく、“那个词”の直前に、句読点や他の語をまたがずに指示対象があるものは、下に挙げる 2 例 / 37 例のみにとどまった。一方、“这个词”の検索結果の数は 1856 にのぼり、最初の 100 例をサンプルとして分析してみたところ、“这个词”の直前に、句読点や他の語をまたがずに直接隣り合って指示対象があるものは、76 例/100 例にのぼった。

以上のことから、時間的距離 1 は指示詞の選択に影響を及ぼしており、時間的距離 1 が大きくなれば 、指示詞は“那”が選択されやすく、時間的距離 1 が小さく、同じ文の中で指示対象と指示詞が隣り合って停頓がほとんど無い場合には、指示詞は“这”が選択さ

れやすいことがわかる。

２．４．２　時間的要素

２．４．２．１時間指示

しばしば指示詞の後に何らかの時間表現が伴い、指示対象が事件等ではなく、特定の時間であるとき(以下「時間指示」と呼ぶ)について考える。注意されたいのは、下の例(8)のように、指示詞が現在の時間を指示している場合、それは文脈指示用法ではないことである。したがって、全体では未来の時間を表す“明年这会儿(明日の今頃)”、“明天这个时候(明日のこの時間)”、“下个月的这会儿(来月の今頃)”（郭玉玲 2000：29)といった表現も、指示詞自体が指しているのは言語的文脈ではない。

(8) 我**这会儿**忙着做饭， 过一会儿再跟你玩儿。
私は今急いでご飯を作っているから、しばらくしてから遊びましょう。

よって、文脈指示用法における時間指示は、過去か未来の時間のみということになる。過去の時間指示については、郭玉玲 2000 の指摘のとおりである。

> “这 + 时间词”可以用来指代过去的现在。某事已经发生了,我们并没把说话的时刻作为定时点,而是把谈论的那个时间定为定时点,用“这 + 时间词”来表示。“这 + 时间词”对说话的时刻往往属于过去,但对所谈论的事来说,却是眼前发生的。换一种方法解释,这就是汉语的过去现在时。(郭玉玲 2000：29)

> “这＋時間詞”は過去の現在を代用指示することができる。あることが既に発生し、我々が話している(発話現在の)時刻を参照時点とせず、議論になっている(当時の)時間を参照時点とするとき、“这＋時間詞”を用いて表す。“这＋時間詞”は話している時刻からするとしばしば過去に属するが、議論している事柄からすると、目の前で起こっているのである。別の方法で説明するならば、これは中国語の過去の現在時なのである。

以下はその例である。過去の時間指示において、(9)のように、“那”が用いられている場合は、発話時点を参照時点としており、(10)のように、“这”が用いられている場合は、議論になっている当時の時間を参照時点としている。

(9)汤姆对于黛西单独四处乱跑显然放不下心，因为下一个星期六晚上他和她要一道来参加盖茨比的晚会。也许是由于他的在场，那次晚会有一种特殊的沉闷气氛—它鲜明地留在我记忆里，与**那个夏天**盖茨比的其他晚会迥然不同。(《了不起的盖茨比》)

トムは明らかに、細君が一人で遊び歩いていることに心を乱されたらしく、次の土曜日の夜にはデイジーとともにギャツビーのパーティーに顔を見せた。たぶん彼の存在が一種の独特の重苦しさを醸し出していたせいだろう、**その夏**に催された一連のギャツビー主催のパーティーの中で、その夜のことをとりわけよく覚えている。(村上春樹訳 2006：199)

(10)“请告诉他卡罗威要见他。”

“我又不能把他从芝加哥叫回来，对不对？”

正在**这时**有一个声音，毫无疑问是沃尔夫山姆的声音，从门的那边喊了一声“斯特拉”。(《了不起的盖茨比》)

「キャラウェイが来たとお伝え願えますか？」

「シカゴから本人を連れてくるわけには参りませんよ」

まさに**そのとき**ドアの向こう側から、明らかにウルフシャイムとわかる声が「ステラ！」と叫んだ。(村上春樹訳 2006：306)

未来の時間指示については、その時間的距離がどれほど近くても“那”が用いられる。

(11) A：你爸做什么工作?

B1：明天再见! **那**(*这)**时候**再说吧。

B2：一分钟后再见! **那**(*这)**时候**再说吧。(作例)

A：あなたのお父さんは何の仕事をしているの。

B1：明日会いましょう。そのときにまた話しましょう。

B2：一分後に会いましょう。そのときにまた話しましょう。

このように、過去の時間指示においては、発話時点を参照時点として指示する場合には“那”が、議論になっている当時の時間を参照時点として指示する場合には“这”が用いられる。未来の時間指示においては、常に“那”が用いられる。

２．４．２．２指示内容の時間と指示時間

２．４．２．２．１客観的時間距離と指示詞選択

指示対象の内容が発生あるいは存在した/する時間と、指示詞で指示した時間との時間的関係(以下、この要素を「時間的要素 2」と呼び、その距離を「時間的距離 2」と呼ぶ)についてみていく。

次は指示対象の内容が過去に属するものである。

(12a)我 20 年前在日本认识了我老婆，这是我人生中最重要的一件事。

(12b)我 20 年前在日本认识了我老婆，那是我人生中最重要的一件事。(作例)

私は 20 年前に日本で妻と知り合いました。これは私の人生の中で最も重要な出来事です。

上の例は、前方で述べた 20 年前の出来事を指示している場面である。用いる指示詞によって表現している事柄に違いは 2.4.2.2.3 で述べるが、“这”、“那”の使用が共に可能である。このように、指示対象の内容が過去に属する事件である場合、実際の客観的な時間的距離 2 によって、“那”を用いる場合と“这”を用いる場合との具体的な線引きをすることはできない。

次の例は、指示対象が現在に属するものである。

(13) [年上の女性教師が問題を起こした年下の女性教師を激しく責め立てている場面]

あなたのせいで、あたくしたちが、少なからず迷惑を被っているということ、そのこ

とだけは、どうぞお忘れにならないように。(父親の意思に背いて)あなたがおやめにならないのは(φ)勝手だけれど、でも、あなたに出来ることといったら、一日中職員室にいることぐらいじゃないですか?(*魔女の条件*、(　)内筆者挿入、以下同じ)

因为你的关系，给我们增添了莫大的麻烦。这件事请你不要忘记。你不听从你父亲的意思。那是你的自由，但是如果说有什么事你可以做的话，那就是一整天都待在职员室里。(《魔女的条件》、TRB 工作室、石青璇制作、ネイティブチェック済み、以下同じ)

例(13)の下線部“这”の指示対象と、下線部“那”の指示対象の内容はどちらも同じく現在に属する。しかし、前者は“这”、後者は“那”で指示されている。このように、指示対象の内容が現在に属している場合も、用いられる指示詞は“这”と“那”の両方の可能性がある。

次の例は指示対象が未来に属する場合について見てみる。

(14)光：このままどっか行こうか。そしたら、ずっと一緒にいれるでしょ。
未知：そうしたいけど……。親にね、辞表を出せって言われてるの。そうするしかないのかな。(*魔女の条件*)
光：我们就这样到什么地方去吧。这样就能一直在一起。
未知：我也想那样做，可是……。我爸爸叫我递辞呈。大概也只有这样吧。

例(14)では、未然の事柄を指示するのに、“这”系列、“那”系列の両方が使われている。このように、指示対象の内容が過去、現在、未来のいずれに属する事柄も、“这”で指示される場合と“那”で指示される場合があり、時間的要素 2 のみによって、また時間的距離 2 のみによって“这”と“那”の使用を決定することはできない。

指示対象が過去に属する場合、現在に属する場合、未来に属する場合、特定の時間に属さない場合のいずれの場合でも、話者が指示対象に組み込まれることを示そうとしているか、それとも指示対象との関係を否定し、距離をおくかによって指示詞が選択されている。話者が指示対象に組み込まれることを示す場合には“这”が、話者が指示対象との関係を否定し、距離をおく場合には“那”が用いられる。具体的な典型例を以下に示す。

２．４．２．２．２指示対象の内容が現在に属する場合

上で見たように、例(13)は、二つの指示対象に関して、指示対象の時間的要素 2 も現在という点で一致している。しかし、中国語訳において、一方は“这”で、一方は“那”で指示されているのは、前者は「迷惑を被っている」すなわち指示対象が自分に影響を及ぼしており、話者が指示対象に組み込まれることを示そうとしているのに対し、後者は「あなたがおやめにならないのは勝手」すなわち、話者が自分には関係が無いことを示そうとしているためである。

(13) [年上の女性教師が問題を起こした年下の女性教師を激しく責め立てている場面]
あなたのせいで、あたくしたちが、少なからず迷惑を被っているということ、そのことだけは、どうぞお忘れにならないように。(父親の意思に背いて)あなたがおやめにならないのは(φ)勝手だけれど、でも、あなたに出来ることといったら、一日中職員室にいることぐらいじゃないですか？(*魔女の条件*、(　)内筆者挿入)
因为你的关系，给我们增添了莫大的麻烦。这件事请你不要忘记。你不听从你父亲的意思。那是你的自由，但是如果说有什么事你可以做的话，那就是一整天都待在职员室里。

(13)のように、指示詞は話者が指示対象に関係しているかどうかによって選択し分けられている。指示対象の内容が現在に属する場合、「話者が指示対象に組み込まれていることを示そうとする」とは、話者が指示対象と関係があること、指示対象が話者に影響を及ぼすこと、自分自身が取り組まなければならない事柄として真剣に考慮していることなどを示そうとしていることを指し、逆に、「話者が指示対象と距離を置く」とは、話者が指示対象と関係が無いこと、指示対象が話者に影響を及ぼさないこと、話者が指示対象について真剣に考慮するつもりがないことなどを示そうとしていることを指す。

２．４．２．２．３指示対象の内容が過去に属する場合

上で見たように、(12a)と(12b)は、共に前方で述べた 20 年前の出来事を指示している場面であるが“这”、“那”の使用が共に可能である。

(12a)我 20 年前在日本认识了我老婆，**这**是我人生中最重要的一件事。

(12b)我 20 年前在日本认识了我老婆，**那**是我人生中最重要的一件事。(作例)

私は 20 年前に日本で妻と知り合いました。これは私の人生の中で最も重要な出来事です。

(12a)のように“这”を用いると、前方で述べた“我老婆(私の妻)”が、発話時点での話者の妻と同一人物であると解釈され、(12b)のように“那”を用いると、前方の文脈で述べた“我老婆(私の妻)”と発話時点での話者の妻とが別の人であるか、あるいは前方の文脈で述べた“我老婆”はもう亡くなっているかのどちらかの意味にとられる。このように、指示対象が過去に属する場合、「話者が指示対象に組み込まれる」とは、単純に話者に関することかどうかだけではなく、指示対象の状態が発話時点でも続いており、話者に作用し続け、影響を及ぼし続けているか、という点を考慮に入れる必要がある。指示対象が過去に属する場合には、「指示対象に距離を置く」とは、当然自分に関することではないことを示すことが含まれ、それに加えて、たとえ自分に関係することであっても今の状況とは異なっていることを示す場合も含まれる。

指示対象が過去に属する場合、話者が真剣に考えていることであったり、指示対象が話者に関することであったりするにも関わらず、“那”を用いると、しばしば(15)のように、指示対象が現在の自分には関係の無いこと、あるいは当時の状況と発話時点での状況が異なっていることが強調される。

(15) 盖茨比走过来站在她身边。

“黛西，**那**一切都过去了，”他认真地说，“现在没什么关系了。就跟他说真话——你从来没爱过他——一切就永远勾销了。”（《了不起的盖茨比》）

ギャツビーは、つかつかと歩いて言って、彼女の傍に立った。

「デイズィ、**そ**んなことはすっかり終ったんだ」熱をこめて彼は言った「もうなんでもありはしない。あの人にほんとのことを言ってやりたまえ——きみがあの人を愛したことはついぞないんだって——何もかもきれいさっぱり帳消しだって」(野崎孝訳 1993：183)

２．４．２．２．４指示対象の内容が未来に属する場合

上で見た例をもう一度見てもらいたい。

(14)光：このままどっか行こうか。そしたら、ずっと一緒にいれるでしょ。

未知：そうしたいけど……。親にね、辞表を出せって言われてるの。そうするしかないのかな。(*魔女の条件*)

光：我们就这样到什么地方去吧。**这**样就能一直在一起。

未知：我也想**那**样做，可是……。我爸爸叫我递辞呈。大概也只有**这**样吧。

(14)では“这”“那”が使い分けられているが、下線部太字の指示詞が指している指示対象は全て指示詞の話者に関係する事柄である。指示対象“这样就到什么地方去”は光にとって実現確信度が高く、“这”で指示されている。しかし、未知にとっては実現が確信できないため、“那”で指示されている。したがって、指示対象が近い未来に属しており、話者に関係しており、話者が指示対象に強い関心を抱いている場合でも、指示対象に対する実現確信度が低ければ“那”が用いられることがわかる。すなわち、指示対象の内容が近い未来に属する場合は、話者の指示対象に対する実現確信度が高いかどうかによって指示詞は選択されている。

話者が指示対象の実現に確信を抱いている場合、話者はその指示対象が実現した場合のことを真剣に考慮すべきであると考えており、特に指示対象が話者自身に関することであれば、その指示対象の内容から影響を受けると考える。逆に、話者が指示対象の実現に確信を抱いていない場合、たとえその指示対象が自分に関する事柄であっても、その指示対象は実現する可能性が低いので、自分は当該の指示対象からは影響を受けないと考え、指示対象が自分と関係がないことになり、指示対象と距離が置かれる。このように、話者の指示対象に対する実現確信度も、「話者が指示対象に組み込まれることを示そうとしているか否か」という基準に含まれる。

２．４．２．２．５指示対象の内容が特定の時間に属さない場合

指示対象は、普遍的真理の叙述や、論理関係を表す説明文や主張など、現在、過去、未来といった特定の時間に属すると言い難い場合もある。そのような場合の例でも、やはり、

話者が指示対象に組み込まれることを示そうとしているか否かによって指示詞は選択されている。

(16a)(日本人話者の場合)
如何走出地震之后的阴影，**这**(*那)是所有**日本人**要共同面对的问题。
(16b)(日本人以外の話者の場合)
如何走出地震之后的阴影，**那**(*这)是所有**日本人**要共同面对的问题。
(16c)(“日本人”を“我们”にした場合)
如何走出地震之后的阴影，**这**(*那)是**我们**要共同面对的问题。(作例)
(16a/b) どのようにして地震後の影から抜け出せばよいのか、**こ/それ**は日本人が共に直視しなければならない問題である。
(16c) どのようにして地震後の影から抜け出せばよいのか、**こ/それ**は我々が共に直視しなければならない問題である。

(16a)に示したように話者が日本人である場合、“日本人”には話者が含まれているため、“这”を用いなければ不自然であり、“那”を用いることはできない。また、(16b)に示したように、話者が日本人で無い場合、話者は指示対象に関して部外者であるため、“这”ではなく“那”を用いる。また、“日本人”の部分を“我们”に変えると、話者が誰であっても“那”を用いることは出来ず、“这”を用いる。このように、話者が指示対象に組み込まれるかことを示そうとしているかは、指示対象が特定の時間に属さないような場合にもあてはまる。

２．４．２．２．６まとめ

指示対象が過去に属する場合、現在に属する場合、未来に属する場合、特定の時間に属さない場合のいずれの場合でも、話者が指示対象に組み込まれることを示そうとしているか、それとも指示対象との関係を否定し、距離をおくかによって指示詞が選択されている。話者が指示対象に組み込まれることを示す場合には“这”が、話者が指示対象との関係を否定し、距離をおく場合には“那”が用いられる。

「話者が指示対象に組み込まれることを示す」とは、基本的には話者が指示対象と関係

があることを示すという意味であり、指示対象が話者に影響を及ぼすこと、指示対象が自分が取り組まなければならない事柄として真剣に考慮していること等を示そうとしていることを指す。指示対象が過去に属する場合には、指示対象の状態が発話時点でも続いており、話者に作用し続け、影響を及ぼし続けていることを示す場合を指す。指示対象が未来に属する場合には、話者の指示対象の実現に対する確信度が高い場合であり、実現確信度が高ければ、真剣に考慮する価値のあることであり、話者が指示対象から影響を受けると考えているからである。

一方、「話者が指示対象と距離を置く」とは、基本的に話者が指示対象と関係が無いことを示そうとしていることを意味し、指示対象が話者に影響を及ぼさないこと、話者が指示対象について真剣に考慮するつもりが無いこと等を示そうとしていることも含まれる。指示対象が過去に属する場合は、指示対象が自分に関することではないことを示す場合はもちろん、自分に関することであったとしても、発話時点での状況とは異なっていることを示す場合が含まれる。指示対象が未来に属する場合は、話者の指示対象に対する実現確信度が低い場合であり、実現確信度が低ければ、指示対象から影響を受けることはあまりないと考えるからである。

２．４．３　指示対象の発言者

次の例(17)(18)は、いずれも自分の発言を指示している例である。

(17)“你到底是什么人？”汤姆嚷了起来，“你是迈耶·沃尔夫山姆的那帮狐群狗党里的货色，这一点我碰巧知道，我对你的事儿做了一番小小的调查——明天我还要进一步调查。”（《了不起的盖茨比》）
「だいたい、お前はいったい何ものなんだ？」、トムが声を荒らげた。「マイヤー・ウルフシャイムとつるんでいる一味の一人だろう。それだけはたまたまわかった。身近をちょいと洗わせてもらったよ。明日になったらもっと詳しく調査してやる」(村上春樹訳 2006：243)

(18)“他和这个姓沃尔夫山姆的家伙在本地和芝加哥买下了许多小街上的药房，私自把酒精卖给人家喝。那就是他变的许多小戏法中的一个。我头一趟看见他就猜出他是个私

酒贩子，我猜的还差不离哩。”（《了不起的盖茨比》）

「こいつとそのウルフシャイムってやつはな、ここニューヨークとシカゴで、ぱっとしないドラッグ・ストアを片端から買い上げて、大っぴらにエチル・アルコールを売っているんだ。それがこいつのやっているインチキ商売のひとつだよ。最初に見たときから、酒の密造業者だろうと踏んでいたんだが、当たらずといえども遠からずってところだったね」(村上春樹訳 2006：243-244)

上の二つの例は共にの発言を指示しているが、(17)は“这”で、(18)は“那”で指示している。

下の例は他者の発言を指示している例である。

(19)A：我们还是保持一点距离吧。

B：为什么？为什么要说{这/那}种话?(作例)

A：私達、ちょっと距離をおきましょう。

B: どうして？どうしてそんなこと言うんだ？(作例)

この場合、相手の発言を“这”で指示することも、“那”で指示することもできる。(“这”と“那”でニュアンスがどのように異なるのかについては、3.2 で詳述する。)

このように、指示対象の発言者が話者自身であっても、他者であっても、“这”が用いられる場合もあれば、“那”が用いられる場合もあり、指示対象の発言者という基準のみによって、指示詞の選択を行えるわけではない。

２．４．４　話者の感情・態度

丁启阵 2003 は、心理距離という点を述べたさい、次のような点を指摘している。

表示关心、关切、喜爱等情感时，通常用“这.....”。

至于表示不关心、冷淡、讨厌、鄙视、仇视等感情时，则通常用“那”、“那.....”去

指称所关涉的人或事。(丁启阵 2003：29-30)

“関心、親しみ、愛着”といった感情を表すときには通常“这.....”を用いる。
“無関心、冷淡、嫌悪、軽蔑、敵視”等の感情を表す時には、通常“那”、“那.....”を用いて指示が関わる人や事柄を指す。

小野 2013 では、丁启阵 2003 がひとまとめにして述べたこれらの感情は「関心の有無」と、親しみや嫌悪といった「好意的/非好意的」とに分けて分析した。そのような手法をとったのは、強い関心を抱いていると同時に、嫌悪感を抱いているということがあり得るからである。次の例は非好意的な感情を抱いているにもかかわらず“这”が用いられている例である。

(20) “我一度爱过他——但是我也爱过你。”
盖茨比的眼睛张开来又闭上。
“你也爱过我？”他重复道。
“连这个都是瞎话，”汤姆恶狠狠地说，“她根本不知道你还活着。要知道，黛西和我之间有许多事你永远也不会知道，我俩永远也不会忘记。”（《了不起的盖茨比》）

「彼を愛したこともかつてあった——でもそのときだってあなたのことも愛していた」
ギャツビーは目を見開き、それから閉じた。
「私のことも愛していた？」彼は繰り返した。
「それだって眉唾だな」とトムは痛めつけるように言った。「デイジーは、君が生きているかどうかさえ知らなかったはずだ。いいか——僕とデイジーのあいだには、君には知りようもないことがいくつもある。君はご存じないが、僕ら二人にはどうしても忘れられないってことがな」(村上春樹訳 2006：241-242)

次の例は、指示対象は自分で言い出した自分の願いであり、話者は指示対象にも受信者に対しても嫌悪感や冷淡などの非好意的感情を持っているとは考えられないのに、“那”が用いられている例である。

(21)未知 ： とりあえず、私のうちに行って。親には連絡しておくから。ごめんね。一緒にいてあげられたらいいんだけど、今はそうもいかないし。(*魔女の条件*)

未知 :你先到我家去,我会跟父母说一声的。对不起。如果能够留下来陪你就好了, 但是现在没办法那样做。

非好意的な感情を表現しているのに“这”が用いられている(20)は、指示対象に対して“瞎话(眉唾である)”という判断を下し、その後にその判断を裏付ける根拠について述べている。指示対象に関して自分の主張を力説していることから、話者が自分の思考力を用いて真剣に指示対象を考慮していく姿勢があり、自分が強い関心を抱いていることを示している。一方、好意的な感情を持っているはずであるのに“那”が用いられている(21)は、“那样”を“这样”に変えることもできるが、やはり、“那样”と“这样”では、話者と指示対象の関わり度が異なる。“那样”の場合、指示対象について「シテアゲタイガソウモイカナイ」と客観的に述べたのみに過ぎず、“这样”に変えると、心からそうしてあげたいと願っており、今でもなんとかそうしてあげようと努力しているように捉えられるという。

これらのことから、自分が指示対象と関係していることを積極的に示そうとせず、客観的に意見を述べていることを示そうとする場合には、“那”が用いられることがわかる。そして、「好意的 / 非好意的感情の表現」という要素は指示詞の選択を決定づけているとは言えず、少なくとも「自分が指示対象に組み込まれることを示そうとしているか否か」という要素の方が選択基準として優先度が高い。

２．４．５　肯定/否定

丁启阵 2003 は肯定 / 否定について次のように述べている。

“这”、“那”两个系列的词本身都不含有肯定或否定的意思。这里这一组概念，指的是语句环境的一种评判倾向。例如下面三个句子:

A. 这样很好。

B. 这样（那样）. . . . . 不太好。

C. 那样不好。

A、B、C 三个句子分别代表了肯定、介于肯定否定之间、否定三种评判倾向。这三种倾向的句子， 跟“这”、“那”系列之间有着这样的对应关系: A 类句即肯定句更适宜用“这”系列， C 类句即否定句更适宜用“那”系列, B 类句即肯定、否定意思不明朗的句子， 则“这”系列、“那”系列均可。

“这”、“那”という二つの系列の語そのものはどちらも肯定或いは否定の意味を含んでいない。ここでこの一組の概念が指しているのは語句環境の一種の判定の傾向である。例えば次の三つの文がある:

A. 这样很好。

B. 这样（那样）. . . . . 不太好说。

C. 那样不好。

A、B、C の三つの文は肯定、肯定と否定の間、否定の三つの判定傾向を代表している。この三つの傾向の文と、“这”、“那”の系列との間には次のような対応関係がある。A 類の文すなわち肯定文は“这”系列により適しており、C 類の文すなわち否定文は“那”系列により適しており、B 類の文すなわち肯定、否定の意味がはっきりしない文は“这”系列、“那”系列どちらも可能である。

丁启阵 2003 はここで、否定及び肯定というのが、文法上のことで打ち消しの否定成分の有無について述べているのか(良い/悪い：肯定、良くない/悪くない：否定)、それとも心理的に肯定的であるか否定的であるか(良い/悪くない：肯定的、悪い/良くない：否定的)について述べていない[6]。また、丁は、指示詞と否定 / 肯定が構文上どのような関係なのか、すなわち、A.B.C.のように指示詞が主語となり、述語部分で否定の形容詞で指示詞を評価している場合に限定されるのか、それとも打消しのついた動詞の後の目的語に指示詞

6 ただし、丁启阵 2003 がこれを主張するにあたって挙げた例文の中には、“(70) 你来看我? 那才怪! （老舍）(あなたが私を見に来るですって？まさか！)(丁启阵 2003：34)”という例があることから、必ずしも文法上の打ち消しの否定成分の有無について述べているわけではなく、肯定的であるか否定的であるかという概念を含んでいるようであると考えられる。ただし、丁启阵 2003 は、前の節で見た、“表示关心、关切、喜爱等情感时，通常用“这……”。……至于表示不关心、冷淡、讨厌、鄙视、仇视等感情时，则通常用“那”、“那……”去指称所关涉的人或事。(丁启阵 2003：29-30)”という要素を、同じ論文の中の別の節で「心理距離」という副題のもと扱っているため、前節で見た感情・態度とは別に肯定/否定という要素に注目しようとしたようである。

があるような場合などを含むのか等ということについて述べていない。しかし、どちらの場合で捉えたしても、この指摘を検証すると、実際は丁が上で述べているほど単純ではない。

北京语言大学现代汉语语料库(以下 BCC)で検索すると、重複例を消去すると、それぞれ“这样很好。”86 例、“那样很好。”4 例、“这样不好。”78 例、“那样不好。”15 例となった。(文学、2015 年 12 月 12 日調査)

这样很好。	86	那样很好。	4
这样不好。	78	那样不好。	15

これは、丁がより自然だとしている“那样不好。”という例よりも“这样不好。”という出例のほうが圧倒的に多いことを示している。更に、“这”と肯定の組み合わせである“这样很好。”と、“这”と否定の組み合わせである“这样不好。”の用例数にも大きな違いがないことも示している。

また、実際の言語資料でも、(22)(23)のように、“这”が否定と共に現れたり、(24)のように“那”が肯定と共に現れたりすることは全く珍しいことではない。

(22)这一次，她在桌上找到了一只小瓶(“刚才它肯定没在这儿，”阿丽思说)，瓶颈上系着一个纸标签，上面漂亮地印着两个大字:“喝我”。

说“喝我”当然挺好，可是聪明地小阿丽思是不会急于这么干的。

(《阿丽思漫游奇境记》)(陈复庵译 1981、中国对外翻译出版公司、以下同じ)

今度は、その上に小さなビンが見つかった(「これはたしかに前にはここになかった」とアリスは言った)、そしてその首のまわりに、大きな字で「私を飲め」という言葉がキレイに印刷されたレッテルがはってあった。

「私を飲め」というのは成程たやすいが、かしこい子供のアリスは、そういうことを急いでしようとは思わなかった。(尾上政次訳 2005：15)

(23) “好吧，我反正不走，”阿丽思说，“况且这不是一条正式的法令，是你刚才编出来的。”(《阿丽思漫游奇境记》)

「ふん、どっちにしても、あたしは出ていきませんからね。それに、いまのはちゃんとした規則じゃないわ。いまでっちあげただけでしょう」(山形浩訳 2000：105)

(24)“假使他活下去的话，他会成为一个大人物的，像詹姆斯•J•希尔那样的人，他会帮助建设国家的。”

“确实是<u>那样</u>，”我局促不安地说。(《了不起的盖茨比》)

「もしこんなことにならんかったら、あの子は偉大な人物になったはずです。ジェームズ・J・ヒルのごとき、国の要とも」

「<u>おっしゃるとおりです</u>」と僕は言ったものの、居心地は悪かった。(村上春樹訳 2006：303)

このように、肯定/否定の対立で指示詞が選択できるとは考えにくい。ただし、特定の構文では、“这”系列と“那”系列の片方しか用いられないという事象が存在する。王灿龙 2004 は、“这么”“那么”が否定の副詞と共に使われる場合の使用に関して、① 不 ＋P 指 ＋W、② 没(有) ＋P 指 ＋W、③ P 指+ 没(有) ＋W (P 指は指示詞“这么”或いは“那么”を表し、W は“谓词”或いは“名词”を表す)という三つの場合に分けて、考察し、① 不 ＋ P 指 ＋ W の場合に、W が形容詞であった場合、“这么”と“那么”のうち、“这么”は用いられず、“那么”のみしか用いられないことを指摘している。

この指摘の妥当性を検証するために、CCLM で“不这么”と“不那么”をそれぞれ検索してみたところ、“不这么”は全部で 597 の結果が、“不那么”は全部で 2288 の結果があった。それぞれの最初の 100 例をサンプルとして選ぶと、“不那么”の後に形容詞[7]が来ているものは、79 例 / 100 例であったのに対し、“不这么”の後に形容詞が来ているものは 8 例 / 100 例のみで、この 8 例のうち、7 例は“简单[8]”という形容詞が用いられていることから、“简单”を例外として扱うことにすれば、“*不 ＋ 这么+ 形容詞”という形はほぼ用いられないと言うことができる。

王灿龙 2004 は、“不 ＋P 指 ＋W”の W が形容詞であった場合に“那么”のみが用いられる理由を次のように述べている。

---

[7] 語の品詞の類別は中国社会科学院语言研究所词典编辑室(编)2005《现代汉语词典》第 5 版、商务印书馆に基づいて行った。

[8] はじめの 100 例の中で“不那么简单”という例は“不这么简单”と同じく 8 例あった。

一方面，“不”既然作为否定副词，那么，它加在形容词前面就意味着该形容词表示的性质或状态在当前语境中不存在，而近指词“这么”的语用前提就是某物“存在于当前时间或当前空间”，远指词“那么”则相反，它的语用前提是某物“不存在于当前时间或当前空间”。另一方面，结构“不 + P 指 + W”有一种潜在的表示比较的语法意义。这样一来，不仅在表示当前存在与否的语义上，“不”和“这么”相互矛盾，互不相容，而且拿同一性质或状态在同时、同地自比，既违反常理，也不合逻辑。因此，当 W 为形容词时，“这么”不能进入结构“不 + P 指+ W”。（王灿龙 2004：15）

一つの点として“不”は否定の副詞であるからには、それが形容詞の前に加わると、当該の形容詞が表す性質あるいは状態が目の前の言語環境に存在しないことを意味する。近称指示詞“这么”の語用前提は、あるものが「目前の時間あるいは目前の空間に存在する」ことである。遠称指示詞“那么”は反対で、その語用前提は、あるものが「目前の時間あるいは目前の空間に存在しないこと」である。もう一つの点として、“不 + P 指 + W”構造には、ある種の潜在的な、比較を表す文法意味がある。こうなると、目前に存在しているか否かの語義を表すという点において、“不”と“这么”が互いに矛盾しており、互いに相容れないというだけでなく、同一の性質あるいは状態を取り上げて、同時に、同じ場所で比べることになり、道理に反するだけでなく、論理にも合わない。このため、W が形容詞であるとき、“这么”は“不 + P 指+ W”構造に入ることができない。

肯定/否定によって指示詞が著しく偏る構造には他にどのようなものがあるのか、筆者は、BCC の文学、総合で“有这回事。”、“有那回事。”、“没有这回事。”、“没有那回事。”を検索し、重複例を消去したところ、それぞれの検索結果は、文学が“有这回事。”40 例、“有那回事。”0 例、“没有这回事。”26 例、“没有那回事。”8 例であり、総合では“有这回事。”20 例、“有那回事。”1 例、“没有这回事。”59 例、“没有那回事。”18 例であった。

(文学、2015 年 12 月 13 日調査)

有这回事。	40	有那回事。	0
没有这回事。	26	没有那回事。	8

(综合、2015 年 12 月 13 日調査)

有这回事。	20	有那回事。	1
没有这回事。	59	没有那回事。	18

上の結果をみると、“有＋指示詞＋回事。”という構造において、否定であっても肯定であっても“这”が使用されることがあるものの、“那”が使用される頻度は著しく低い[9]。この構造で“这”がほとんど使用できない理由は、上で王灿龙 2004 が述べた、“这么”が“不＋P 指＋W”構造に入ることができない理由と非常によく似ていると考えられる。すなわち、“那”は 2.4.2.2 で述べたように、話者が、自分と関係が無く、自分に影響を及ぼさないこと、関心がないことを示すのに対し、この構造の肯定形“有＋～＋回事。”は、それが実際にあることを主張しており、“那”が用いられる場合の語用条件と、肯定形“有＋～＋回事。”が相いれないためである。

このように考えると、他にも特定の構造では、表面的には、肯定/否定があたかも指示詞の選択を決定づけているかのように見えるものがあるかもしれないが、それはその構造の持つ意味が、ある指示詞が用いられる語用条件と相いれないために起きている現象であって、その語用条件は他の要素によって建てられたものであり、肯定/否定という要素を新たに指示詞の選択基準として立てる必要はないと考えた方が妥当である。

これらのことから、肯定/否定という対立そのものは、指示詞の選択を決定づけているとはいえず、指示詞の選択基準として妥当ではないが、特定の構造では、その構造の持つ意味と、ある指示詞を用いる語用条件が相いれないという状態が発生する場合がある。たとえば、“不＋P 指＋W”の構造においては、“这么”はほとんど用いられず、“有＋指示詞＋回事。”の構造においては“那”はほとんど用いられない。

---

[9] “综合”で 1 例のみ上がっている“有那回事。”の例は日本語が原作の『陰陽師』(夢枕獏原作)の翻訳で、“没那回事。”に対する応答として“有那回事。”が用いられている。“抱歉，博雅。”晴明说。“你可以向我道歉，可是不要边笑边道歉好不好？”“我在笑吗？”“是啊。”诚如博雅所说，晴明的嘴角的确含着若有若无的微笑。“**没那回事。**”“**有那回事。**”博雅又噘起嘴。

日本語でも「そんなことあるよ」は単独ではあまり使われないが、「そんなことないよ」に対する応答として、ふざけてくちごたえする感じで「そんなことあるよ」と述べることがある。この例は、中国語では、意味は分かるが明らかな翻訳口調となるのか、それとも日本語のそれと同じような状況なのかをネイティブのインフォーマント尋ねたところ、中国語も、日本語と同じように、日常に“有那回事。”はあまり使わないが、“没那回事。”に逆らってであれば使用できるとのことであった。

２．４．６　接続機能の有無

前方の文脈を受けて後方の文脈で判断や結果を述べるという機能は、“这”“那”の二つの指示詞の中でも“那”に独特に備わった機能であると考えることができる。

これらの指摘を検証するため実際の言語資料を見ても、指示詞が前方の文脈を受けて判断や結果を述べるような場合には、指示詞“那”が用いられている場合が多い。多くの場合、その箇所を日本語に訳するときも「では」や「(それ)なら(ば)」としても成立する。

(25) “...you'd only have to whisper a hint to Time, and round goes the clock in a twinkling! Half-past one, time for dinner!” ... “**That** would be grand, certainly,' said Alice thoughtfully: 'but then--I shouldn't be hungry for it, you know.” (*Alice's Adventures in Wonderland*)

“...你只要悄悄向时间暗示一下，一眨眼时针就转了过去！一点半，到了吃午饭的时候！”...“**那**当然好极了，”阿丽思沉思地说，“可是那样的话--我还不饿，还不想吃饭啊，你知道。”

「…時間君にほんの一言こちらがささやきさえすれば、時計はたちまちグルッと廻る！一時半、お昼の時間ということになる！」…「**そう**なれば本当にすばらしいでしょうが」とアリスは考深げに言った「でもそれなら――お昼を食べる程おなかがすかないでしょうからね」(尾上政次訳 2005：139)

ただし、前方の文脈を受けて、判断や結果を導くのに、“这”は用いられないが、“这样”が用いられているのを目にすることがある。

(14)’ 光：このままどっか行こうか。そしたら、ずっと一緒にいれるでしょ。(*魔女の条件*)

光：我们就这样到什么地方去吧。**这样**就能一直在一起。

前方の文脈を受けて、判断や結果を導くという接続の機能を兼ね備える場合、“那”、“那

样”、“这样”が用いられる[10]。

接続の機能を持つ場合には、単独の“这”は用いられないが、“这样”は用いられることから、接続の機能の有無という基準は単独の“这”の使用を排除するが、接続の機能の有無そのものが“这”系列と“那”系列の使用の選択を決定しているわけではない。

２．４．７　前方指示/後方指示

前方指示とは、指示対象が指示詞よりも前の言語的文脈に現れる指示であり、後方指示は、指示対象が指示詞よりも後の言語的文脈に現れる指示である。後方指示とは次のような例である。

(26) Every one suspects himself of at least one of the cardinal virtues, and **this** is mine: I am one of the few honest people that I have ever known. (*The Great Gatsby*)
每个人都以为他自己至少有一种主要的美德，而**这**就是我的：我所认识的诚实的人并不多，而我自己恰好就是其中的一个。
人は誰しも自分のことを、何かひとつくらいは美徳を備えた存在であると考えるものだ。そして僕の場合は**こう**だ――世間には正直な人間はほとんど見当たらないが、僕はその数少ないうちの一人だ。(村上春樹訳 2006：113)

吕叔湘 1985、肖薇・郭晓华 2005 は、“这”には後方指示用法があるのに対し、“那”にはこの用法がないとした。本論文でも、これと同じ見方をとる。本論文では、以降、文脈指示用法の中でも、前方指示用法に絞るが、事物を後方指示する場合指示詞は常に“这”であるとなぜいえるのか、議論された要点のみを以下に記す。

刁世兰 2005 は“那”にも後方指示用法があるという立場をとり、次のように述べた。

在特定的语境中，“这”、“那”都既可以用于句子内部的下指照应，又可以用于篇章中的下指照应。(刁世兰 2005：80)

[10] “那么”は、前方の文脈を受けて結果や判断を表わす節を導く用法は接続詞とされている(吕叔湘 2000：402)ので、指示詞を扱っている本論文では取り上げない。

特定の言語環境では、“这”、“那”はどちらも文内部の後方指示に用いることができ、また文章中の後方指示に用いることができる。

刁世兰 2005 は、“那”が後方指示に用いられる場合について次のように述べた。

(二) 在句子内部，“那”单独用来表示与下文所指相同的，通常以“那 + NP”的形式出现:

(27) 我又想起了鲁迅先生的那句话：吃的是草，挤出来的是奶。
(28) 还是老祖宗那句话说得好——唯女人与小人难养也。
(29) 那个金属般的声音再次刺痛了将军的耳鼓——“将军，什么时候，我们才能重返阿兰岛?”(赵琪《重返阿兰岛》)

“那 + NP”用于下指，所指代的内容要么是谈话双方皆知(或者说话者主观上认定对方知道)的信息，要么是在过去的某一个时间点上将要发生的事情。(刁世兰 2005：81)

(二) 文の内部で、“那”が単独で後方の文脈の指示対象と同じことを示すときには、通常は“那 + NP”の形式で現れる。

(27)私はまた魯迅先生のあの言葉を思い出した。「食べるのは草だが、絞り出されるのは乳だ。」
(28)やはり先人のあの言葉はその通りだ——女と小人だけは取り扱いに苦労する。
(29)あの強くて揺るぎない声がまた将軍の耳をつんざく——「将軍、いつ私たちはアラン島に戻れるのですか？」(赵琪《重返阿兰岛》)

“那 + NP”を後方指示に用いるとき、指示対象の内容は談話している双方が共に知っている(あるいは話者の主観上相手が知っていると認めている)か、さもなければ過去のある時点でまもなく発生しようとしていた事柄である。

しかし、刁世兰が上で“那”の後方指示用法として述べているものは、たまたま指示詞の後ろに指示内容が言語的文脈に出現しているが、実際には観念指示に分類されるべきものであると筆者は考える。その証拠に、“那 +NP”を後方指示に用いるときの特徴として、指示対象の内容が談話している双方が共に知っているか、過去のある時点でまもなく発生しようとしていた事柄とあるが、この「指示対象の内容が談話している双方が共に知っている」という条件は、木村 2012 が述べた観念指示の“那”の運用が、「自分が指示する対象が、その指示表現だけで相手にも同定可能だという見込みが話し手の側にある場合に限る(木村 2012 : 79)」という条件と一致している。また、「過去のある時点でまもなく発生しようとしていた事」を“那”を用いて指示し、その内容が後方の言語的文脈に現れている場合も、指示詞を発話した時点では、後から述べることになる事柄を指して指示詞を発話したのではなく、話者の頭の中にある観念にある事柄を指したものであり、ある場合に、話者はその頭の中にある観念について説明することにしたものと考えることができる。これに似た議論は劉鬚 2010 においてもなされており、次に挙げる。

談話モデル理論を用いて“那”の文脈指示と観念指示を分析した劉鬚 2010 は、吕叔湘 1985 が文脈指示用法において前方照応の場合“这”“那”いずれも用いられるが、後方指示の場合“这”しか用いられないという説に対して、高芃 2007 が挙げた反例を引用した。

(30)肖凯 只能 拿<u>那几句</u>‘置死地而后生’,‘不入虎穴焉得虎子’来安慰自己。
『我们都是陌生人』
肖凯は ただ あの「乾坤一擲」や「虎穴に入らずんば虎子を得ず」のようなことばで自分を慰めるしかない。」(高 2007 訳)(劉鬚 2010：1-2)

そして、高（2007）の例文の“那”が、文脈指示の後方照応用法ではなく、観念指示用法として用いられていると指摘し、観念指示だといえる理由について次のように述べた。

その理由は、話し手が「那$_2$[11]」を用いた時点、聞き手の共有知識領域にはすでに中国人であれば誰でも知っていることわざ(‘置死地而后生’,‘不入虎穴焉得虎子’)、即ち、百科事典的な知識が存在している。そして、話し手が聞き手の共有知識領域にもその知識が登録済みと想定して「那几句(あの…ことば)」を用いている。

[11]劉鬚 2010 の論文では文脈指示を「那$_1$」、観念指示を「那$_2$」と記すことにしている。

そして、聞き手が「那几句(あの…ことば)」をすでに知っている状態であっても、聞き手が知らない状態であっても(たとえば、中国人の幼児や中国のことわざの分からない外国人など)、いずれの場合でも「那几句(あの…ことば)」が話し手の共有知識領域に登録されていることを指し示すため、高 2007 の挙げた例の“那”は観念指示の“那”であり、文脈指示の後方指示ではない(劉鬚 2010：2)と論じた。

本論文では、劉鬚と同じ立場をとり、刁世兰が上で“那”の後方指示用法として述べているものは指示詞を用いた時点では、話者の頭の中にある観念を指していると考えるので観念指示であって、文脈指示に含まれないという立場をとる。

言語的文脈に指示対象と思われる成分が存在している場合、観念指示と文脈指示の見分けがつきにくい場合がある。しかし、“那”が用いられていて、その後に事件や事柄の具体的内容が来る場合は、一律にその指示詞は観念指示用法であり、指示詞の指す内容が後に来たのは、話者がたまたまその内容を話すことにしたにすぎない、とみなせるという点は次のような例を考えるとわかりやすい。

(31) 我年纪还轻，阅历不深的时候，我父亲教导过我一句话，我至今还念念不忘。
“每逢你想要批评任何人的时候，”他对我说，“你就记住，这个世界上所有的人，并不是个个都有过你拥有的**那些**优越条件。”
他没再说别的。但是，我们父子之间话虽不多，却一向是非常通气的，因此我明白他的话大有弦外之音。(《了不起的盖茨比》)

僕がまだ年若く、心に傷を負いやすかった頃、父親がひとつ忠告を与えてくれた。その言葉について僕は、ことあるごとに考えをめぐらせてきた。

「誰かのことを批判したくなったときには、こう考えるようにするんだよ」と父は言った。「世間のすべての人が、お前のように恵まれた(φ)条件を与えられたわけではないのだと」

父はそれ以上の細かい説明をしてくれなかったけれど、僕と父のあいだにはいつも、多くを語らずとも何につけ人並み以上にわかりあえるところがあった。だから、そこにはきっと見かけよりずっと深い意味が込められているのだろうと察しはついた。(村上春樹訳 2006：9)

例(31)では、“那些优越条件”の“那”が指すものは前後の言語的文脈に登場しない。したがって、“那”の用法が観念指示用法であることは明白である。しかし、話者がこのように述べた後で“那些优越条件”の“那”が指す具体的な例を列挙したり、内容を説明したりすることにしたとしても何ら不自然ではない。では、そうした場合、指示詞は文脈指示用法ということになるのであろうか。そうではないはずである。その指示詞が観念用法であるのか文脈用法であるのかということは、その指示詞を発話した時点で決まっているはずであり、その後の文脈に指示詞が指す具体的なものを述べるかどうかによって後から決まるわけではないはずである。

このように考えると、例(32)のような場合も、一見文脈指示ととれるようにも思えるが、“那”の後に“那”の指す内容が来ていることから、観念指示と考えることができる。

(32) “— And we've produced all **the things** that go to make civilization — oh, science and art, and all that. Do you see?” (*The Great Gatsby*)

“而我们创造了所有**那些**加在一起构成文明的东西——科学艺术啦，以及其他等等。你们明白吗？”

「――そして我々はだな、文明の礎となる全ての**(φ)**ものごとを創り出してきたんだ。科学や、芸術や、そういう何もかもを。そうだよな？」(村上春樹訳 2006：32)

実際の言語資料である、*Alice's Adventures in Wonderland* 及び *The great Gatsby* の英語原文、中国語訳、日本語訳、及び*魔女の条件*の日本語、中国語訳において事物に関する後方指示は全て英語では“that”、中国語では“这”、日本語では「コ」と、全て近称が用いられていた。事物ではなく、時間を後方指示する場合については、2.4.10 で考慮する。

２．４．８　話題/非話題

文脈指示用法で、前方の文脈で提起されていない指示対象が指示詞の直前に突如として出現している場合、指示対象は新情報であり、続く部分で話題成分としての地位を確立する意図があるかないかに関わりなく“那”が用いられる。新情報である指示対象の“熟悉”度が低く、“定指”である場合には、話者が続く部分でその指示対象について説明する場合もあり、話題成分となることがある。

丁启阵2003は、話題成分となっているものは“这”、話題成分となっていないものは“那”で指示するとして、次のような例を挙げ、その例について以下のように解説している。

(33)那头牛是 1993 年 4 月从法国北部出口到英国的，在 1994 年 6 月被诊断患有疯牛病，是在这头牛到达英国 14 个月之后。科学家们说，疯牛病毒的潜伏期从来不少于 22 个月，因此这头牛肯定是在法国染上疾病的。

例(33).....展示了从非话题或非话题成分向话题或话题成分转变的过程，这个过程的形式标记就是: 那 / 这。拿例(59)为例，在所引文字之前，话题是笼统的,“带有疯牛病毒的法国牛已出口到英国”,只捎带提及有一头在法国出生并潜伏着疯牛病毒的牛已出口到英国。该疯牛还未成为话题,这时只能用“那”指代，而“那头牛.....被诊断患有疯牛病”一句，就确立了它的话题地位,因此，接下去就改为用“这”指代了(丁 2003：30)。

(33)その牛は 1993 年 4 月にフランス北部から英国へ輸出されたのであり、1994 年 6 月に狂牛病と診断されたのは、この牛が英国へ到着して 14 カ月後のことである。専門家たちは、狂牛病ウイルスの潜伏期間がこれまで 22 カ月より短かったことはないことから、この牛は間違いなくフランスで病気に感染したものであると述べている。

例(33)……の例は非話題あるいは非話題成分から話題あるいは話題成分への転換の過程を示している。この過程の形式的標識は那 / 这である。(33)を例にとると、引用の前では、話題は漠然としており、「狂牛病ウイルスを持っているフランスの牛が輸出され英国に到達した」という、フランスで出生し狂牛病ウイルスが潜伏した一頭の牛が、既に輸出され英国に到達したことをわずかに持ち出しただけである。当該の狂牛はまだ話題になっておらず、このときは“那”のみによって指示できる、そして“那头牛……被诊断患有疯牛病”の一文で、その話題地位が確立したために、続いては“这”が改めて用いられて代用指示している。

この指摘に類似した対立に、杨玉玲 2011 の“新旧信息的对立”、及び“熟悉度高低的对立”がある。新情報と旧情報という対立が指示詞の選択にどのように関わっているかについて杨玉玲 2011 は次のように述べており、その内容や挙げられている例から、新情報と

旧情報という対立概念は、丁が述べいている話題 / 非話題の対立概念の一部であることがわかる。

新旧信息的对立即和上文相关程度高低的对立。上文提及的对象，和上文的相关程度很高，表现为旧信息；相反，上文没提及突然引进篇章的对象和上文的相关程度很低，表现为新信息。旧信息通常用“这”系词语来指称；新信息通常用“那”系词语来指称（杨玉玲 2011：201）。

情報の新旧という対立とはすなわち前方の文脈との関連程度の高低の対立である。前方の文脈で提起された対象は、前方の文脈との関連程度が高く、旧情報として表現される。反対に、前方の文脈で提起されておらず、突然文章に導入された対象と前方の文脈は関連程度が低く、新情報として表現される。旧情報は通常“这”系列の語を用いて指示し、新情報は通常“那”系列の語を用いて指示する。

杨玉玲 2011 が述べた、上の話題 / 非話題に関連した別の対立に、“熟悉度高低的对立”がある。杨は、話者がある対象を文章に導入するにあたって、聞き手がその対象をどれほど熟知しているのかが指示詞の選択に関わっているとして、次のように述べた。

言语交际要说话人和听话人双方共同参与方可完成，所以篇章中每引进一个对象，说话人必须把听话人考虑在内，必须对该对象的可识别度的高低进行判断，即必须对听话人是否熟悉该对象进行判断。如是陌生的不易识别的对象，其熟悉度就低；相反，如是人所共知的易于识别的对象，其熟悉度就高。对熟悉度低的对象要用“这”系词语来指称，而如果熟悉度高的对象被直接从篇章外突然拉进篇章，然后匆匆消失如昙花一现，即上文无相关说明下文也不会被继续关注，和上下文的相关程度几乎等于零，对这种对象就要用“那”系词语来指称。这一对立在“这么”、“那么”和“这样”、“那样”的句内回指中表现最为明显。如：

(34) 在现在这个社会，能做到像张海燕**这么**敬业真是不容易。

(35) 极移的范围很小，虽则只有篮球场**那么**大，但它对地球经纬度的精度却有不小的影响。

……上述例句中“篮球场的大小”……是人所共知的高熟悉度的对象，所以其属性可用

“那么”或“那样”直接引进篇章；而上例中的“张海燕”……是不易识别的低熟悉度的对象，要在上文交代受话人才能明白，对其属性的指称当然要用“这么”或“这样”。(杨 2011：202-203)

言語コミュニケーションでは話者と聞き手双方が共同で参加して完成するので、文章に一つの対象を導入する度に、話者は聞き手を考慮に入れ、当該の対象の識別度の高低に判断を行わなければならない。見知らぬ識別しにくい対象であれば、その熟知度は低く、人が共有している知識で識別しやすい対象であれば、その熟知度は高い。熟知度が低い対象に対しては“这”系列の語を用いて指示し、もし熟知度が高い対象であれば直接文章外から突然文章に引っ張って入れられ、それから慌ただしく一時ではかなく消える、すなわち前方の文脈で関連する説明が無く、後方の文脈でも注目し続けられることはなく、前方や後方の文脈での関連程度はほぼゼロに等しい、このような対象には“那”系列の語を用いて指示する。この一組の対立は、“这么”、“那么”と“这样”、“那样”の文内の前方指示表現において最もはっきりとする。例えば：

(34) 現在のこの社会で、張海燕のように仕事に全力で打ち込めるというのは本当にたやすいことではない。

(35) 極運動の範囲はとても小さく、バスケットボール場のような大きさしかないが、地球の経緯度の精度にとって大きな影響を及ぼしている。

……上述の例文の中の「バスケットボール場のような大きさ」……はどちらも人が共有している知識で高い熟知度の対象であるので、その属性は“那么”あるいは“那样”を用いて直接文章に導入することができる。上の例の“张海燕”……は識別しにくい低熟知度の対象で、前方の文脈で受信者に説明して初めて理解でき、その属性に対する指示は当然“这么”あるいは“这样”を用いなければならない。

これらの指摘を検証するために、実際の言語資料をみると、前方の文脈に一切説明が出ておらず、その場で突然持ち出された指示対象を指す場合には“那”が用いられている。

(36)她是个身材苗条、乳房小小的姑娘，由于她像个年轻的军校学员**那样**挺起胸膛更显得英俊挺拔。(《了不起的盖茨比》)

胸の小さな娘で、背筋がすらりと伸びている。まるで若い見習士官**のように**、肩口か

ら身体を後ろにぐっと反らせることで、その姿勢の良さがより強調されていた。(村上春樹訳 2006：27)

上の例では、指示対象が本論ではなく、指示対象は指示詞の直前に突如現れていることから新情報であり、それ以降その指示対象が話の中で話題になっていない。つまり話題成分の地位を確立していない。そして “不定指”であって、特定のものを指しておらず、“熟悉度”が高いために受信者が自分の頭の中で容易に思い浮かべることができると想定されて語られている。

次の例は、指示対象が指示詞の直前に突如現れていることから新情報であることは同じであるが、それ以降にその指示対象が話の中で話題となる場合である。つまり、非話題成分から話題成分へとなっていく場合の例である。

(37)重读一遍以上所写的，我觉得我已经给人一种印象，好像相隔好几个星期的三个晚上所发生的事情就是我所关注的一切。恰恰相反，它们只不过是一个繁忙的夏天当中的一些小事，而且直到很久以后，我对它们还远远不如对待我自己的私事**那样**关心。

大部分时间我都在工作。每天清早太阳把我的影子投向西边时，我沿着纽约南部摩天大楼之间的白色裂口匆匆走向正诚信托公司。我跟其他的办事员和年轻的债券推销员混得很熟，和他们一起在阴暗拥挤的饭馆里吃午饭，吃点小猪肉香肠加土豆泥，喝杯咖啡。我甚至和一个姑娘发生过短期的关系，她住在泽西城，在会计处工作。可是她哥哥开始给我眼色看，因此她七月里出去度假的时候，我就让这事悄悄地吹了。(《了不起的盖茨比》)

ここまで書いたものを読み返して、それぞれ数週間の間隔を置いてめぐってきたこれら三度の夜のことで、あたかも僕の頭がいっぱいになっていたかのような印象を与えかねないことがわかる。しかし話はぜんぜん逆で、僕にとってそれは、何かと慌ただしい夏の日々に起こった行きずりの挿話に過ぎなったのである。そしてずいぶんあとになるまで、これらの出来事をとくに意味のあるものとは考えなかった。そんなことより遥かに重要な個人的諸事情を、当時の僕は抱えていたのだ。

一日のおおかたは仕事をしていた。朝早く、太陽が僕の影を西向きに落とす時刻に、僕はロワー・ニューヨークの白亜の谷間をプロビティー信託銀行に向けて急ぎ足で歩いていた。ファースト・ネームで見知っているほかの事務員や、若い証券マンたちと

一緒に、混み合ったうすい暗いレストランで昼食をとった。小さな豚肉ソーセージとマッシュポテトを食べ、コーヒーを飲んだ。ジャージーシティーに住む経理部の娘と、つかの間の関係をもったことさえあった。しかし彼女のお兄さんが含みのある視線をこちらに向けるようになったので、七月に彼女が休暇をとったときに、さりげなく穏便に関係を解消した。(村上春樹訳 2006：107-108)

(37)の例では、指示詞“那”が用いられる直前に指示対象“自己的私事”が現れているが、“自己的私事”の具体的中身については前方の文脈で述べられておらず、新情報ではある。しかし、(36)と異なって、“熟悉度”は低く、“定指”である。そして、この“自己的私事”についての詳細が続く部分で 17 段落に渡り、説明されている。

したがって、この節をまとめると、文脈指示用法で、前方の文脈で提起されていない指示対象が指示詞の直前に突如として出現している場合、指示対象は新情報であり、続く部分で話題成分としての地位を確立する意図があるかないかに関わりなく“那”が用いられる。新情報である指示対象の“熟悉”度が低く、“定指”である場合には、話者が続く部分でその指示対象について説明する場合もあり、話題成分となることがある。

以上のことから指示対象が突然文脈に導入され、その指示対象について前方の文脈でほとんど説明されていない新情報で、話題として確立されていないものは、指示詞“那”が用いられて指示されると言える。

２．４．９　まとめ

2.4 では、本論文で扱う言語現象を指定するために、すでに小野絵理 2013 において議論された文脈指示用法の指示詞選択基準にはどのようなものがあるのかを紹介した。それぞれの指示詞の選択基準が一体どのような概念なのかを説明し、典型例を挙げて、それが選択基準として有効あるいは有効でないと結論づけた経緯をおおまかに述べた。この結果をまとめると次のようになる。

時間的要素１は、指示詞の選択に強い影響を及ぼしている。時間的距離１が大きい場合、特に指示対象が発話されてから指示詞で指示されるまでの間に何らかの中断が生じている場合は、“那”が用いられる。逆に、指示対象と指示詞が同じ文中の中で隣り合っており、間の停頓がゼロに近い場合は“这”が用いられやすい。

時間的要素 2 は、指示詞の選択に影響を及ぼしている。時間的要素 2 が指示詞の選択に与える影響は、指示詞が特定の時間を指す場合と、事件を指す場合とで異なる。指示詞“这”、“那”のいずれかを用いて文脈に現れた特定の時間を指す場合は、過去と未来の時間に限られ、過去の特定の時間を指す場合、議論になっている当時の時間を参照時点として指示する場合は“这”を用い、話者が指示詞を発話した時刻を参照時点として指示するときは“那”を用いる。未来の特定の時間を指す場合は“那”を用いる。特定の時間に発生あるいは存在した / する事件や事柄を指示する場合、その事件が過去、現在、未来のいずれに属する事柄も、“这”で指示される場合と“那”で指示される場合があり、時間的要素 2 のみによって、また時間的距離 2 のみによって“这”と“那”の使用を決定することはできない。

指示対象が誰の発言であるかは、指示詞選択の決定的な選択要素とはならない。

話者の好意的 / 非好意的感情よりも、話者が、自分が指示対象に組み込まれることを示そうとしているか否かという態度の方が指示詞の選択基準として優先度が高い。

肯定 / 否定は指示詞選択の決定的な選択基準とはならない。特定の構文において、肯定/否定の対立によって指示詞の使用がいずれか一方に著しく偏ることがあるが、それは構文の持つ意味と、特定の指示詞の語用論的使用条件が相いれないために生じる表面的な現象であり、その語用的使用条件は他の基準によって説明できるため、肯定/否定という基準を新たに打ち立てる必要はない。

指示詞が接続の機能を有する場合、単独の“这”の使用は排除されるが、“那”“那样”だけでなく“这样”も用いられることから、接続の機能の有無のみによって“这”系列と“那”系列の使用を決定することはできない。

前方指示か後方指示かは指示詞の判断基準になっている。前方指示には“这”“那”の両方が用いられ、事件や事柄を後方指示する場合には“这”のみが用いられる。

指示対象が指示詞の前に突如として現れ、話題成分としての地位が確立していない場合、“那”が用いられる。

この中で妥当であると結論された指示詞選択基準から、以下の 8 つの具体的な規則を得た。

２．４．９．１上の基準から得られる指示詞選択規則

時間的要素 1 から次の規則(a)(b)が得られる。

(a) 時間的距離 1 が大きければ“那”を用いる。

(b) 時間的距離 1 が小さく停頓がゼロに近ければ“这”を用いる。

時間的要素 2 から、次の規則(c)(d)が得られる。

(c) 未来、現在の過去の時間を指す場合には“那”を用いる。

(d) 過去の現在の時間を指す場合には“这”を用いる。

話者が指示対象に組み込まれることを示そうとしているか否かという基準から、次の規則(e)(f)が得られる。

(e)話者が指示対象に組み込まれることを示そうとする場合は“这”を用いる。

(f)話者が指示対象との関係を否定し、距離を置く場合は“那”を用いる。

前方指示 / 後方指示から、次の規則(g)が得られる。

(g)後方指示であれば“这”を用いる。

話題 / 非話題から、次の規則(h)が得られる。

(h)指示対象が話題成分としての地位が確立していない場合“那”を用いる。

２．４．９．２指示詞選択規則の優先順位

上に挙げた(a)-(h)の規則のうち、複数の規則が関わり合い、かつそれぞれの規則が主張する指示詞が対立するときには、どの規則がより高い優先度をもって指示詞の選択が行われているのかについて、小野 2013 では、(a)-(h)それぞれの規則が主張する指示詞が対立する全ての組み合わせについて検討し、議論を行ったが、以下は、その中から議論の一部を紹介し、得られた結果を記す。

Ⅰ．規則(a) 時間的距離 1 が大きければ“那”を用いる　VS
規則(d) 過去の現在の時間を指す場合には“这”を用いる

規則(a)と(d)が対立する状況、すなわち指示対象と指示詞との間に中断があり、かつ議論になっている当時の時刻を参照時点として過去の特定の時間を指示する場合について考えてみる。3.1.2 で考慮した、議論になっている当時の時刻を参照時点として過去の特定の時間を指示している(38)の例に手を加え、指示詞を発話する直前に、何らかの理由で話が中

断され、その後にまた指示詞から話し出すとしたら、“那”を用いる方が自然だという。

(38) 伯颜拒绝议和，命令元军在长江两岸发起进攻，宋军全线崩溃，贾似道逃回杨州。到了**这个时候**，南宋灭亡的局势已经无法挽回了。
伯顔は和解を拒否し、元軍に長江の両岸から攻撃をするようにと命令した、このことにより宋軍は全ての戦力が壊滅し、贾似道も楊州へと逃げかえった。この時点で、南宋王朝が滅亡への局面は既に覆せないほどであった。

(38a) 伯颜拒绝议和，命令元军在长江两岸发起进攻，宋军全线崩溃，贾似道逃回杨州。(…話の中断…)到了**那**(*这)**个时候**，南宋灭亡的局势已经无法挽回了。
伯顔は和解を拒否し、元軍に長江の両岸から攻撃をするようにと命令した、このことにより宋軍は全ての戦力が壊滅し、贾似道も楊州へと逃げかえった。
(…話の中断…)この時点で、南宋王朝が滅亡への局面は既に覆せないほどであった。

そして、(38a)のように、指示対象と指示詞の間に話の中断があったために“那”が用いられる場合も、話者は、議論になっている当時の時間を参照時点として発話していることには変わりないという。したがって、(a)と(d)が対立した場合、(a)の規則が優先されることがわかる。

Ⅲ．規則(a) 時間的距離１が大きければ“那”を用いる　VS
規則(g) 後方指示であれば“这”を用いる

後方指示の場合、指示対象を発話する前に指示詞が発話されているため、指示対象と指示詞の時間的距離１によって指示詞が選択されるわけではない。たとえば、指示詞を発話してから、さぁ指示対象を述べよう、としたときに何らかの理由で話に中断が生じ、時間的距離 1 が大きくなったとしても、指示詞は既に発話されているので変わりようがない。前方指示の場合は“这”“那”の両方の可能性を認めていることから、規則(a)を考慮する必要があるのは前方指示のときのみであるため、規則(g)を考慮する必要が無く、規則(g)を考慮する必要がある場合は規則(a)を考慮する必要がない。したがって、規則(a)と規則(g)の対立が問題になる状況が存在しない。

Ⅳ．規則(b) 時間的距離 1 が小さく停頓がゼロに近ければ“这”を用いる　VS
規則(c) 未来、現在の過去の時間を指す場合には“那”を用いる

(39)(40)は発話現在を参照時点として文脈に現れた過去の時間を指しており、(41)は文脈に現れた未来の時間を指しており、指示対象と指示詞が隣り合っている。

(39) 去年夏天那个时候我们相识了。(作例)
去年の夏、その年に私たちは知り合いました。

(40) 1930 年，他在 50 岁生日那天独自一人出发去格陵兰岛探险，检查空投的补给品。(CCLM)
1930 年、彼は 50 歳の誕生日のその日、単独で出発しグリーンランド島へ探検に行き、空中投下の補給品を検査した。

(41) 明年夏天那个时候举行我们的婚礼。[12](作例)
来年の夏、その頃に私たちの結婚式を挙げます。

(39)(40)(41)では、指示対象と指示詞が隣り合っているが、指示詞は“那”が用いられている。したがって、(b)と(c)が対立した場合、(c)の規則の方が優先される。

Ⅴ．規則(c) 未来、現在の過去の時間を指す場合には“那”を用いる　VS
規則(e) 話者が指示対象に組み込まれることを示そうとする場合は“这”を用いる

(42) 一年たったら、18 になったら、必ず迎えに行くから。その時こそ、本当に自由の国に行けるんだよ、俺たち。それまで、信じて待っててほしい。(*魔女の条件*)
再过一年变成 18 岁以后一定会去接你的。那时我们就真的能到自由的国度去了。希望

[12] (41)の例文で、“那个时候”を“这个时候”に変えると、「来年の夏の今頃」という意味になり、文脈指示用法ではなくなることに注意されたい。また、(39)では、“个时候”を“年”に変えて、“去年夏天那年”とすることもできるが、(41)では、“个时候”を“年”に変えて、“*明年夏天那年”ということはできない。この点については今後の課題とする。

你相信我，等我到**那个**时候。

(42)の例では、指示している未来の時間は、一年後、話者が 18 歳となり、聞き手を迎えに行くときであり、話者が指示対象に組み込まれていることを示そうとしているのは明らかである。しかし、“那”が用いられている。したがって、(c)と(e)が対立した場合、(c)の規則の方が優先される。

Ⅵ. 規則(c) 未来、現在の過去の時間を指す場合には“那”を用いる　VS 規則(g) 後方指示であれば“这”を用いる

指示詞が未来或いは現在の過去の時間を指していて、かつ具体的な時間が指示詞の後方に来る場合、指示詞は“这”“那”のどちらが用いられるのだろうか。3.6 で前方指示と後方指示について論じたさい、指示詞が事件や事柄を指しており、具体的内容が指示詞の後方にくる場合、すべて“这”が用いられ、“那”が用いられるとき、それは文脈指示用法ではないことを述べた。では、指示が事件や事柄ではなく、未来や現在の過去という時間であればどうであろうか。

(43) 我期待的是**那**(*这)个时期，就是明年的八月。(作例)
(44) 10 年前，当时的我期待的是**那**(*这)个时期，就是去年的八月。(作例)

(43)は指示詞が未来の特定の時間を指しており、(44)は指示詞は発話現在の時刻を参照時点として過去の特定の時間を指しており、具体的な時間は指示詞の後方に出現している。このような場合、“这”は用いることができず、“那”が用いられる。(43)、(44)の場合、3.6 で見たような、指示対象が事件や事柄である場合の例とは異なり、「指示対象の内容が談話している双方が共に知っている」という観念指示の説明と一致するわけでもなく、指示詞を発話した時点で指示詞の後方で指示詞の指す内容を述べる意図があると考える方が妥当である。したがって、指示詞が未来、或いは現在の過去の特定の時間を文脈指示する場合には、指示対象が前後のどちらにあっても“那”が用いられることがわかる。このことから、(c)と(g)が対立した場合、(c)の規則の方が優先される。

Ⅹ．規則(b) 時間的距離１が小さく停頓がゼロに近ければ“这”を用いる　VS
規則(h) 指示対象が話題成分としての地位が確立していない場合“那”を用いる

(45) 我自己的脸也涨得通红，像被热带的太阳晒过那样。(*The Great Gatsby*)
そう言われて僕の顔まで、まるで南国の太陽に焼かれたみたいに熱くなってしまった。(村上春樹訳 2006：161)

(45)では、指示対象が指示詞の前方にぴったりとくっついており、時間的距離 1 はゼロに近いが、指示対象が話題成分としての地位を確立していないので“那”が用いられている。したがって、(b)と(h)が対立した場合、(h)の規則の方が優先される。

ⅩⅡ．規則 (e) 話者が指示対象に組み込まれることを示そうとする場合は“这”を用いる　VS　　規則 (h) 指示対象が話題成分としての地位が確立していない場合“那”を用いる

次に、規則(e)と規則(h)に対立が生じる場合について考えてみる。

(37)’ 恰恰相反，它们只不过是一个繁忙的夏天当中的一些小事，而且直到很久以后，我对它们还远远不如对待我自己的私事那样关心。(*The Great Gatsby*)
しかし、話はぜんぜん逆で、僕にとってそれらは、何かと慌ただしい夏の日々に起こった行きずりの挿話にすぎなかったのである。(村上春樹訳 2006：435)(“我对它们还远远不如对待我自己的私事那样关心。”の部分は、より中国語に近づけて訳すと、「私はそれらに対しては、自分の私事みたいに非常に重視するわけではなかった」となる)

上の(37)’は、指示対象は“我自己的私事(自分の私事)”であるので、話者は指示対象に組み込まれているが、“我自己的私事”は前方の文脈で具体的に述べられておらず、指示詞の直前に突如として現れているために、話題としての地位を築けていない。したがって、(e)と(h)が対立した場合、(h)の規則の方が優先される。

ⅩⅢ．規則(g) 後方指示であれば“这”を用いる　VS

規則(h) 指示対象が話題成分としての地位が確立していない場合“那”を用いる

(46)「φここだけの話ですけど。光君がかけおちみたいな真似をしたらしいんですよ。しかも、その相手が、高校の担任の教師。」(*魔女の条件*)

“这些话只在这里说。小光好像跟人家私奔了的样子，而且那个对象是他高中的导师。”

(46)は、前方の文脈で全く話題になっていないことを話者が新たに持ち出した場面である。しかし、“这”が用いられている。そもそも、後方指示は、相手が知らない事柄についてこれから話し出そうとするときにしばしば用いられる用法である。したがって、(g)と(h)が対立した場合、(g)の規則の方が優先される。

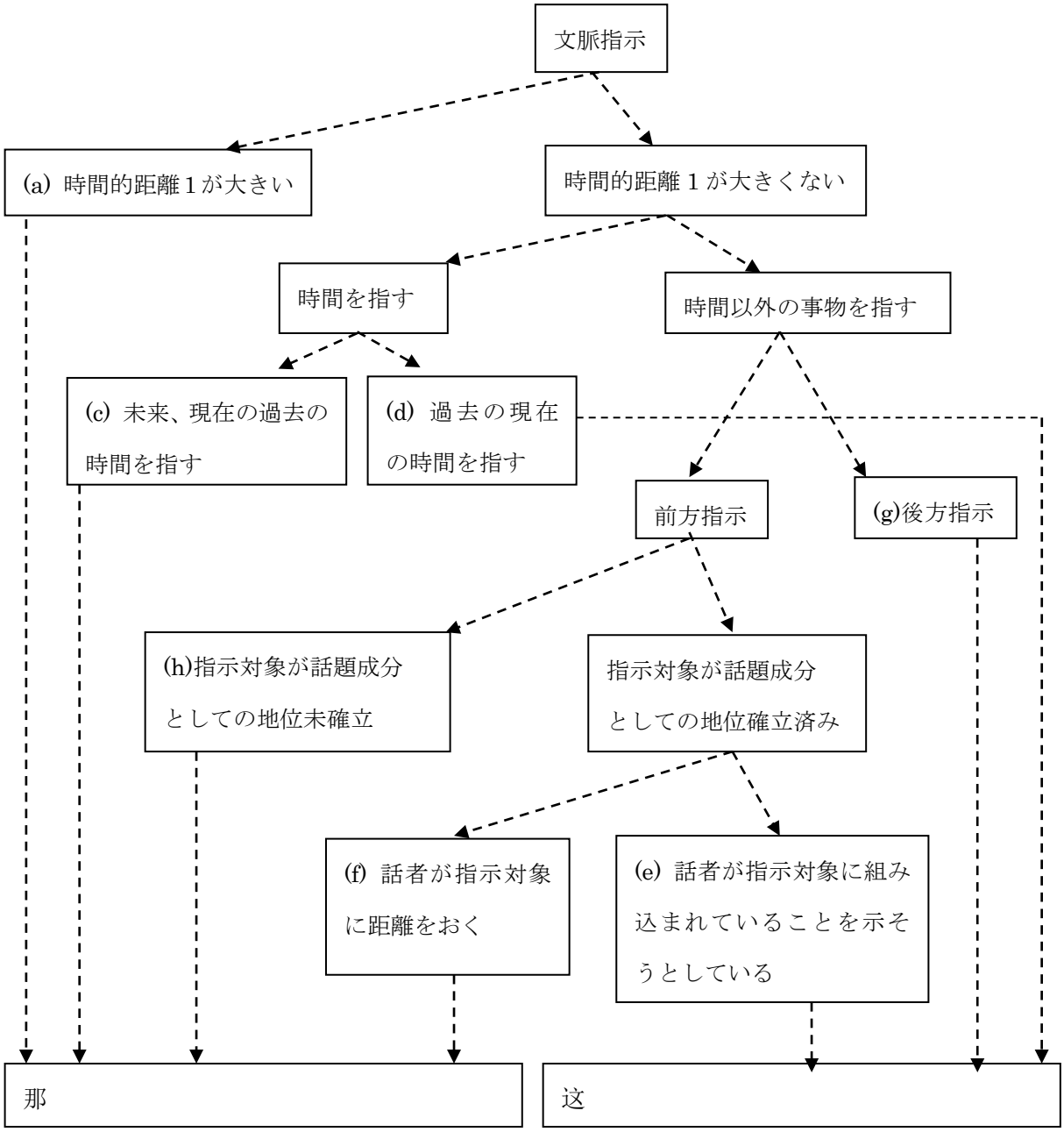
得られた結果をまとめると以下のようになる。ますの中に記されている規則の記号は、一対一で突き合わせて規則を比較したときに、優先度が高かった規則である。

指示詞選択基準から得られた指示詞選択規則	(b) 時間的距離 1 が小さく停頓がゼロに近ければ“这”を用いる。	(d) 過去の現在の時間を指す場合には“这”を用いる。	(e)話者が指示対象に組み込まれることを示そうとする場合は“这”を用いる。	(g)後方指示であれば“这”を用いる。
(a)時間的距離 1 が大きければ“那”を用いる。		Ⅰ (a)	Ⅱ (a)	Ⅲ 対立が問題になる状況が存在しない
(c) 未来、現在の過去の時間を指す場合には“那”を用いる。	Ⅳ (c)		Ⅴ (c)	Ⅵ (c)
(f)話者が指示対象との関係を否定し、距離を置く場合は“那”を用いる。	Ⅶ 事例無し (但し、句読点程度の停頓であれば(f)が優先)	Ⅷ 対立が問題になる状況が存在しない		Ⅸ 対立が問題になる状況が存在しない
(h)指示対象が話題成分としての地位が確立していない場合“那”を用いる。	Ⅹ (h)	ⅩⅠ 対立が問題になる状況が存在しない	ⅩⅡ (h)	ⅩⅢ (g)

a > d、a > e、c > b、c > e、c > g、h > b、h > e、g > h (優先度がより高い > 優先度がより低い)

さらに、得られた結果を二分法でまとめて以下の図表 1 に示した。この図表 1 で(e)や(f)

より上方で選択規則を破るような指示詞を選択した場合、それは不自然な指示詞選択となる。(e)と(f)のところまで進んだものに関しては、多くの場合、“这”“那”のどちらで指示しても不自然ではないが、どちらで指示するかで話者の発話意図が変わることになる。



[図表 1]

以上、文脈指示用法を広く全般的に扱い、これまで検討してきた選択基準にはどのようなものがあり、それぞれの選択基準はどのような概念であるのか、典型例を挙げつつ紹介した。

２．４．１０　本論文で扱う言語現象の指定とその理由

上で扱った選択基準は、いわば大枠であって、使い分けも比較的明確なものが多かった。たとえば、後方指示は近称指示詞を用いる、という規則は、英語や日本語にも共通するものであるために、非母語話者の学習者であっても、比較的簡単に習得できるものといえるであろう。また、指示対象が時間そのものである時間指示は、ネイティブ調査でも意見が分かれることがなく、その使い分けもはっきりとしており、非母語話者であっても容易に理解できると言える。筆者は、小野 2013 の執筆と並行しながら、またそれを書き上げて以降、論文、小説、中国人同士の会話、映画、ドラマ等ジャンルを問わずありとあらゆる目にする耳にする全ての中国語の言語資料を検証材料として、上の基準で全ての指示詞の選択を説明できるかを考えてきた。そのうち、前方指示以降のある部分については、より詳細な選択基準の検討が必要であるように感じるようになった。そして、この部分の更なる詳細な検討こそが、中国語学習者にとって最も難解で、知識として学習しなければ現場指示の距離感のような漠然とした感覚からは予想がつかない指示詞の選択基準を含んでいることに気づくようになった。

筆者の検証作業では、自分の発言を非単独用法の指示詞で指示する場合の指示詞の選択は、既に 2 章で見てきた指示詞の選択基準によってほとんど説明がつき、「近」と「遠」の概念からの予想も大きく外れるものに遭遇することはほとんどない。「単独用法の指示詞」とは、「数量詞……や名詞句を後ろに伴わず、それのみで一つの文構成素として機能している非連体的な“这/那”(木村英樹 1982：2)」のことであり、「非単独用法の指示詞」とは“这件事(このこと)”、“那时(あのとき)”のように＜指示詞＋X＞の形式で用いるもの、また、“这样”“那样”“这么”“那么”の形式で用いるものである。自分の発言を非単独用法の指示詞で指示する場合の使い分けは、本論文の 5 章で扱う代名詞と共起する指示詞のような特殊な場合を除けば、日本人にとっても、比較的習得しやすいといえるものが多い。しかし、自分の発言を単独用法の指示詞で指示する場合の使い分けは、既に上で見てきた選択基準だけでは説明しにくいものがあり、「話者が、自分が指示対象に組み込まれることを示すか否か」という基準のみでは説明がつかないものが見受けられた。たとえば、次のような文で話し手は指示対象について詳しく知っており、話者が指示対象と距離を置こうとしているとも考えらえられないが、“那”を“这”に置き換えられないのはなぜか。

(47) 由于中国社会是一个正在从传统中脱胎出来的社会,传统对社会生活仍然发挥着重大影响。因此，通过对中国社会的研究来理解现代性具有得天独厚的优势。在中国，对

现代性的研究还有一个实用性的目的，{那/*这}就是通过研究现代性以促进中国的现代化进程。

中国社会はちょうど伝統から脱皮しようとしている社会であるので、伝統は社会生活に対して依然として大きな影響を与えている。そのため、中国社会の研究を通して現代性を理解することは先天的な優位性をもつ。中国では、現代性の研究にはさらにまだ一つ実用的な目的がある。それは現代性の研究を通して中国の現代化の歩みを速めることである。

上のような現象は、指示対象が自分の発言であって、かつ、指示対象を単独の指示詞で指す場合においてのみ観察されるようである。したがって、このような問題を解決するには、相手の発言を指示する場合のシステムと自分の発言を指示する場合のシステムがどのように異なるのか、またどのように共通しているのかを解明しなければならない。そこで、本論文では、指示対象を相手の発言と自分の発言とに分けて詳細に検討していくことにした。本論文は、第 3 章では、指示対象が相手の発言であるものを詳細に検討し、第 4 章では、指示対象が自分の発言であるもので、指示対象を単独の指示詞で指す場合を取り出して詳細に検討する。

更に、筆者が 2 章で得た結論を検証していくにつれ、特に＜三人称代名詞＋指示詞＋量詞＋“人”＞の形式における指示詞選択の規則性を見出すことが難しいことにも気づいた。その点を深く検討していくうちに、この形式において、一人称代名詞や二人称代名詞についても、先行研究で述べられてきた事柄にはまだまだ不足があることがわかった。たとえば、＜人称代名詞＋指示詞＋量詞＋“人”＞の形において、先行研究では代名詞が一人称で後方の名詞成分と同格関係にあるとき、指示詞は“这”しか用いることができないと言われてきたが(徐丹 1988：129、杨玉玲 2010：144-145)、実際の例文では下のように、“我们这些人”ではなく、“我们那些人”が用いられており、ネイティブ話者に尋ねても、特に不自然と感じられないのはなぜだろうか。

(48) 过了一年，他就有点门了。以后我们就基本独立搞了。那时候常在野外跑，跑一圈要回乌鲁木齐，天很晚了，我们那些人呢都想早点住下了。专家他不行，半夜三更也得一直赶到乌鲁木齐，他老婆在乌鲁木齐啊。(CCLM)

一年経って、彼はコツを掴んだ。それからは私たちは基本的に自分たちでやれるようになった。その頃はよく野外に出かけていて、ひととおり回ってウルムチへ帰ろうとしていたんだけど、日も遅くなったから、私たちってさぁ、みんな早く泊まりたいと思っていた。専門家の彼は駄目で、夜中であってもまっすぐにウルムチに駆けつけなければならなかった、彼の奥さんがウルムチにいたからね。

本論文では、これらの問題の答えをさぐるため、一人称代名詞、二人称代名詞、三人称代名詞の場合の、単数、複数を共に研究対象とし、かつ現場的側面、観念的側面、文脈的側面の全てを考慮した上で、どのような状況でどの指示詞が使われるのか、中国語話者は一般にどのような思考過程を経て指示詞を選択しているのかを分析し、そこで得られた結論を通して、現場的指示、観念的指示、文脈的指示の 3 つの用法が可能な場合に、中国語話者は何を以って用法を採用しているのか、統一された明確な指針はあるのか、それとも拮抗することがあるのかについて検討する。

本論文では、第 3 章以降、上に述べたような疑問の答えをさぐるため、図表 1 における、「前方指示」以降の部分すなわち、文脈指示のうち、指示対象と指示詞の間に大きな開きがなく、指示対象が時間ではなく事物を指し、後方指示ではなく前方指示であるものを考察対象とする。この部分の指示詞選択について、小野 2013 であまり深く検討していなかった事柄も含め、更に詳細に考察していく。それぞれの議論に関わる先行研究は、それぞれの章でその都度検討していくことにする。

３．　相手の発言を指示する場合

３．１　先行研究と問題点

本章では、前方指示用法のうち、相手の発言内容を指示する場合の指示詞選択について詳細に検討する。2.4.3 で既に述べたように、中国語では、指示対象が自分の発言内容であるのか自分の発言内容であるのかによって指示詞を決定することはできない。しかし、先行研究の中には､相手の発言を指示する場合の指示詞の選択について検討したものがある。その一つに陈艳芳 2005 がある。陈艳芳 2005 は、中国語の指示詞選択について、他者の話した話あるいは持ち出した事柄を指す場合、賛同や承諾の態度をとるときには“这”を用い、…相手の言った話に対して異なる見方を持っており、相手が表現した観点と一定の距離を保ちたいときには“那”を用いる(陈艳芳 2005 ： 106-107)と述べた。しかし、中国語では、相手の発言に賛同せず反対しているときでも、しばしば相手の発言を“这”で指示する。次の例を見てもらいたい。

(1)钟可可:不如我们就跟鼎亨合作吧。
妈妈:这件事情我不会同意的。他们想着法算计我们，不就是为了吞并观浪渔村吗？
(*爱的创可贴*、第 22 話、7 分 58 秒-8 分 12 秒)

钟可可:私たち、鼎亨と提携した方がいいと思うわ。
母親:それには私は同意しません。彼らはなんとか私たちをだます方法を考えている、つまり観浪漁村をのっとるためじゃないの。

(2)“对呀！尼德・兰，再等一会，”我答，“现在很明白，这些人并不想饿死我们，因为，如果要饿死我们，昨天的晚餐便没有意义了。”
“是要把我们填肥！”尼德・兰答。
“我反对您这话，”我答，“我们并不是落在吃人的野蛮人手里！”
“一次送饭不能作为定论，”加拿大人很正经地答，“谁知道这些人是不是很久就没有新鲜的肉吃了，真是这样的话，像您教授，您的仆人和我，三个身体康健的人的肉……”
“尼德・兰师傅，您不要这样想，”我回答鱼叉手，“您更不能从这个角度来反对我们的

主人，这样只能使情势更加严重，更加不利。”（*海底两万里*）（白鹿书院 2002）

「いいから、ネッド、待とう！」わたしは答えた。「あきらかに、謎の男たちは、われわれを飢え死にさせる気はなさそうだ。だって、そうだとしたら、昨日の夕食は何の意味もないじゃないか。」

「おれたちを太らせようとするのでなけりゃな」ネッドが言い返した。

「わたしはそう思わないね」わたしは答えた。「人食い人種の手に落ちたわけじゃないだろう！」

「一回めは習慣ならず、だよ」カナダ人がまじめに答えた。「奴らは長いこと新鮮な肉に飢えていたかもしれないじゃないか。だとしたら、先生や召使殿やおれのような体格のいい人間が……」

「そんな考えは捨てるんだ、ランド親方」私は銛打ちに答えた。「とくに、そんなことで、われわれを迎えてくれた人たちに腹を立てるものじゃない。そんなことをしても、状況が悪くなるだけだ。」（朝比奈美知子訳 2007a：125）

(3)“对，就是昨夜，几分钟内，我们便走过了这不能走过的地峡。”

“我不能相信这事。”加拿大人回答。

“您错了，兰师傅，”我立即说，“那向南方弯下去的低低的海岸，就是埃及海岸了。”

“先生，您向别人说去吧。”固执的加拿大人回答。

（…途中略…）

加拿大人很用心地看了一下。他说：

“果然，教授，您说得对。您的那位船长是一位杰出人物。我们现在是在地中海了。很好。…（*海底两万里*）（白鹿书院 2002）

「そうだよ。昨日の夜、何分かのうちに、わたしたちはあの越えがたい地峡を越えたんだ。」

「(φ)信じられないね」カナダ人は答えた。

「君はまちがっているよ、ランド親方」私はふたたび言った。「南方で弧を描くあの低い海岸は、エジプトの海岸だよ。」

「おれにはそんな話は通じないぞ」頑固なカナダ人は言い返した。

(…途中略…)

カナダ人は注意を凝らして見た。

「ほんとうだ、先生。あんたの言うとおりだ。あんたの船長は大した人物だよ。おれたちは地中海にいる。よろしい。…(朝比奈訳 2007b：114-115)

例(1)から(3)で、四角囲みで記した指示詞の話者は、明らかに相手の発言に不同意であり、相手が表現した観点と異なる見方を持っている。しかし、その相手の発言を“这”で指示している。複数のネイティブスピーカーに調査したところ、これら 6 つの“这”はどれも“那”にすることは容認されないという。したがって、陈艳芳 2005 が指摘した、他者の話した話に賛同や承諾の態度をとるときには“这”を用い、異なる見方を持っており相手の観点と一定の距離を保ちたいときには“那”を用いて指す、という指針は、非母語話者である中国語学習者が適切な中国語指示詞を選択し得るに足る選択基準ではない。本論文では、相手の発言を指示する場合の指示詞選択について、より適切な基準を提案する。

３．２　本研究の提案

本研究は、中国語で相手の発言内容を指示する場合について、次の指示詞選択基準を提案する。すなわち、話者が相手の発言内容を重視している程度が相手と同じほどかそれ以上に高いことを示す場合、また話者が自分の相対的重視度の低さをわざわざ示す必要の無い場合には“这”を用い、逆に話者が指示対象を相手ほど重視していないことをはっきりと示す場合には“那”を用いて指す。なぜそう言えるのかについてこれから見ていきたい。

(4)“哈罗，威尔逊，你这家伙，”汤姆说，一面嘻嘻哈哈地拍拍他的肩膀，“生意怎么样？”

“还可以，”威尔逊缺乏说服力地回答，“你什么时候才把那部车子卖给我？”

“下星期。我现在已经让我的司机在整修它了。”

“他干得很慢，是不是？”

“不，他干得不慢，”汤姆冷冷地说，“如果你有①{这/?那}[13]样的看法，也许我还是把它

[13]本論文で挙げている例文は全て複数のネイティブスピーカーにアンケートをとっており、“*”は複数のネイティブスピーカーがほぼ全員一致で、その文脈で当該の指示詞を使うことはありえないと答えたことを示しており、“?”はほとんどのネイティブスピーカーがその文脈でその指示詞の使用が、より不自然だと答えたことを示している。以下同じ。

拿到别处去卖为好。”

“我不是②{这/?那}个意思，”威尔逊连忙解释，“我只是说……”（《了不起的盖茨比》）

「やあ、ウィルソン」、トムは彼の肩を機嫌よく叩きながら言った。「商売はどうだね？」

「ぼちぼちですよ」とウィルソンは力なく答えた。「車はいつ売ってもらえるんでしょう？」

「来週になる。今うちのものが手を入れているところだ」

「やけに時間がかかるじゃありませんか」

「そういう言い方はないだろう」とトムは冷たい声で言った。「もし君が①そのようにとるのなら、よろしい。こちらとしても、ほかのところで車を売ることを考えよう」

「いや、何も②そんなつもりじゃ」とウィルソンはあわてて弁解した。「あたしわね、ただ――」(村上春樹訳 2006：52-53)

次の例(4)'は、(4)の文脈に手を入れて、最後の一文を書き換えたものである。網かけ部は書き換えたところを示している。

(4)' “他干得很慢，是不是？”

“不，他干得不慢，”汤姆冷冷地说，“如果你有①{这/?那}样的看法，也许我还是把它拿到别处去卖为好。”

“我不是②{?这/那}个意思，但我无所谓。你可以到别处去卖。你在哪里卖我不管。”(網かけ部筆者、ネイティブチェック済)

「やけに時間がかかるじゃありませんか」

「そういう言い方はないだろう」とトムは冷たい声で言った。「もし君が①そのようにとるのなら、よろしい。こちらとしても、ほかのところで車を売ることを考えよう」

「②そんなつもりじゃないが、どうでもいい。別のところで売ればいい、君がどこで売ろうと私の知ったことじゃない。」(網かけ部筆者)

(4)及び(4)'の①は、続く部分で相手の発言によって自分の行動がどのように変わるのかを述べていることから、話者が相手の発言を重要視していること示そうとしており、“这”

が用いられている。(4)②では、相手の発言を受けて、「そんなつもりじゃ(ない)」と言い、続く部分で相手の誤解を解こうとあわてて弁解を始めていることから、相手の発言を重要視しているのが分かるが、やはり“这”が用いられている。この文脈に手を入れて(4)'②のように書き換え、「そんなつもりじゃないが、(あなたがどう捉えようと)どうでもよい」と言う場合、話者は相手の発言を重大なこととして受け止めていないことを示すことになるが、“那”の使用がより自然になるという。このことから、相手の発言内容、及びそれに不同意であるという自分の立場が共に同じであっても、その発言に対する話者の重視度が異なれば、用いる指示詞は異なることが分かる。

次に、突然恋人から別れ話のような発言を受ける場面を見てもらいたい。

(5)A：我们还是保持一点距离吧。

B：为什么？为什么要说{这/那}种话?(作例)

A：私達、ちょっと距離をおきましょう。

B: どうして？どうして{そ}んなこと言うんだ？

(5)の場合、相手の発言を“这”で指示することも、“那”で指示することもできる。“这”で指示すると、相手の発言を深刻に受け止め、どうしてそんなことを言うのか本当に分からない、原因を究明したい、というニュアンスになるのに対し、“那”を用いると、相手の発言はくだらないことで、そんなナンセンスなことを言うべきでない、自分が深刻に受け止める必要がないほど馬鹿げている、というニュアンスになるという。これらのことから、話者が相手の発言に賛成か反対かということではなく、話者が相手の発言を重大な事柄として受け止めているかどうかが指示詞の選択基準となっていることが分かる。

次に、話者が相手の発言を相対的に重視して指す典型例と、軽視して指す典型例を見ていく。

３．３　話者の相対的重視度が高いことを示す場合

相手の発言に対して、相手よりも自分の方が指示対象を重視していることを示す典型的な場面の一つは、相手の発言が自分に対する不当な干渉であると主張するときである。不

当な干渉がなされていると感じる場合というのは、相手の発言内容が本来自分自身に属する事柄である場合等に、相手がその当該事象を重要視する程度が本来自分よりも低いものであるべきであるのに、その程度が自分の期待するふさわしい程度を超えているために起こるものであるからである。下の例はそのような場面である。

(6)“你还是别开口更好!”五点说,“就在昨天,我听见王后说,你是应该杀头的。”
“为什么?”第一个说话的问道。
“{这/*那}跟*你*不相干,二点!” 七点说。(**That**'s none of YOUR business, Two!' said Seven.)(*Alice's Adventures in Wonderland*) [Lewis Carroll 1971: 69] (陈复庵訳 1981: 121)

「おまえはだまっておれよ!」と五郎。「女王さんがきのうおまえを打首にしても差支えないとおしゃったのをわしはきいたぞ」
「どういうことでだね?」と最初に口を開いたのが言った。
「二郎、(φ)お前なんかの知ったことじゃない!」と七郎。(尾上政次訳 2005: 155)

(7)谢勇:你俩到底为什么离婚?你对她挺好嘛。她也那么喜欢你,你们俩在一起多般配。还有你们为什么不打掉这个孩子,重新在一起生活?在一起多好,你们俩。
小达:{这/*那}事跟你没关系啊。(*唐山大地震*、第 28 話、26 分 46 秒-27 分 06 秒)

谢勇:君達二人は一体どうして離婚したんだ?君は彼女にとてもよくしているじゃないか。彼女もあんなに君のことを好いている。君たち二人は一緒にいればとてもお似合いだ。それに、君たちはどうしてこの子を堕ろして、改めて一緒に生活しないんだ?一緒にいればどれほどいいか、君たち二人。
小达:そのことはあなたとは関係ありませんよ。

(8)阿雅:哎,辞工这么大的事,你为什么不告诉我?你说话呀。你知道我在这条街上来来回回找了你多少遍吗?
小达:是小顺子告诉你我在这儿的吧。
阿雅:你甭管。你先回答我。为什么不告诉我?

小达:我告诉你，你就高兴了？再说了，{这/*那}是我的事。不用别人管。

(*唐山大地震*、第 14 話、01 分 38 秒-01 分 57 秒)

阿雅:ねぇ、仕事をやめるなんてそんな大事なこと、あなたどうして私に言わないの？話しなさいよ。あなた、私この道を行ったり来たりしてあなたのこと何回捜したか知ってるの？

小达:小顺子が僕がここにいるって君に教えたんだろ。

阿雅:あなたの知ったことじゃない。先に私に答えて。どうして私に言わないの？

小达:僕が君に言えば、君は喜ぶのか？それから、これは僕のことだ。他人が構わなくていい。

(9)潘晓婉:你根本就不喜欢美溪，你更不爱她。你所做的所有的一切，只是为了来伤害我。你欺骗美溪的感情让一个纯真的少女受尽折磨，你太卑鄙了。

江昊天: {这/*那}跟你有关系吗?我爱怎么做这是我的事情!你少管我的事。

(*恋了爱了*、第 20 話、22 分 48 秒-23 分 02 秒)

潘晓婉:あんたは美溪をちっとも好いてなんかいない、ましてや愛してなんていない。あんたのすることは全部、ただ私を傷つけるため。あんたは美溪の気持ちを騙して、純真な少女をさんざんいじめている。あんたって卑怯ね。

江昊天:それがお前に関係があるのか？俺がどうしたいかなんて、それは俺のことだ！俺のことに口出しするな！

例(6)から(9)は、相手が当該事象を重視する程度がふさわしい域を超えていることに警告を発する場面であるが、どれも“这”が用いられている。中国語では、相手の発言内容を指して「それは私のことであなたが重視すべき事柄ではない」と主張する場合、相手に疎外感を与えることを巧みに避けようとするような例外[14]を除いて、常に“这”が用いられ

[14] 相手が自分に関することを質問してきたことに対して、“这是我的事儿(それは私の事です)。”と返答すると、話者が指示対象を重視している程度を強く示すことで、相手に強い疎外感を感じさせてしまう。相手への配慮として、相手に疎外感を与えることを回避するために“那”が用いられるということがある。下の例では“那”が用いられているために、ぶしつけな印象が抑えられ、和らいだ語調になっている。

る。CCLM で、相手が指示対象に干渉してくることを強烈に非難する反語表現“这关你什么事(そ/これがあなたと何の関係があろうか)”を検索すると、7 例あるが、文法的には全く問題の無い“那关你什么事”を検索しても 0 例である。

この点に関して、指示対象に対する相対的重視度によって指示詞が選択されているのではなく、単に指示対象である相手の発言内容が自分に関することであるかどうかで選択されているのではないか、という反論が考えられるが、そうではない。なぜならば、当然、相手の発言内容が自分に関係があることであれば、話者はそれを重視することが多く、そのため指示詞“这”で指す例が多い。しかし、指示対象が自分に直接関係していることでなくても、相手の発言が考慮に値することを認め、自分も指示対象を重視していることを示している場合には“这”を用いて相手の発言を指すからである。それは次の例によく表れている。

(10)大爷:不会多生产些?
马主任:您这就问得在理了。可这是生产部门的事，我们商业部门解决得了？(*车站*)(高行健 1986：17)

爺さん:生産量を増やせないのかね？
馬主任:(φ)もっともな質問だ！だが、それは生産部門の管轄でね。我々営業部門では解決できない。(飯塚容訳 2000：81)

上の例でも、話者が相手の発言を軽くあしらい、共に考える姿勢を示そうとしないので

I think he hardly knew what he was saying, for when I asked him what business he was in he answered: "That's my affair," before he realized that it wasn't an appropriate reply.(*The Great Gatsby*) (F. Scott Fitzgerald 1950: 87)

我猜想他自己也不大知道他在说些什么，因为等我问他做的是什么生意时，他回答：“那是我的事儿。”话说出口他才发觉这个回答很不得体。(巫宁坤訳 1996)

このときのギャッツビーは、ほとんど上の空だったのだろう。私がどんなお仕事ですかと聞いたら、「それはこっちの話」と言ってから、しまったと気づいたようだ。(小川高義訳 2009: 146)

あれば、下のように、“那”がより自然な表現となる。

(10)’大爷:不会多生产些?

马主任:那是生产部门的事，我们商业部门解决得了?

爺さん:生産量を増やせないのかね？

馬主任:それは生産部門の管轄でね。我々営業部門では解決できない。

したがって、ただ単に指示対象が自分に関係があるかどうかによってではなく、むしろ話者の指示対象に対する相対的重視度によって選択されていることが分かる。

このように、相手よりも自分の方が当該事象を重視しているということを強く示す場面では“这”が用いられることが分かる。次に、話者が相手の発言を重視する程度が相対的に低いことを示す場合の典型的な例を見てもらいたい。

３．４　話者の相対的重視度が低いことを示す場合

３．４．１　門前払い

相手の発言を、考慮に値しない非重要な事柄として捉えて門前払いのような態度をとる場合の例を次に挙げる。

(11)钟可可:现在这样挺好的。反正合约已经不存在了。我们就不用再彼此折磨了。挺好的。

唐少磊:{*这/那}是你自己的想法。我告诉你，我就是要赖着你，你能拿我怎么样? (*爱的创可贴*、第 32 話、16 分 06 秒-16 分 27 秒)

钟可可:今こうなったのはすごくいい。どうせ契約はもう存在しない。私達はお互いに苦しめあわなくてよくなった。すごくいいよ。

唐少磊：それは君自身の考えだ。言っておくが、僕は君を離さない。君は僕に何ができる？

(12)谁从烟囱里下去?——不，我不去！你去吧！——{*这/*那}[15]我才不干呢!(***That*** I won't, then!) ——得叫比尔下去——嗨，比尔！老爷说你得从烟囱里下去！(*Alice's Adventures in Wonderland*) [Lewis Carroll 1971: 69] [陈复庵訳 1981 :53]

誰が煙突を降りるんだ？——いや、おれは御免だ！お前がやれ！——(φ)おれはいやだよ！——ビルが降りるんだ——さぁ、ビル！旦那はお前が煙突をおりるんだといっているよ！(尾上政次訳 2005: 71)

(13)女人:我很感谢你对我的感情。但是，我已经有男朋友了…。
男人: {*这/那}有什么关系？！你们又没有结婚，我有追求你的权利。(作例)

女性：あなたのご好意には感謝しています。ただ、すでに彼氏がいるので…。
男性：それがなんだっていうんだ！？君たちは何も結婚しているわけじゃないんだから、僕には君を追いかける権利がある。

(11)から(13)では明らかに、話者は、相手の発言についてこれから深く検討していく意志を持っていない。例(1)から(3)では、不賛成であるとはいえ、相手の発言を指示した後に、自分が同意しない根拠について語るなど、相手とその指示対象について話し合いを続けており、(11)から(13)のように相手の発言内容を重視せず、考慮の余地なく払いのける門前払いとは異なっている。このような場合、指示詞は“那”が用いられる。

３．４．２　言い訳をするとき

もう一つの、相手の発言を軽視して指す典型的な場面は、言い訳をするときである。こ

[15]中国語の“那”は指示詞の用法と接続詞の用法があり、指示詞か接続詞かはっきり分けることのできないものが存在する。(12)の“那”は、接続詞としての用法を持ち合わせているとも考えられるが､同時に指示詞ではないと言い切ることもできない｡いずれにせよ、この例は、少なくとも、その部分を“这”に置き換えることが容認されず、(接続詞に近いとしても)“那”が自然であるということを述べるには足ると考える。３．５節の例(22)についても同様である。

こでいう、言い訳とは、当該事象に至った経緯について真摯な態度で相手の知り得ぬ情報を提供するのではなく、言い逃れ、責任回避の意図が見え見えの『事情説明』のことを指す。この場合、中国語では、常に“那”が用いられる。言い訳をする場合、話者は相手に指摘されている事柄を、とるに足りないささいな問題として扱おうとするため、話者の指示対象に対する重視度が相対的に低いことを示す“那”が用いられると考えられる。

(14)A:为什么你最近经常迟到?

B:{*这/那}是因为最近路上经常被帅哥搭讪。(作例)

A:どうして最近いつも遅刻するの？

B:だって最近道でよくイケメンにナンパされるんだもん。

(15)A:为什么你三天两头地换男朋友啊?

B:{*这/那}是因为我有魅力嘛。(作例)

A:どうして彼氏をとっかえひっかえしているの？

B:私に魅力があるからよ。

(14)、(15)では、指示詞の話者は、相手の問いを真剣に分析して究明した理由を述べているのではなく、相手の発言を軽く受け流して責任を回避しようとしている。理由として述べられているものは､実際には論理性を欠き､本当の意味で理由と呼べるものではない。このような場面で、相手の発言を重く受けとめていることを示す“这”を用いて“这是因为(それはなぜならば)…”と分析的に事情を述べると、非常に奇妙な表現になり、容認されない。

もし､相手の発言に対し､真摯な態度で自分の非を認めつつ釈明を行う場合であれば“这”が用いられる。

(16)［公的な場で、企業がマスコミに対して記者会見を開いている場面］

A:「汚染水を知っていながら川に流していたのはどうしてですか。」

B:「それは、水質検査を委託していた下請け会社と、弊社の一部の従業員の間に、会社が把握していない談合がおこなわれていたからです。」

B:{这/那}是因为我们所请的检查水质的公司与本公司的部分工作人员之间存在着暗中勾结。(作例)

(17)では、企業側が謝罪の気持ちを込めて誠実な態度で事の経緯を述べるなら“这”が用いられるが、企業側の落ち度ではないという意図を含んだ「言い訳」的な態度で事の経緯を述べるなら“那”が用いられるという。

次の例は、長い間授業を休んでいる生徒がいて、教師が生徒にそのことを指摘する場面である。

(17) 老师:你最近是不是一直没有来上课?

学生: {*这/那}是因为…。

(cf.学生: 我早就想跟你商量{这/*那}件事了。) (作例)

教師：最近、ずっと授業休んでいるでしょう？

生徒：それはだって…。

(cf.生徒：私は前からそのことについて相談したいとおもっていたんです。)

もし、生徒が反抗的な生徒で、教師の発言を受けて言い訳を述べようとする場合であれば“那是因为…(それはだって…)”というように、教師の発言は“那”で指示され、“这”を用いて指示されることは無い。同じ場面であっても、もし生徒に反抗的な意図はなく、何かの事情があってずっと授業を休んでしまっているという事実を生徒自身も重大なこととして捉えており、言い訳はおろか、これを機会に教師にこの件について相談したいという場面であれば、“我早就想跟你商量{这/*那}件事了(私は前からあなたとそのことについて相談したいと思っていたんです)”のように、教師の発言は“这”で指示される。このことからも、やはり指示対象に対する話者の重視度が指示詞の選択基準となっていることが分かる。

３．４．３　相手こそが重視すべきだという勧告を行うとき

更に、話者が指示対象をある程度重視していたとしても、相対的に言って相手こそが指示対象をより重視すべきであるということを強調する場合には、“那”が用いられるという点にも注目したい。

(18)小达:妈，我没事。我就是去跟她把憋在心里三年多的话都跟她说了，也就这样了。妈，您说得对。我不该这么耗不去了。我也应该继续了。您不是要给我张罗什么相亲吗?该相亲相亲，该见面见面。我去相亲，找到合适的就结婚。

李元妮:你不是说的气话吧?

小达:不是，我有什么可气的呀?妈，您放心，我一定给您找一个好儿媳妇回来。

李元妮:什么叫给我找啊?是给你自己找。{*这/那}是你自己的终身大事。行了。想明白就行啦。我给你拿照片去。

小达:好。(*唐山大地震*、第 24 話、33 分 42 秒-34 分 27 秒)

小达:お母さん、僕は大丈夫だよ。僕は彼女に対して 3 年あまり心に封じ込めていたことを全部話した。お母さん、あなたの言う通りだ。僕はこんな風にして消耗していくべきじゃない。僕もやっていかなくちゃ。あなた僕にお見合いを準備するんじゃなかった？お見合いしよう、会ってみよう。お見合いして、いい人がみつかったら結婚だ。

李元妮:腹立ち紛れの言葉ってわけじゃないわよね。

小达:違うよ。僕が何に腹を立てるっていうんだよ。お母さん、安心して、僕はあなたにいいお嫁さんを探してきますよ。

李元妮:何が「私に」ですか？あなた自身のために探すんです。それはあなた自身の一生涯の大事なんですよ。いいわ。わかったと思うならそれでよろしい。あなたに写真をとってくるわ。

小达:うん。

(19) 儿子：妈，我不想考大学了。

妈妈：{*这/那}怎么行？！还有一个月就高考了，你别三心二意了。能不能考上个好大学，可是关系到你一辈子的大事。(作例)

息子：母さん、僕大学を受験したくなくなった。

母親：そんなことがどうして通りますか?!あと一ヶ月で大学受験なんだから、気を散らさないで。いい大学に合格できるかどうかは、あなたの一生の大事なんですよ。

(18)、(19)では、母親は息子の結婚や受験について当然重視しているが、それでも、本来息子の結婚や受験は自分よりも息子自身がもっと重視するべき事柄であり、かつそのことを示さなければならない場面であるので、“那”が用いられる。もし“这”を用いるのであれば、自分よりも相手こそ重視すべきである、という自分の重視度の相対的低さを強調することではなく、単に息子にとって重要であるということを理解させることが目的で相手の発言を指示しているのであり、その場合、「それはあなた(自身)の一生涯の大事なんですよ」の後にまだまだ説得が続いていくように予想されるという。

(20)女人:你为什么一直都不向我求婚?
女人的男朋友:{*这/那}是因为你说过“三十岁之前不考虑结婚”的。(作例)

女性：どうしてずっと私にプロポーズしないの？
女性の彼氏：それは君が「30 歳になるまでは結婚は考えない」って言ったからだろ。

(20)は、(14)や(15)のように、相手の発言を軽く受け流している訳ではない。そうではなく、相手の発言を受けて、その問題について真剣に考えなければならないのは自分よりもむしろ相手の方だ、ということを示している。この場合も“这”は用いられない。このことから、重視度とは絶対的なものではなく、話者と相手との間における相対的なものであることが分かる。

３．５　慰めにふさわしいのは“这”か、それとも“那”か

相手が問題として捉えている事柄を“那”で指示すれば、自分は指示対象を相手が深刻に思い悩むほど重視すべき問題ではないと捉えていることを示すことができ、相手を安心させたり、慰めたりするのにも用いられる。

(21)“嘿，他们彼此相爱，而且主席也同意了，我还能有什么意见？”她开心地笑道。

停了一会儿，她又说：“小孔各方面都好，就是有点胃病。”

我说：“{?这/那}不要紧，在饮食上注意一点，很快就可以治好的。”(CCLM)

「ねぇ、彼らは相思相愛だし、主席も同意している。更に何か不満があるかしら？」彼女は嬉しそうに笑って言った。しばらくして、彼女がまた言った。「小孔はどこもみんないいんだけど、ただちょっと胃病なの」

私は言った。「それは心配ない。食事に少し気をつければ、すぐに治るわ。」

(22)许琪:真没想到这新店生意能这么好。按照这么样下去的话，不出一年就可以回本儿了。

阿雅:不过咱们现在的钱呢，是好多客人的预付款，如果下个月客人数目不增加的话，就没有那么多钱了。

许琪: {*这/那}我也不怕。只要你在这儿，我就有信心。(*唐山大地震*、第 26 話、32 分 07 秒-32 分 27 秒)

许琪:オープンした店の商売がこんなにもうまくいくなんて本当思ってもなかった。この調子で行けば、一年以内に資本金を取り戻せるわ。

阿雅:でも、私達の今のお金は、たくさんのお客さんの前払い金だから、もし来月顧客の数が増えないとそれほど多くのお金は無いよ。

许琪:それでも私はこわくない。あなたがここにいさえすれば、私は自信がある。

しかし、相手が問題として捉えていることを“那”で指示するこの方法は、物事を軽く考え、真面目に取り合っていない印象を与えることにもつながる。よって下のように、真剣に考えた上での判断として慰めを述べる場合には“那”の使用はそぐわない。

(23) “承蒙你一片好意。”嘉莉说，被这个代理人的极端热忱感动了。“我很愿意来的。不过，我想我还是按章付费。我可不想--”

“你根本不用担心{这/?那}个(You need not trouble about **that** at all)，”威瑟斯先生打断了她。“我们可以把{这/?那}事安排得让你完全满意，什么时候都可以(We can arrange **that** to your entire satisfaction at any time)。倘若你对 3 块钱一天感到满意的话，我

们也同样满意。你只要在周末或者月底，悉听尊便，把这笔钱付给帐房就可以了，他会给你一张这种房间按我们的规定价格收费的收据。”(*Sister Carrie*) (Theodore Dreiser1932：499) (天涯在线书库 2002)

キャリーは、この取り待ち役のあまりのそつのなさに心が動かされた。「とてもご親切に。すぐにでもお伺いしたいですね。でも、ちゃんとした額はお払いしないといけませんわ。そうでないと、あたし、何か――」

「そんなことはまったく心配ご無用なんです。そのことにつきましては、いつでもお気に召すようにしてさしあげられます。一日三ドルでお気持ちがおさまるのでしたら、手前どもはそれで結構です。週末なり、お好きなときに、それだけの額を係にお払いくださるだけでいいんですよ。そのときに係の者は、そのお部屋の通常料金にあたる金額の領収書をお渡ししますから」(村山淳彦訳 1997b：360-361)

(23)で、指示詞の話者は心配しなくてよい理由を、続く部分で事細かに説明している。話者は相手の懸念事項を重要なこととして捉え、真剣に考えた上での判断であることを表現しようとしている。このような場合、“这”で指す方がより自然である。

次の例は、幼少期の悲惨な体験から心に傷を負い、自分が良い母親になれるかどうかを思い悩み、苦しんでいる妻と、その夫との会話である。

(24)杨阳:吃饭的时候妈妈说的那句话，你觉得怎么样?

小登:你是说生孩子的事吗?

杨阳:对啊。

小登:你呢?你怎么想?

杨阳:这件事情以前没有怎么考虑过。但是昨天抱着罗维的儿子，然后再加上今天妈妈一说，我突然想要一个孩子了。

小登:可你之前不是说我们应该以事业为重吗?

杨阳:是，我是这么说的。我是想跟你多过几年二人世界，但是现在觉得有个孩子感觉挺好的。

小登:可是有了孩子，生活都会改变的。

杨阳:①{*这/那}肯定会改变。但是我现在挺期待②{这/那}种改变。你呢?

小登:我不知道，我不知道我能不能做一个好妈妈。

杨阳:肯定能。你没问题的。

小登:真的呀?

杨阳:当然啦。不用担心③{这/?那}个。

小登:那，那咱们也要一个。[*唐山大地震*、第 19 話、30 分 00 秒-31 分 21 秒]

杨阳:ご飯を食べているときに母が言ったあの話、君はどう思う？

小登:子どもを産むってこと言ってるの？

杨阳:そうだよ。

小登:あなたは？あなたはどう思う？

杨阳:そのことは前はあんまり考えたことなかった。でも、昨日罗维の息子を抱いて、その後に更に今日の母の一言があって、突然子供が欲しいと思うようになった。

小登:でも、あなたその前はわたしたちは仕事に重きを置くべきだって言ってなかった？

杨阳:そう、僕はそう言った。君と何年か二人の世界を過ごしたいと思っていたんだ、でも今は子どもを持つという感覚もすごくいいように思える。

小登:でも子どもを持ったら、生活が変わってしまうよ。

杨阳:①それは間違いなく変わるだろうね。でも僕は今②そういう変化をとても期待している。君は？

小登:私は分からない、いいお母さんになれるかどうか分からない。

杨阳:必ずなれるよ。君は問題ない。

小登:本当?

杨阳:当たり前だよ。③それは心配いらない。

小登:じゃあ、じゃあ私たちも一人。

①では、小登(妻)が子どもを持つと生活が変わってしまうということを懸念しているのに対し、杨阳(夫)はそのことを深刻な問題として捉えていないことを示しており、“那”が用いられている。続く部分②で、それどころか、そのような変化を期待していると述べている通りである。 (②はドラマの中で“这”が使われている。もし“那”であっても自然な表現になるという。期待している事柄は自分が待ち望んでいる事柄で、重視しているというニュアンスにしたければ“这”を用い、もし現実に起きているわけではないことに注

目すれば“那”を用いて指示することもできるが、“这”を用いた場合は“那”を用いた場合に比べて、期待している度合いが非常に強いことを表すという。）③では、幼少期の体験で心に深い傷を負った小登が、良い母親になれるかどうかを心配しているのに対し、杨阳が「それは心配いらない」と安心させているところであるが、“这”と“那”のどちらを用いても文として成立する。しかし、“那”を用いると、「何をくだらないことで悩んでいるんだ､そんなことで悩むなんて馬鹿げている」というニュアンスを含んでしまうため、この例のような、心に深い傷を負っている相手を慰める場合には、自分もあなたと同じぐらいその件を重要なこととして捉えているし、真剣に考えたけれど、心配はいらない、という理性に基づく確信を込めたメッセージを伝える方がふさわしく、やはり“这”が適切である。このように、相手の発言を受けて心配いらないと安心させる場面でも、話者の指示対象に対する相対的重視度によって指示詞が選択されている。

３．６　まとめ

本章では、談話において相手の発言内容を指示する場合の様々な例を考察した。先行研究で言われてきた、相手の発言内容に賛同しているかどうか(陈艳芳 2005：106-107)という要素は実際には指示詞の決定的な選択基準とはなっておらず、発言内容に対する相手と自分との相対的重視度が指示詞の選択基準となっていることを示した。話者は、相手の発言内容を自分が相手と同じかそれ以上に重視していることを示す場合、及び自分の相対的重視度の低さをわざわざ示す必要の無い場合には“这”を用い、指示対象を重視しているその程度が、相対的に言って相手よりも自分の方が低いということをはっきりと示す場合には“那”を用いて指すのである。

３．７　現場指示における指示詞選択との関係

2.2 で紹介したように､木村 2012 は現場指示における対話の場面での指示詞選択を扱っている。木村は現場指示におけるこの指示詞選択が、文脈指示においてあてはまるのかどうかについては何も述べていなかった。現場指示における指示詞選択は、相手の発言を指示する場合の選択基準との関係は一体どのようなものであるのだろうか。その点をここで考察する。

本章では､相手の発言を指示する場合の指示詞選択が相対的重視度によることを示した。相手の発言は、本来相手に属する対象である。相手の発言を指示する場合、指示対象を自分が相手と同じかそれ以上に重視している場合には“这”が用いられるが、それは、相手に属する対象を“这”で指すことによって、話者は自分が木村 2012 で言うところの「対立的視点」ではなく「包含的視点」に立っていることを表現し、本来相手に属する対象であるけれども、自分に近い対象として捉えていることを示すことができるためであると考えられる。また、指示対象である相手の発言を重視しているその程度が、相対的に言って相手よりも自分の方が低いということをはっきりと示す場合には“那”を用いて指すが、それは“那”で指すことによって、自分は「対立的視点」に立っていることを表現し、自分が受信者とは非共有の場にあると意識していることを明示的に示しているものと考えられる。この点で、木村 2012 の現場指示における指示詞選択は、文脈指示における相手の発言を指示する場合の指示詞の使い分けにもあてはまるといえる。また、自分の相対的重視度の低さをわざわざ示す必要のない場合には“这”を用いるが、これは、木村が現場指示の相手に属するモノを指す場合において述べている「対立的視点の有標性(木村 2012：69)」、すなわち、「包含的視点がより常態的な状況としてあり、対立的視点は有標的状況として成立する(木村 2012：71)」という点とも一致している。

以上、相手の発言を指示する場合の指示詞の選択基準について考察してきた。次の章では、自分の発言を単独の指示詞を用いて指示する場合について考察する。

４．　自分の発言を単独の指示詞で指示する場合

４．１　先行研究と問題点

４．１．１　コト指示/モノ指示

杨玉玲 2006 は文章中で、前方で述べた指示対象を単独の指示詞で指示する場合について、指示対象が陳述であるか(以下「コト指示用法」と呼ぶ)、それとも名詞性成分であるか(以下「モノ指示用法」と呼ぶ)を分析し、表 1 のような統計結果を示している。

表 1 “这”和“那”回指用法対比(“这”と“那”の前方指示用法の対比)

	这	那	比例(割合)
コト指示用法	1337(69.2%)	56(33.8%)	23∶1
モノ指示用法	597(30.8%)	110(66.2%)	6∶1

(出典 : 杨玉玲 2006: 35)

杨玉玲 2006 は、コト指示とモノ指示において“这”と“那”は比較的明確な役割分担をしており、コト指示には主に“这”を用い、“那”の使用には指示対象が虚構の仮説或いは主観の願望で非事実という条件があると指摘する。特に、指示対象が比較的長く、多くの情報を含んでいる場合には“这”の使用がほぼ強制的であると述べている。

筆者は CCLM で非常に代表的な構文といえる“这是…”と“那是…”を検索し、それぞれの最初の 100 例をサンプルとして取り出し[16]、コト指示用法であるか、それともモノ指示用法であるのかを調べた。表 2 がその結果である。ただし、現場指示用法、文脈指示用法のうち指示対象が話し相手の発言であるもの、“指示詞+是”の後に“说”が来るもの(“这/那是说”)は統計から除いてある。

[16] “这是……”と“那是……”を CCLM で検索すると、それぞれ“这是……”が 193069 例、“那是……”が 28375 例であった。ただし、この数は“指示詞+是”の後に“说”が来る表現“这/那是说”は除いてあるが、現場指示や指示詞の指示対象が相手の発言であるもの等は除かれていない。

表 2　“这是…”、“那是…”の場合

	这	那
コト指示用法	95 例	67 例
モノ指示用法	5 例	33 例

杨玉玲 2006 は、コト指示用法全体から見て、“那”は“这”に比べずっと少ないことを指摘しており(杨玉玲 2006: 35)、その指摘は正しいであろう。しかし、それと同時に、表 2 を見ると、“那是…”の形式において、“那”がコト指示用法である例は 100 例中 67 例あり、モノ指示用法である 33 例より多い。すなわち、“那是…”という個別の形式で見ると、“那”のコト指示用法はむしろ多数派なのである。また、杨玉玲 2006 は“那”がコト指示用法で用いられるには条件があり、それは虚構の仮説あるいは主観の願望で事実ではないものを指示する場合であるとしたが(杨玉玲 2006: 36)、表 2 の“那”のコト指示用法で用いられている 67 例のうち、指示対象が非事実の仮説や願望であるものは 11 例に過ぎなかった。したがって、杨玉玲 2006 の指摘のみに基づいて指示詞を選択するならば、確率的には適切な指示詞を選択できる場合が多いが、多くの誤用も生じ得ることが見てとれる。

４．１．２　定/不定

杨玉玲 2006 は、モノ指示用法の場合、“这”の指示対象は主に定成分で、“那”の指示対象は主に不定成分であるとした[17](杨玉玲 2006：35-38)。杨玉玲 2006 は、定と不定の判断を陈平 1987 の研究に基づいていると述べており（杨玉玲 2006：37)、また名詞性成分の前方指示を扱った節のまとめの部分で次のように述べている。

> 由此我们可以得出: 回指上文名词性成分时“这”和“那”之间存在着定指和不定指的对立。虽然“这”和“那”都能回指上文某一个或几个名词性成分，但它们回指的对象在定指性方面表现出很大的不同。“这”主要回指定指性成分，而“那”主要回指不定指性成分。所谓“定指成分”是指说话人认为听话人可以明白无误地判断出这些名词

[17]名詞性成分の定成分と不定成分との形式的な違いについて詳しくは[杨玉玲 2006: 37-38]及び[陈平 1987:87-91]を参照されたい。

所指的对象；而所谓“不定指成分”是指听话人无法根据任何语言信息或非语言信息把它们与其他同类事物区别开来，说话人把它们作为对听话人来说是陌生的事物引进篇章。(杨玉玲 2006：38)

したがって我々は次のような結論を出すことができる。前方文脈の名詞性成分を指示するとき、“这”と“那”の間には定と不定の対立が存在する。“这”と“那”は共に前方文脈の一つ或いは幾つかの名詞性成分を指示することができるが、それらが前方指示する対象は定性の面で大きな違いを示している。“这”は主に定成分を前方指示し、“那”は主に不定成分を前方指示する。いわゆる「定成分」は、受信者がそれらの名詞が指す対象をはっきりと間違いなく判断できると話者が考えているものを指す。いわゆる「不定成分」は受信者がいかなる言語的情報或いは非言語的情報に基づいても、それらを他の同類の事物と分けることができないものを指し、話者はそれらを受信者にとって不案内な事物として文章の中に導入する。

杨玉玲 2006 のこの指摘は確率論的に言って正しいと思われる。筆者は、この指摘に同意した上で、杨玉玲 2006 の指摘のみでは説明がつかない指示詞の選択現象に注目し、より妥当な指示詞の選択基準を提案する。杨玉玲 2006 の指摘のみでは説明がつかない点は、以下のような事柄が挙げられる。

(一)、BCC にて、＜動詞＋“一个” ＋名詞＋“。/,”＋“这就是”＞[18]と、＜動詞＋“一个” ＋名詞＋“。/,”＋“那就是”＞[19]を検索すると、指示詞が前方の不定の名詞性成分を指示している例は、“这”が 78 例、“那”が 310 例[20]であった。この数から見ても、ネイティブ話者が不定の名詞性成分を指示する場合には“那”と厳密に使い分けているとは言いがたい。

(二)、モノ指示用法において、定/不定が指示詞の選択基準になっているとすれば、話者

[18]検索式は「v 一个 n[。 ，]这就是」である。
[19]検索式は「v 一个 n[。 ，]那就是」である。
[20] ＜動詞＋“一个” ＋名詞＋“。/,”＋“这就是”＞の検索結果、及び＜動詞＋“一个”＋名詞＋“。/,”＋“那就是”＞の検索結果それぞれ 102 例、324 例の中から、重複例、現場指示用法、指示詞が前方の名詞性成分を指していないもの、また名詞性成分が定のものを除いた例の数である。

は常に指示対象が、受信者にとって、それらの名詞が指す対象をはっきりと間違いなく判断できるかどうかを考えていることになるが、話者はそもそも受信者が指示対象について「他の同類の事物と分けることができるかどうか」つまり「定か不定か」を考えずに指示することもあるはずであるが、その場合にどのように指示詞が選択されるのかが述べられていない。

(三)、下の例文(1)-(4)は全てモノ指示であり、指示対象である名詞性成分は不定成分である。杨玉玲 2006 の指摘に基づけば、すべて“那”が使用されるはずである。しかしながら、(1)は原文で“那”が用いられており、“这”との置き換えが不可能であるのに対し、(2)-(4)では全て原文で“这”が用いられており、更に (2)(3)は“这”と“那”の置き換えが可能であるのに対し、(4)は置き換えが不可能である(両者の置き換えが可能な場合、原文で用いられた方を先に記す。以下同じ)。(1)-(4)で使用可能な指示詞に違いが生じる現象を説明できる研究はまだない。

(1) 由于中国社会是一个正在从传统中脱胎出来的社会,传统对社会生活仍然发挥着重大影响。因此，通过对中国社会的研究来理解现代性具有得天独厚的优势。在中国，对现代性的研究还有一个实用性的目的，{*这/那}就是通过研究现代性以促进中国的现代化进程。[21]

中国社会はちょうど伝統から脱皮しようとしている社会であるので、伝統は社会生活に対して依然として大きな影響を与えている。そのため、中国社会の研究を通して現代性を理解することは先天的な優位性をもつ。中国では、現代性の研究にはさらにまだ一つ実用的な目的がある。それは現代性の研究を通して中国の現代化の歩みを速めることである。

(2) 以上说的是一个社会内部(如一个民族)全体人民所使用的共同语。在一个多民族的国家中，各民族之间往往还需要一个共同的交际工具，{这/那}就是所谓“国语”(与前述的“国语运动”的“国语”不同)。中国的汉语就是这样的一种共同语。

[21]本章における例文で出典を注記しないものはすべて北京大学中国语言学研究中心“现代汉语”コーパス(以下 CCLM)から採っている。

上で述べたのは一つの社会内部(例えば一つの民族)の全ての人民が使用する共通語である。一つの多民族国家において、各民族間には往々にしてさらに一つのコミュニケーションツールが必要であり、それがいわゆる「国語」(前述の「国語運動」の「国語」とは異なる)である。中国の漢語はこのような一種の共通語である。

(3) 在爱的学说上，儒墨的上述分歧，孟子及其以后的许多人都很清楚地指出过。但是除此以外，还有一个更带根本性的分歧。{这/那}就是，儒家认为，仁是从人性内部自然地发展出来的；而墨家认为，兼爱是从外部人为地附加于人的。

愛の学説では、儒家と墨家の上述の相違は、孟子とそれ以後の多くの人がはっきりと指摘してきた。しかし、それ以外にも、もっと根本的な相違がまだ一つある。それが、儒家の考えでは、仁とは人間性の内部から自然に発展してきたものであるということである。しかし墨家は、兼愛とは外部から人為的に人に付加されたものであると考えている。

(4) 我们了解了音的对立关系和互补关系，就可以进一步讨论一种语言的语音单位了，{这/*那}就是一般所说的音位。

言語音の対立関係と相補関係を理解できたなら、一歩進んで、一つの言語の音声単位について討議することができる。それが一般に言う音素である。

したがって、定/不定の対立はモノ指示用法の多くの用例を説明するのに有効ではあるものの、まだ幾らかの不足があると言える。本章では、非事実の仮説や願望ではない指示対象のコト指示用法において“那”が用いられている例や、不定のモノ指示用法において“这”が用いられている例などを観察し、その語用論的特徴を考察しながら、上で挙げた問題を解決できるより優れた指示詞の選択基準を探る。

４．２　本研究の提案

本研究は話者が自分の発言を単独の指示詞で指示する場合について、次の指示詞選択基

準を提案する。

受信者が指示対象に対して抱く理解・期待・疑問などを、話者が想定済みであることを明示的に表現しながら指示するときは“那”を用いる。そのような想定を明示的に表現する意図なく指示する場合には“这”を用いる。

話者の側で、指示対象の真相は受信者にとっていまだ十分解き明かされていない謎であるとみなし、受信者が抱く可能性のある様々な考えを想定していることを表現する場合、通常“那”を用いる。

一方、“这”を用いる場合は、先行文脈において具体的に正体を明かしたものについて、それが何についての話だったか、その位置づけはどうであったか等を総括的に短く注解する例が大半を占めるが、一部に不定のモノを指示詞で指してその具体的内容を明らかにすることもある。しかし、その場合でも“那”が使用される場合とは異なり、話者は受信者の理解、期待(一歩進んだ解き明かしを望んでいるか否か)、疑問(何らかの質疑が予想されるか否か)等をおもんばかっていることを明示的に表現する意図はない。以下、この選択基準の妥当性を検証する。

４．３　コト指示用法における指示詞選択

４．３．１　受信者の予想を覆す場面

ここでは先ず受信者の抱く疑問・理解・期待などを話者が想定していることを表現している場面を分析する。典型として取り上げるのは、指示対象について、受信者の理解を想定した上でそれとは異なる可能性のある情報を明かす場面である。

(5) “监察机关用各种方法掩饰行政官的污点，他们有时也更换行政人员，但那是为了在人民心目中，造成一种印象，以为政府也是反对官僚主义的，其实，那是政府惧怕人民骚动，故以监督官的名义来监督人民……不论监察机关的形式如何……在中央政府有‘秘密官署’，在各地方也必有很多秘密组织。”(CCLM)

「監察機関は様々な方法を用いて行政官の汚点をごまかす。彼らはある場合には行政人員を取り換えることもある。しかしそれは人民の心に、ある印象を与え、政府も官僚主義に反対しているのだと思わせるためである。実際のところ、それは政府が人民の騒動をおそれているがゆえに、監督官の名義を以って人民を監督しているのであって、……監察機関の形式がいかなるものであろうと……中央政府には『秘密局』というものがあり、各地方には必ず多くの秘密組織がある。」

(6) 他们几乎个个都认为，在一定情况下，以杀人作为手段，来自卫和达到全民幸福这一崇高目标是合法的，正当的。他们认为他们的事业十分崇高，因此自视也很高，其实那是政府很重视他们，对他们实行残酷惩罚的结果。是的，为了能承受他们所承受的苦难，他们非自视很高不可。(CCLM)

彼らはほとんどが皆、一定の状況下では、殺人を手段として自衛と国民全体の幸福という崇高な目標に達することは合法で正当であると考えていた。彼らは自分たちの事業が十分崇高なものであると認識しており、そのため自分を高く評価してもいたが、実際には、それは政府が彼らを非常に重視し、彼らに残酷な処罰を実行したことの結果である。そうだ、彼らは受ける苦難に耐えるためには、どうしても自分を高く評価せずにはいられなかったのだ。

(7) 张博认为，有些“名园”，在操场上放满游戏设备、装修得富丽堂皇，却偏偏忽略了活动空间，其实那是给家长看的，孩子并不喜欢。(BCC)

张博士の考えでは、「名門幼稚園」の中には、運動場を遊具でいっぱいにし、華麗で立派に改装して、活動空間をなおざりにしているところがあるが、実はそれは保護者に見せるためで、子どもは決して好んでいない。

(8) 别人说我衣着整洁，其实那都是妻子的“功劳”。新衣不必说，就是穿旧的衣服，她也总是给我洗得干干净净，熨得平平整整。(BCC)

他の人は私の服装がきちんとしていると言うが、実はそれは妻の「功績」なのである。

新しい服は言うまでも無く、古い服を着るときであっても、彼女はいつも私のために洗って綺麗にし、アイロンをかけてまっすぐにしてくれている。

(9) 有的家没有院墙，有的家有半米高象征性的小院墙，给人一种不设防的错觉，其实那是外松内紧。（BCC）

住宅を囲む塀の無い家もあれば、50 センチメートルの高さでほんの印程度の小さな塀の家もあり、一種の無防備な錯覚を人に与えるが、実は、これは外からは緩く見えるが中の警備はしっかりしているのである。

上の(5)-(9)において、もし杨玉玲 2006 の指摘に基づき指示詞を選択するなら、“这”が選択されると予想される。コト指示用法であり、かつ指示対象が非事実の仮説や願望ではないからである。しかし、実際に使用されているのは“那”であり、ネイティブチェックによっても、“那”を“这”に置き換えることはできない。(但し、(8)については、指示詞が発話現場で着ている自分の服装または現在の状態を現場指示的に指すのであれば、現場指示用法における指示詞選択により“这”の使用が可能である。)

(5)-(9)では、話者は指示対象に対して受信者が抱く考えを想定し、その考えを覆すような情報を明らかにしている。例えば(5)では、「監察機関が、ある場合に行政人員を取り換えることもある」という指示対象について、通常受信者が「監察機関は行政官を監督査察する職務を果たしている」という理解を抱くという想定をした上で、その真相を明かしている。続く部分では、それが「人民に、政府も官僚主義に反対していると思わせるため」であり、また「(行政官ではなく)人民を監督している」と指摘し、やはり受信者の理解を覆す説明を述べている。

話者が受信者の抱く考えを具体的に言語化するかどうかは一定ではない。指示対象について受信者が抱く可能性のある考えを具体的には言語化しない場合もある。たとえば、(8)では、“别人说我衣着整洁(他の人は私の服装がきちんとしていると言う)”という他の人の言葉を引用しているにすぎない。それでも、この言葉によって、受信者を含む他の人が「私の服装がきちんとしているのは、私自身の努力の結果である」と考えがちだ、ということを話者が表現しようとしていることに反論する者はいないだろう。また、(9)のように、“给

人一种不设防的错觉(一種の無防備な錯覚を人に与える)”と述べて、受信者が抱くであろう考えを具体的に言語化する場合もある。いずれにせよ、これらの例では、話者が受信者が前方の文脈から指示対象に対して抱くであろう考えを想定済みであることを表現する意図があるのは明白であり、このような場合、“那”が用いられ、“这”に置き換えることはできない。興味深いことに、ネイティブのインフォーマントに、上の例でなぜ“那”がより自然であると判断したのか尋ねたところ、その一つに「“其实(実は/実際のところ)”と言っているので」という答えがあった。「実は」という表現は、話者が、受信者が抱く考えを想定し､その考えとこれから明かす真相とにギャップがあることを予想している､或いは、これから明かす情報が相手の知りえぬものであると予想していることを表現するときに用いられる。このことからも、やはりネイティブ話者は、この場合、受信者の考えを想定済みであることを表現する意図があるかどうかを指示詞の選択基準としていることが伺える。

４．３．２　受信者から受けそうな指摘について注解を加える場面

話者はときおり、本来自分が今検討したい論題以外についてもごく簡単に触れることがある。たとえそれが本論に直接関係のない事柄であっても、与えられた情報から受信者が抱く可能性のある疑問や、受信者から受ける可能性のある指摘をこちら側が十分に把握済み、検討済みであることを表現しながら注解を加えておくことで、受信者を納得・安心させ、続く議論に受信者の注意を集中させようとするためである。このような注解は、受信者が抱く疑問等の想定を話者が表現しようとせず、単に自分の述べたい主張を一方的に述べていく場合には不必要であることから、話者が受信者の考えの想定を表現する場面であるといえる。下の例(10)-(13)を見てもらいたい。

(10) 口吃现象说明,我们很难断定汉语社团社会心理一定没有“词”这样的单位（当然叫不叫“词”那是次要的），而只有“字”这种单位。虽然“词”这个概念来自西方语言学,但不等于说汉语社团心理中有关汉语语法单位一定不是词。

どもりの現象は、中国語の集団社会心理に「語」という単位が(勿論「語」と呼ぶかどうか、それは副次的なことである)絶対になく、「字」という単位だけがあると断定するのは難しいことを示している。「語」という概念は西洋言語学から来たものであるが、

だからと言って中国語を話す集団・社会の心理において中国語の文法に関する単位が絶対に語ではないとは言えない。

(11) 例如“日”尽管提示太阳的形象，但它并不记录汉语里的“太阳”“日头”“老爷儿”这些词，它同样也是通过“ri”的读音和意义发生关系，记录汉语中“日”这个语素。至于写的时候或者看的时候读不读出音来，那是另外一个问题，与文字的本质无关：即使不读出音来，它也与心理的语音映象联系着，不是说与语音没有任何联系。

例えば“日”は太陽のイメージを示したものであるが、決して中国語の“太阳”“日头”“老爷儿”などの語を記録したものではない。“日”はまた“ri”という発音を介して意味と関係が発生し、中国語の“日”という形態素を記録している。書くときあるいは読むときに声に出して読むかどうかについては、それは別の問題であって、文字の本質とは無関係である。たとえ声に出して読まなくても、それは心理的な音声イメージと結びつくので、語音と何の関係もないと言っているのではない。

(12) 人们真正需要的是一个可感知的世界而非一个概念上可能的世界。尽管贝克莱相信上帝感知一切可能世界而使万物存在，但那是上帝的事而不是人的事。

人々が本当に必要としているのは一つの感知可能な世界であって、一つの概念上可能な世界ではない。バークリーは、神は一切の可能な世界を感知でき、万物を存在させていると信じているが、それは神のことであって人のことではない。

(13) 唐代是中国历史上在政治制度方面的一个最大的转捩中枢。唐以后中国的历史演变是好是坏，那是另外一回事，但罗马帝国亡了，以后就再没有罗马。唐室覆亡以后，依然有中国，有宋有明有现代，还是如唐代般，一样是中国。

唐代は中国の歴史上、政治制度面における最大の転換点であった。唐以降の中国の歴史の推移が良いか悪いか、それはまた別のことである。しかし、ローマ帝国が滅びた後、二度とローマはなかった。唐王朝が滅亡した後、依然として中国はあり、宋があり明があり現代がある。やはり唐代のように、同じく中国である。

(10)-(13)は、話者の側で受信者が抱く可能性のある疑問や受信者から受ける可能性のある指摘を想定し、それを自ら提起して注解を加えている場面である。例えば、(10)では、ここで「語」という用語が厳密に言ってふさわしいのかどうかについて受信者が疑問を抱く可能性については想定済みであることを表現し、「『語』と呼ぶかどうか、それは副次的なことである」と注解することで、その疑問がそこで論じている重要な事柄ではないことを知らせている。(11)では、「書くときや読むときに声に出して読むとは限らないのではないか」という受信者の指摘を想定済みであることを表現した上で注解が加えられている。このような場合、“那”が用いられ、“这”に置き換えられない。

(10)-(13)の例について、ただ本論に直接関係が無く、単に挿入的な文脈であるが故に“那”が用いられているのではないか、という反論が考えられるが、中国語において、本論に直接関係の無い挿入的な文脈においても、受信者の考えを想定していることを表現する場面ではなく、単に自分の述べたいことを補足的に説明する場合には下の(14)(15)のように“这”が用いられる。したがって、上の(10)-(13)において、挿入的、補足的な文脈であるというだけの理由で “那”が用いられているとは考えられない。

下の例(14)は実際の論文の本文と脚注であり、(15)は文学から採った例であるが、指示対象は本論から外れる事柄でありながら“这”が用いられている。ネイティブのインフォーマントによれば、(14)(15)では受信者が持ち出すであろう指摘を予め話者の方から持ち出してそれを指示しているニュアンスは無く、ただ目下の議論で扱う事柄と扱わない事柄をより明確にするために自ら補足事項を述べているにすぎないという点で上の(10)-(13)とは異なっているという。

(14) 大于四音节的组合则是标准韵律词跟超韵律词之间的组合[6]。

[6]本书所谈的“音步”是以“词汇词（lexical word）”为对象建立的音步。如果把“功能词”如“的”、“在…上”、“了”、“吧”等等也考虑进来，那么就可能出现大于三音节的音步，因而也可能有大于三音节的韵律词。然而{这/*那}不在本章讨论之内。(冯胜利2010：3、19)

四音節より大きい組み合わせは標準韻律語と超韻律語との組み合わせである[6]。

[6]本書の言う「音歩」は「語彙語(lexical word)」を対象に形成した音歩である。もし

“的”、“在…上”、“了”、“吧”等のような「機能語」も考慮に入れると、三音節より大きな音歩が現れるかもしれず、ゆえに三音節よりも大きな韻律語があるかもしれない。しかし、これは本章で論じる事柄ではない。

(15) 沉静一会儿，局长看看我，又接着说：“其实，他从容金珍留下的笔记本中获得破译黑密的灵感，这是不容置疑的，人都是想也想得到的，你刚才说他自己也是承认的。他为什么不对我们承认，正如我刚才说的，无非就是想拔高自己，这也是大家想得到的。因为是大家都想得到的，他硬是否认只会叫人反感，失信于众。所以，他的这个小算盘我认为打得并不高明。但{这/?那}是另外一个话题，暂且不说它。现在我要问的是，你可以想一想，为什么他都可以从容金珍的笔记本中获得灵感，而容金珍自己却不能？(BCC)

しばらく沈黙した後、局長は私を見て、さらに続けて言った。「実は彼は容金珍が残したノートによって黒密を解読するヒントを得た、これは疑いの余地がない。誰が考えても考えつくことだ。君もさっき、彼自身も認めていると言った。彼はなぜ私たちには認めなかったのかは、私がさっき言ったように、自分を持ち上げたかったからに他ならない、これも皆が考えつくことだ。皆が思いつくことだから、彼がかたくなに否定したとすれば、反感を買い、人々からの信頼を失っただろう。なので、彼のこの打算は私の考えでは全く感心できない。しかしこれは別の話題なので、ひとまずそのことについては話さないでおく。今私が尋ねたいのは、君も少し考えてみたまえ、どうして彼でさえ容金珍のノートからヒントを得たというのに、容金珍自身はできないのか。

以上、本節における考察から、一般的に“这”が用いられるとされてきたコト指示用法において、たとえ比較的長く、仮定的意味を帯びない指示対象であっても、受信者が抱く考えを話者が想定していることを明示的に表現する場面では“那”が用いられ、“这”に置き換えられないことがわかる。

４．４　モノ指示用法における指示詞選択

4.1.2 で紹介したように、モノ指示用法の場合、“这”の指示対象は主として定成分であり、“那”の指示対象は主として不定成分であるとされている(杨玉玲 2006: 37)。しかし、既に紹介したように、例(4)は、モノ指示用法で指示対象が不定成分であるにもかかわらず、指示詞は“这”が用いられており、“那”に置き換えることはできない。説明の便宜を考え、以下に再録する。

(4) 我们了解了音的对立关系和互补关系，就可以进一步讨论一种语言的语音单位了，{这/*那}就是一般所说的音位。

言語音の対立関係と相補関係を理解できたなら、一歩進んで、一つの言語の音声単位について討議することができる。それが一般に言う音素である。

ネイティブのインフォーマントによると、例(4)は、教科書の説明文の文体に近いと感じられる。特に受信者の期待を高めるような書き方をせず、客観的に事実を説明する文章において、“那”を用いて不定の指示対象を指し注解を加えると、「(受信者の抱く期待を想定して)これは一体全体何なのか、とても気になっていると思いますが」とか、「(受信者の理解を想定して)(不定の指示対象)は…のことだと予想しているでしょうけれど」といったニュアンスが生まれ、大げさで仰々しく感じられる。したがって、特に期待を高めるような文脈がない状況で“那”を用いると、受信者の抱く期待や理解などを想定済みであることをわざわざ明示的に表現している印象を与えることになり、場違いに主観的・感情的表現となって文脈にそぐわない。

ここで注意されたいのは、(4)で「これから論じられる音声単位とは一体どんな単位なのだろうか」と、これから「謎」が解き明かされることに受信者が実際に期待を寄せているかどうかによって指示詞が選択されるわけではないことである。この例でも、受信者が不定の指示対象に対して何らかの予想を立てている可能性は十分にある。また、話者が実際に受信者の考えを想定しているかどうかそのもので指示詞が選択されているわけでもない。実際に指示詞選択の基準となるのは、話者の側にそのような想定を明示的に表現する意図があるかどうかである。

一方、下に再録した例(2)(3)は、原文では“这”が用いられているが、“那”に置き換えることができる。

(2) 以上说的是一个社会内部(如一个民族)全体人民所使用的共同语。在一个多民族的国家中，各民族之间往往还需要一个共同的交际工具，{这/那}就是所谓“国语”(与前述的“国语运动”的“国语”不同)。中国的汉语就是这样的一种共同语。

上で述べたのは一つの社会内部(例えば一つの民族)の全ての人民が使用する共通語である。一つの多民族国家において、各民族間には往々にしてさらに一つのコミュニケーションツールが必要であり、それがいわゆる「国語」(前述の「国語運動」の「国語」とは異なる)である。中国の漢語はこのような一種の共通語である。

(3) 在爱的学说上，儒墨的上述分歧，孟子及其以后的许多人都很清楚地指出过。但是除此以外，还有一个更带根本性的分歧。{这/那}就是，儒家认为，仁是从人性内部自然地发展出来的；而墨家认为，兼爱是从外部人为地附加于人的。

愛の学説では、儒家と墨家の上述の相違は、孟子とそれ以後の多くの人がはっきりと指摘してきた。しかし、それ以外にも、もっと根本的な相違がまだ一つある。それが、儒家の考えでは、仁とは人間性の内部から自然に発展してきたものであるということである。しかし墨家は、兼愛とは外部から人為的に人に付加されたものであると考えている。

(2)(3)と(4)で使用可能な指示詞に違いが生じるのは、受信者の抱く期待や理解などを話者が想定済みであることを表現しようとするか否かが異なっているからである。例(2)(3)では、指示詞の指示対象を目的語とする動詞が追加を示す副詞“还”を伴っており、指示対象に関わる論述がすでにある程度行われていることを示している。それは(2)に“以上说的是(上で述べたのは)”、(3)に“上述(上述の)”という言葉があることからもわかる。先行する論述はこれから明かす内容の予告編のような役割を果たし、受信者は意識的かどうかに関わりなく、これから話されることについて何らかの予想を立て始める。指示詞を用いて指示対象を受け直す時点で、受信者の側に指示対象に対する様々な考えが生じていると話者が想定し、その想定を表現しようとしたとしても不自然ではない。例えば(3)では、現在論述中のテーマは多くの人が論じてきたテーマであると述べてその重要性を示した上

で、“但是除此以外，还有一个更带根本性的分歧(しかし、それ以外にも、もっと根本的な相違がまだ一つある)”と畳みかけ気を持たせることで、まだ具体的には明かされていない“分歧(相違)”が重大であることを示し、受信者の期待を高めるような文脈が創り出されている。(2)(3)の論述の展開にはこのような特徴があるため、指示対象を“那”で指示しても不自然さは感じられないのである。

この点は、実際、“这”の使用のみが可能な(4)を一部書き換え、指示対象に対する相手の考えを想定していることを示しながら話を進めているような語句を挿入すると、“那”の使用が非常に自然になり、逆に“这”の使用が不可能になることからもわかる。たとえば、(4)'や(4)"のように指示対象に対する相手の考えを想定していることを明らかに示すような語句を挿入すると、“这”よりも“那”が自然になる。(ただし、(4)'、(4)"のように書き換えると、原文の教科書の説明文のような文体は失われ、ネイティブ話者によれば、先生が教壇に立って説明している場面の発言か、あるいは子供用の絵本のような文体になる。)

(4)' 我们了解了音的对立关系和互补关系，就可以进一步讨论一种语言的语音单位了。**你一定知道**{*这/那}**是什么。**{*这/那}就是一般所说的音位。

言語音の対立関係と相補関係を理解できたなら、一歩進んで、一つの音声単位について討議することができます。それが何であるかあなたはきっと分かっていると思います。それは一般に言う音素です。

(4)" 我们了解了音的对立关系和互补关系，就可以进一步讨论一种语言的语音单位了。**你知道**{*这/那}**是什么吗？**{*这/那}就是一般所说的音位。

言語音の対立関係と相補関係を理解できたなら、一歩進んで、一つの音声単位について討議することができます。**それは何か知っていますか。**それは一般に言う音素です。

ところで、(2)(3)は、指示対象が不定の事物であり、しかもある程度受信者の疑問・理解・期待を想定し得る文脈であるが、“那”のみならず“这”を用いることができるのはなぜなのだろうか。ネイティブのインフォーマントによると、たとえ実際に「想定済み表現」が可能だとしても、話者がその想定をわざわざ表現せずに指示することは不自然ではない

からである。一方、受信者の指示対象に対する疑問・理解・期待などを想定し得ない文脈で「想定済み表現」するのは奇妙であるからだという。

したがって、モノ指示用法において、指示対象を“那”で指示する場合の共通点は、受信者が指示対象に対して抱く可能性のある様々な考えを話者が想定できる状況にあり、かつ話者がその想定を明示的に表現しようとしていることである。そのため、“那”が用いられる場合は、指示対象の内容が解き明かされることがいかに重要であるかを示す文脈構成になっていることが多い。実際、CCLM でサンプルとして抽出した“那就是…”の 100 例[22]のうち、モノ指示用法は 79 例あり、そのうち指示対象が動詞“有”の目的語である例は 33 例であった。そして 33 例のうち 22 例まで、最初に取り上げた例(1)や、下の(16)-(19)が示すように、“有”の前に、副詞“还(6 例)”“只(6 例)”“也(3 例)”“却(2 例)”“至少(1 例)”“又(1 例)”“早就(1 例)”や、助動詞“必须(2 例)”が付いていた。それ以外にも、指示対象に加えられた修飾語など、受信者に指示対象をめぐる思考を促すような表現が見られる[23]。

(1) 由于中国社会是一个正在从传统中脱胎出来的社会,传统对社会生活仍然发挥着重大影响。因此，通过对中国社会的研究来理解现代性具有得天独厚的优势。在中国，对现代性的研究还有一个实用性的目的，{那/*这}就是通过研究现代性以促进中国的现代化进程。

[22] “这就是……”と“那就是……”を CCLM で検索すると、それぞれ“这就是……”が 22800 例、“那就是……”が 9869 例であった。ただし、この数は“指示詞+就是”の後に“说”が来る表現“这/那就是说”は除いてあるが、現場指示や指示詞の指示対象が相手の発言であるもの等は除かれていない。

[23]但し、これは話者が受信者の期待を高める文脈にするときに結果として現れた特徴の一面を述べているに過ぎず、これらの副詞がついていれば必ず期待を高める文脈であるとか、このような副詞がなければ受信者の期待は高まらない、と言っているのではないことに注意されたい。話者がわざわざ期待を高めるような文脈づくりをしなくても、指示対象が誰でも興味津々になるような特殊な事項であれば、形式的には気を持たせるような語句や副詞がなくても、話者が受信者の考えを想定済みであることを表現したとしても不自然ではない。また何らかの副詞や語句があったからといって、必ずしも話者が受信者の考えを想定済みであることを表現しようとしている場面であるとは限らない。たとえば、(4)では“进一步(一歩進んで)”という副詞句が用いられているが、その語句だけをとりだせば、“还(さらに)”と大きく異ならないようにも感じられる。しかし全体の文脈を通して読めば、(4)の“进一步(一歩進んで)”は、気をもたせて受信者の期待を高めるための文脈作りとしてではなく、今まで学んできた事柄については一旦討議を終え、次の新しい段階に進んで別の事柄を考えるという区切り標識としての語句であると捉える方が自然である。

中国社会はちょうど伝統から脱皮しようとしている社会であるので、伝統は社会生活に対して依然として大きな影響を与えている。そのため、中国社会の研究を通して現代性を理解することは先天的な優位性をもつ。中国では、現代性の研究にはさらにまだ一つ実用的な目的がある。それは現代性の研究を通して中国の現代化の歩みを速めることである。

(16) 就印度这样一个没有历史观念的民族，却有一个很独特的源流，{那/*这}就是宗教观念。

たとえインドのような歴史的観念をもたない民族であっても一つの極めて独特な源流を持っている。それは宗教観念である。

(17) 在中国学术界乃至世界汉学界, 有一个争论不休的问题，{那/*这}就是, 中国家庭是不是一个法人团体(corporation)？

中国の学術界ないし世界の漢学界において一つの論争がやまない問題がある。それは、中国の家庭は一つの法人団体(corporation)であるかどうかである。

(18) 笛卡儿提出了“我思故我在”的命题。他认为一切东西都可以被怀疑，但是只有一个东西不能被怀疑，{那/*这}就是“我在思想”。

デカルトは「我思う、故に我あり」という命題を打ち出した。彼は一切のものは疑われてよいと考えた。しかし一つだけ疑われようのないものがあった、それは「私は考えている」である。

(19) 当没有安全带时，司机开车谨慎，也不敢开飞车，事故发生率就低。但这样做也有代价，{那/*这}就是耗费司机的时间与精力。

シートベルトがなかったとき、運転手は用心深く運転し、猛スピードで飛ばすこともしなかったので、事故の発生率は低かった。しかしこのようにするには代償もあった、それは運転手の時間とエネルギーの消耗である。

(1)、(16)-(19)では“有”の前に追加、類同、共存などを表す副詞や数量制限副詞を加え、また修飾語を加えることで、“有”の目的語である指示対象に様々な前提情報や含意をもたせ、情報としての際立ちを与えている。例えば(1)では単に“目的”ではなく“还有一个实用性的目的(さらにまだ一つ実用的な目的がある)”と述べることで、“目的”が学問の世界に止まらないことを際立たせ、(16)では単に“源流”ではなく“却有一个很独特的源流(一つの極めて独特な源流を持っている)”と述べて、“源流”の意外性とユニーク性を際立たせている。(17)では“有”に指示対象の情報価値を高める副詞が付いているわけではないが、指示対象“一个争论不休的(ひとつの論争がやまない)”という聞く者に気を持たせる修飾語が付加され、指示対象の具体的な内容の解明に対する受信者の期待を高める文脈が創り出されている[24]。

この点を検証するため、別のコーパス BCC(科技)において、＜“有一个”＋不定の名詞性成分＋“。/,”＋“这/那”＞の用例[25]を検索し(重複例を除き、単独用法の指示詞が直前の不定の名詞を指すものに絞る)、指示詞の違いによって、動詞“有”の前に副詞“还”や“只”が出現する割合に変化が生じるかどうか調べた。この形式において“这”が用いられている例は 89 例、“那”が用いられている例は 397 例あるが、動詞“有”の前に“还”[26]と“只”[27]が置かれている例の数は、“这”の場合、それぞれ 14 例と 12 例であるのに対し、“那”はそれぞれ 98 例と 98 例であり、割合としても、この形式で“这”が用いられている場合には、動詞“有”の前に“还”或いは “只”が置かれている例は約 29%に過

[24]実際、たとえば“那”のみの使用が可能な(1)を一部書き換え、受信者の期待を高めるような語句をなるべく取り除いて、(1)'のようにすると、“那”も“这”も同じぐらい自然に使用できると述べるネイティブ話者もいる。話者が受信者の考えを想定できる言語環境があるかどうかで選択可能な指示詞に違いが生じることを表す現象の一つである。

(1)'(“由于……优势”までの文脈を消去した上で)在中国，对现代性的研究有一个目的，{那/这}就是通过研究现代性以促进中国的现代化进程。

中国では、現代性の研究には一つ目的がある。それは現代性の研究を通して中国の現代化の歩みを速めることである。

[25]検索式は「有一个 n[。 ，][这 那]」で、検索結果 959 例のうち、重複例を消去し、単独の指示詞が直前の不定の名詞性成分を指示している例は 486 例あった。

[26] “还要有”のように“还”と“有”の間に他の語が挟まれる場合も含む。

[27] “只能有”のように“只”と“有”の間に他の語が挟まれる場合も含む。

ぎないのに対し、“那”が用いられている場合は、動詞“有”の前に“还”或いは “只”が置かれている例は約 49%を占める。このように、不定の名詞性成分を“这”で指示している例文と“那”で指示している例文とでは、“还”や“只”といった副詞が、不定の名詞性成分を目的語としてとっている動詞の前に出現する割合に差があり、“那”で名詞性成分を指している例文では、これらの副詞が動詞の前に出現している割合が“这”で指している場合に比べて高い。この事実も、“那”が用いられる場合には、指示対象について明かす内容について受信者の期待を起させるような文脈作りがなされていることが多く、“这”が用いられる場合には、受信者の指示対象に対する期待を高めるような文脈作りはされにくいことを示している。

以上、モノ指示用法において、不定の指示対象を“那”で指示する場合の例を幾つか見てきたが、“这”を“那”に置き換えられない例(4)を改めて観察すると、“那”を用いた用例とは異なり、話者は改めて議論する余地のない、すでに十分明確なテーマについて、受信者の理解の程度・期待・疑問などをおもんばかっていることを表現することなく、自分のペースで議論を展開している。

したがって、モノ指示用法において不定の指示対象を指示する場合も、“这”を用いる場合と“那”を用いる場合とがあり、コト指示用法と同じく、話者が、受信者の抱く考えを想定済みであることを表現しながら指示しようとしているかどうかによって指示詞が選択されていることがわかる。

４．５　まとめ

以上、コト指示用法であるかモノ指示用法であるかを問わず、受信者が指示対象に対して抱く疑問・理解・期待などを話者が想定済みであることを明示的に表現しようとしているか否か、それが“这”と“那”の選択基準となっていることを見てきた。ここまでの考察結果をまとめると次のようなことが言える。

① 受信者が指示対象に対して何らかの疑問・理解・期待を抱いていることを、話者が自然には想定できない場面では、“这”を用い、“那”に置き換えることはできない。
② 受信者が指示対象に対して何らかの疑問・理解・期待を抱いていると話者が想定しても不自然ではない文脈では、“这”と“那”の両方を用いることができる。話者は、

どちらを用いるかによって、受信者が抱く考えを想定した上で指示しているのかどうかを表現し分けることができる。特に受信者の考えを想定済みであることを表現しなければならない文脈では、“那”が用いられ、“这”に置き換えることはできない。

この選択基準は、疑問詞の答えに“那”が用いられやすい現象とも一致する。なぜなら、疑問詞疑問文を受信者に投げかけることは、相手に答えを考えさせる行為だからである。たとえば下の例(20)において、指示対象である疑問詞疑問文を平叙文に変えると、指示詞の選択に違いが生じる。指示対象が疑問詞疑問文である(20)では“那”がより自然であるのに対し、指示対象が平叙文である(20)'では指示詞は“这”、“那”が共に使用可能で、当該事実を不可解な謎として提起して受信者に考えさせようとする意図を表現する場合には“那”が、特にそのような意図を表現しない場合には“这”が用いられる。

(20) 人为什么习惯于采用十进制？ {那/?这}是因为原始人从我们的手指、脚趾等数目中看待了〞十〞这个数字，从而发明了十进制数学。

人はなぜ十進法を採用することに慣れているのだろうか。 それは原始人が我々の手の指、足の指などの数から「十」というこの数字を取り扱い、それによって十進法数学を発明したからである。

(20)' 人习惯于采用十进制。 {那/这}是因为原始人从我们的手指、脚趾等数目中看待了〞十〞这个数字，从而发明了十进制数学。

人は十進法を採用することに慣れている。 それは原始人が我々の手の指、足の指などの数から「十」というこの数字を取り扱い、それによって十進法数学を発明したからである。

(20)で“那”がより自然であるのは、ただ単に前方で平叙文で述べられた事柄を指示して説明する場合よりも、受信者に問いを投げかけ考えさせてから、それを指示して説明する場合の方が、受信者が指示対象について何らかの予想をしながらその説明を心待ちにしていることを話者の側で想定済みであることを表現するのが自然な場面が多くなるからで

ある。

４．６　考察

４．６．１　先行研究で示された指示詞使用の分布傾向との関係

本研究の主張する選択基準は、杨玉玲 2006 が指摘した、一般にコト指示には主に“这”を用い、“那”の使用には条件があること、また特に指示対象が比較的長く、多くの情報を含んでいる場合には“这”の使用がほぼ強制的であるという指摘、またモノ指示用法の場合、“这”の指示対象は主に定成分で、“那”の指示対象は主に不定成分である、という確率的傾向(杨玉玲 2006 ： 35-38)と矛盾するものではない。なぜなら、話者の側で、指示対象が受信者にとっていまだ十分解き明かされていない正体不明の謎であるとみなし、受信者が抱く可能性のある事柄を想定していることを表現する場合というのは、現実には前方でほとんど解説されていないことが数量的確率論として多いはずである。したがって、受信者にとって正体不明で、話者による真相の解明を心待ちにする指示対象というのは、幾つのも文のあわさった長い陳述よりも短い陳述の方が多いであろうし、陳述よりも名詞性成分であることが多いであろう。同様に、指示対象が名詞性成分である場合にも、“这”の指示対象は定成分で、“那”の指示対象は不定成分であることが多いであろう。ただし、指示対象が「コト」か「モノ」か、また名詞性成分が「定」か「不定」か、というのは根本的な選択基準ではなく、結果として生じる実際の数量的傾向にすぎない。実際には話者が受信者の考えを想定済みであることを表現しようとしているかが指示詞の選択基準であるため、比較的長い陳述であっても、“那”で指示されることもあれば、不定の名詞性成分が“这”で指示されることもある。それは、上で述べたとおり、比較的長い陳述も、話者の側で受信者にとって真相がいまだに十分解き明かされていない謎であるとみなし、受信者の考えを想定済みであることを表現して指示しようとすれば“那”が選ばれ、また不定の名詞性成分であっても、話者が特にそういった想定の表現を意図していなければ“这”が選ばれるからである。

４．６．２　本研究の主張する選択基準が先行研究よりも優れている点

非母語話者の中国語学習者が杨玉玲 2006 の述べた指示詞の分業傾向に基づいて指示詞を選択しようとすれば、まず指示対象を陳述か名詞性成分かに分け、かつ名詞性成分であれば定/不定に分けるという工程を経なければならない。しかし、形態変化の乏しい中国語において、指示対象を陳述か名詞性成分かに分け、かつ、更に名詞性成分を定/不定に分けることを求められるのは非母語話者の中国語学習者にとって一つ一つの指示詞を選択するのにあまりにも道のりが長いと言えよう。また、そのような工程を経て指示対象を正しく分類できたとしても、上で見たように、指示対象が事実を述べた陳述であるのに“那”がふさわしい場合もあり、必ずしも本当に適切な指示詞を選択できるわけではない。それに対して、本論文が提案する選択基準は、指示対象が陳述か名詞性成分かによらず、一律に指示対象に関する受信者の考えを想定していることを示すかどうかによって選択できるため、学習者の負担は大きく軽減されると言える。

更に、杨玉玲 2006 の指摘に基づくと、話者は名詞性成分を単独の指示詞で指す場合に、全ての指示対象を、受信者がそれらの名詞が指す対象をはっきりと間違いなく判断できるか、それとも他の同類の事物と分けることができないかのどちらかに分けて指示詞を選択していることになるが、そもそも受信者が指示対象の指す対象をはっきりと判断できるかどうか考えていない場合や、予測しようとしても不明な場合に、どのように指示詞を選択するのかが示されていない。本論文が提案する選択基準は、受信者がそれらの名詞が指す対象を判断できると予測するか、それとも他の同類の事物と分けることができないと予測するかに関わらず、いずれの場合であっても、受信者の指示対象に対する考えを想定していることを示すかどうかによって決まるので、この点でも杨玉玲 2006 より大きな範囲の指示詞選択を扱うことができる。

４．６．３　相手の発言内容を指示する場合の選択基準との関係

第 3 章では、相手の発言内容を指示するときの指示詞の選択条件が「相対的重視度」によるものであり、話者が相手の発言内容を自分と同じかそれ以上に重視していることを示す場合、及び自分の相対的重視度の低さをわざわざ示す必要の無い場合には“这”を用い、指示対象を重視しているその程度が、相対的に言って相手よりも自分の方が低いということをはっきりと示す場合には“那”を用いて指すことを指摘した。本章の結論である選択基準を考えると、自分の発言内容を指示する場合に“那”を使うと、「私というよりも、

受信者が知りたがっている/気になっている指示対象についてですが」という意味が表現されることになり、指示対象に対する受信者の相対的重視度が自分よりも高いことを表現していることに他ならない。したがってこれまで分けて考えてきた、相手の発言内容を指示する場合の「相対的重視度」と、自分の発言内容を指示する場合の「想定済みを表現する意図の有無」という二つの選択基準は根本的に一致していると言える。

４．６．４　現場指示における指示詞選択との関係

2.2 で紹介したように、木村 2012 は現場指示における、対話の場合と聞き手をめあてとしない独言・内言の場合の指示詞選択を扱っている。木村は現場指示における指示詞選択が、文脈指示においてあてはまるのかどうかについては述べていなかった。ここでは、現場指示における指示詞選択と、自分の発言を単独の指示詞で指示する場合の指示詞選択との関係について考察する。

本章では、受信者の指示対象に対する考えを想定していることを示すかどうかによって指示詞が選択されていることについて述べた。話者の方で、受信者が指示対象に抱く考えを想定していることを示さないとき、指示詞は“这”が用いられる。この基準と、対話の場合の現場指示における指示詞選択の関係について考える。

自分の発言は本来自分に属すると言えるので、この点は、中国語の対話の場合の現場指示の指示詞選択の、「話し手を基準に『遠』か『近』かの二項対立のいずれか一方に振り分けられ(木村 2012：64-65)」、「話し手にとって『近い』と認識された現場の事物は{这}で指される(木村 2012：60)」という点と一致する。したがって、受信者をめあてとする発言において、受信者が指示対象に抱く考えを想定していることを示さないとき、指示詞は“这”が用いられるという基準は、同じく対話の場合の現場指示における指示詞選択と一致している。

同様に、話者の方で、受信者が指示対象に抱く考えを想定していることを示さないとき、指示詞は“这”が用いられるという基準と、独言や内言の場合の現場指示における指示詞選択との関係について考える。そもそも受信者をめあてとしない発言において、自分の発言を指示するさい、話者は受信者が指示対象に抱く考えを想定するはずも、そのような想定を示そうとするはずもないことは言うまでもない。中国語の独言や内言の場合の現場指示詞の指示詞選択は、木村 2012 によれば、「聞き手めあての対話とは異なり、独言や内

言は、……話し手は自分が知覚し、注目した対象について、一人叙述を展開するのみである。こうした場合、中国語では、……対象は……総じて『近い』ものと認識される、言い換えれば、ワレの領域内のものと認識される傾向が強くなると考えられる。独言や内言において{这}が{那}に優先する理由は、恐らくそうしたものだろうと考えられる(木村 2012：76-77)」。したがって、この基準は、受信者をめあてとしない発言であったとしても、同じく独言や内言の場合の現場指示における指示詞選択と一致している。

次に、話者が受信者に抱く考えを想定していることを示しながら指示する場合には“那”が用いられる点について考えてみる。話者が受信者に抱く考えを想定していることを示しながら指示する場合というのは、当然のことながら、受信者をめあてとする発言であることは間違いない。したがって、この基準と、対話の場合の現場指示における指示詞選択との関係を考察する。木村 2012 によれば、対話の場合の現場指示では、「ナレの領域に対立してナレの領域というものをマークする指示形式を特にもち合わせていない中国語では、対象が自分にとって遠い存在だと積極的に認識されない限り……{这}で指されてよい…。逆に、自分にとって遠いと感じられる対象は、……聞き手に近いものであっても遠称の{那}が用いられる(木村 2012：64)」。木村 2012 は、至近距離にいる聞き手の持ち物を指していて、「指示対象と話し手との間の物理的な距離だけを考慮するならば、むしろ{这}が用いられて然るべき状況」で{那}が用いられている例を挙げ、この場合には「聞き手と指示対象との関係」が深く関わっていることを認め、そこでは「話し手にとって対象の正体が明らかでないうえに、それが相手の領域に属するものであるという認識が重なり、そこに心理的な疎遠感が生じて、遠称による指示が促される(木村 2012：66)」と考え、この場合「対立的視点」がとられて、近距離の聞き手に属する対象が{那}で指し示されると述べている。このように現場指示においては近距離の聞き手に属する対象を“那”で指すことが述べられているが、近距離の話者に属する対象を“那”で指すという例は挙げられていない。したがって、話者自身が精通しており、自分に属する対象を“那”で指し示す現象は、現場指示では見られない、文脈指示用法独特の指示詞選択と言うことができる。しかし、表面的には独特に見えるこの指示詞選択も、実際には現場指示における指示詞選択から生み出される語用論的効果を狙ったものであると言える。自分の発言は、本来自分に属する対象であるはずである。中国語の現場指示における枠組みに沿って考えれば、話者はその指示対象の内実を詳しく知っているにも関わらず、その自分が持ち出した対象を、敢えて“那”で指し示すとき、話者はその対象を自分から遠い対象であると認識していることを

表現しているか、或いは対立的視点に立って、その対象を、半ば強引に、まるで相手に属する対象であるかのように表現しているかのどちらかである。筆者は、本論文の主張する、指示対象に対する受信者の考えを想定していることを示す場合には“那”を用いる現象は、後者に相当するものであると考える。自分の発言、すなわち本来自分に属するはずの指示対象を“那”で指すことによって、話者は有標的に対立的視点をとり、自分の述べたその指示対象を、まるで相手から提起された、相手に属する対象であるかのように表現する。そうすることによって、話者の側が一方的に発言しているのではなく、受信者からの発言を受けてそれに答えているかのように感じさせる語用論効果を生み出し、たとえ対話の形式ではない発言であっても、積極的に受信者を話に加わらせ、共に論じているかのような感覚を受信者に与えることができるのである。

以上、中国語の現場指示における指示詞選択と、文脈指示における指示詞選択との一致する点、また異なる点を見た。先行研究では、現場指示、文脈指示それぞれにおいての選択基準が指摘されてきたが、現場指示における選択基準がどの程度文脈指示にあてはまるのかについてはほとんど議論されることがなかったが、本論文ではその関係性について一致する部分と独特の部分、またその独特に思える部分がどう関わりあっているのかを示した。現場指示における指示詞選択と、文脈指示における指示詞選択は、相手の発言を指示する場合、また自分の発言を指示する場合のうち、指示対象に対する相手の考えを想定していることを積極的に表現しない場合には、見事に一致すると言ってよい。指示対象に対する相手の考えを想定していることを表現しながら、自分の発言を指示する場合、表面的には、現場指示とは異なる独特な指示詞選択が行われるものの、そのような選択がなされるのは、現場指示に基づいた指示詞選択から生まれる語用論的効果を利用するためである。つまり実際には自分に属する対象であっても、自分からは遠く、或いは相手に属する対象であるかのように指すことで、受信者を積極的に話に巻き込み、関わらせるという効果を狙っているのである。

４．７　結論

以上、本章では、現代中国語の自分の発言を指示する場合の文脈指示詞の使い分けを考察した。先行研究では、指示詞の使い分けについて、モノ指示用法かコト指示用法か、またモノ指示用法においては指示対象が定成分か不定成分かといった、主に表面的な意味や

形式からの確率論的指摘がなされてきた(杨玉玲 2006 ： 35-38)。しかし、指示対象のそれらの表面的な特徴のみからは、必ずしも適切な指示詞を選択することはできない。実際には、話者が、受信者が指示対象に対して抱いている考えを想定済みであることを表現しようとしているのか、それとも特にそういった想定を表現する意図はないのかによって指示詞は選択されているのである。この選択基準は、特に非母語話者の中国語学習者が適切な指示詞を選択する上で大いに助けになるであろう。

５．　指示詞が人称代名詞と共起するとき

５．１　考察対象

指示詞と人称代名詞が共起する場合には、指示詞と人称代名詞の順序によって幾つかの種類に分けられる。本章では、その中の“我们这些人”“你们那些人”“他这个人”といった、＜人称代名詞＋指示詞＋量詞＋名詞＞の形式(以後、「代＋指＋N」と称する)を扱う。「代＋指＋N」において、代名詞と後の名詞成分が同格関係にあるものについては、代名詞が複数である場合や、三人称の場合にどのように指示詞が選択されているかについて本格的に検討した研究は管見の限りこれまでなかった。更に、たとえば、“他这个人”に対応して訳されることの多い「彼という人」の「という」という日本語は、史隽 2012 によれば、中国語の指示詞とニュアンスも機能も根本的に異なっている(史隽 2012：61)ため、日本語から適切な指示詞を類推することも困難である。本章では、これまで先行研究でほとんど扱われてこなかったこれらの点を詳細に検討し、「代＋指＋N」の形式において、中国語話者がどのように指示詞を選択しているのかを分析し、明らかにする。

５．２　先行研究

５．２．１　「N1＋指示詞＋N2」構造の特徴

史隽 2012 は、“张华这个人非常小气(張華という人はとてもケチだ。)”のような、「前方名詞＋指示詞＋後方名詞」(以下、「N1＋指示詞＋N2」)の構造は、「N1」のみの“张华非常小气(張華はとてもケチだ。)”や「指示詞＋N2」のみの“这个人非常小气(この人はとてもケチだ。)”に比べ、話し手によって N1 への主観的評価のニュアンスが感じられる(史隽 2012：48)と述べている。ただし、史隽 2012 は指示詞の使い分けについては述べていない。

５．２．２　人称代名詞の種類と指示詞選択

徐丹 1988 は、人称代名詞の後に指示詞が来る場合の人称代名詞と指示詞との関係につ

いて次のように述べている。

汉语里的近指及远指指示代词都可以出现在三个人称的后面。三个人称与这/那并列时可具有两种关系：同位关系，所属关系。(徐丹 1988：129)

中国語の近称及び遠称の指示代詞は共に三つの人称の後に現れることができる。三つの人称と“这/那”が並列されるとき、二種類の関係があり、同格関係[28]と所属関係である。

５．２．３　人称代名詞と名詞句が同格関係にある場合

徐丹 1988 は、「代＋指＋N」の人称代名詞と後の成分が同格関係である場合の指示詞選択について次のように述べ、表二を示して、人称代名詞が第三人称のときのみ、指示詞は“这/那”の両方が用いられ得ることを指摘している。

当三个人称在这/那前面出现并与其后的成分形成同位关系时，“我”“你”与“那”呈排斥关系。……只有第三人称与这/那都相容。第三人称在语言交流中是局外人，即没有直接参加交流；是说话人(第一人称)为第三人称任意选用的这/那(此处的“任意”是指句法上无限制，不指空间的远近)。(徐丹 1988：129)

三つの人称が“这/那”の前に現れて、その後の成分と同格関係を形成するとき、“我”と“你”は“那”と排斥関係を呈する。第三人称だけが、“这/那”の両方を受け入れる。第三人称は言語交流において部外者であり、直接交流に参加していない。話者(第一人称)が第三人称のために任意に“这/那”を選択して使用する(ここの「任意」とは文法上無制限であることを指し、空間上の遠近を指しているのではない)。

---

[28] 史雋 2012 は、同格関係の場合、仮に二つのうちどちらか一方の語句を除いても、文の構造は影響を受けず、そのまま文として成立し、文の意味も基本的にはかわらない、と指摘し、次のような例を挙げている。

[张华][这个人]非常小气。→[张华]非常小气。／[这个人]非常小气。

我恨死［张华］[那个人］了。→我恨死［张华］了。 / 我恨死［那个人］了。

上の“这个人”“那个人”の指示対象が話し手と聞き手と共有知識の場合、N1 と「指示詞＋N2」のいずれかが抜けても文が成り立つ(史雋 2012：47-48)。

表二　代＋这/那＋量＋名(代词与后面的成分形成同位关系)

例句 人称	这个人	那个人
我	我这个人	*我那个人
你	你这个人	*你那个人
他	他这个人	他那个人

(徐丹 1988：129)

杨玉玲 2010 は、徐丹 1988 のこの研究を引用し、その通りだと述べて、一人称と二人称の数例を挙げ、その例では“这”に置き換えられないと述べるにとどまっている。(杨玉玲 2010：144-145)

しかし、筆者が CCLM で調査したところ、代名詞が第一人称と第二人称であっても、複数の代名詞の場合には、“那”が用いられる例が実際に存在し、またそれらの例はネイティブ話者の中にも“那”の使用が不自然だとする者はいなかった。先行研究では、代名詞が複数の第一人称、第二人称の場合には、“我们那些人”“你们那些人”という表現がなぜ可能であるのかに着目して、それを説明しているものは管見の限り無い。そして、そのような例を詳しく分析していくうちに、“我们那些人”や“你们那些人”という表現は決して例外的な表現などではなく、“我们这/那些人”や“你们这/那些人”における指示詞の選択には、母語話者の中でしっかりと系統だった基準があり、それによって使い分けられていることがわかった。その点は５．３．１で詳述する。

「代＋指＋N」で代名詞が三人称の場合についての指示詞の選択について言及したものは、管見の限り杨玉玲 2010 の次のような簡単で非断定的な記述のみである。

> 给我们的感觉好象是用“那＋X”复指时对其前的“他或他们”一般持否定的态度，表现出心理距离远;而用“这＋X”时对其前的“他或他们”可以是肯定的，可以是中立的，甚至也可以是否定的态度。(杨玉玲 2010：145)

> 我々の感覚では、どうやら、“那+X”で再度指示するときは一般にその前の“他/他们”に否定的態度をとっており、心理的距離の遠さを表現しているのに対し、“这+X”の

ときはその前の“他/他们”に肯定的であっても、中立的であっても、さらには否定的態度であっても良いようである。

しかし、この記述はこの形式における指示詞選択に関わる様々な要素のうち、あまりにも部分的な側面しか捉えておらず、杨玉玲 2010 の記述からのみでは、中国語学習者がそれぞれの場面における適切な指示詞を判断することはできない。杨玉玲 2010 の記述によれば、この形式では、“这”を使っておけば無難なのかという判断にもなりかねないが、実際には、５．３．２で詳しく述べるように、どのネイティブ話者に尋ねても、“那”でなければ不自然な例もある。また、杨玉玲 2010 の記述を読むと、中国語学習者は、たとえば“他那个人”ときくと、話者は一般に“他”否定的態度を持っているのだと理解してしまうことになるが、否定的態度を持っていなくても、例えば下のように、“他那个人”と言える事例は数多くある。したがって、杨玉玲 2010 の指摘のみを中国語学習者に教えるのは危険である。

(1)我没见过他，可听说<u>他那个人</u>很帅。
私は彼に会ったことは無いが、<u>彼という人</u>はとてもかっこいいらしい。

本研究では、先行研究で詳しく検討されてこなかった、三人称代名詞の場合の指示詞の使い分けという問題に全面的に取り組み、現場的指示、観念的指示、文脈的指示の全ての側面を考慮した上で、「代＋指＋N」の形式において、ネイティブ話者が何を考慮して、指示詞を選択しているのか、また指示詞を選択するさいに、拮抗する基準があるとすればそれは何であるのか、もしネイティブによって意見が分かれるところがあるのであればそれはなぜなのかを示そうとするものである。

５．２．４　人称代名詞と名詞句が所属関係にある場合

人称代名詞とその後の名詞句が所属関係にある場合[29]というのは、基本的には文脈指示

[29]史隽 2012 は、“他那书很一般。”の“他那书”が“他的书”という場合とどのように異なるのかについて述べており、“他的书”に比べて、“他那书”は“他”と“书”の間の親密感が強いこと、また“书”に対して話し手の視点から deictic に捉え、文に主観的な位置づ

用法ではないが、本論文で扱う、同格関係の例を考慮するにあたって、参考になる点があるので、先行研究を紹介し、また筆者が先行研究の指摘以外に観察した現象を簡単に取り上げる。

指示詞選択についての先行研究としては、徐丹 1988、牧野美奈子 1993 がある。これらの先行研究は、人称代名詞と所属関係にある名詞句がその所有者と分離可能なもの(“朋友(友達)”など)と分離不可能なもの(“脸(顔)”など)に分け、前者は第一人称、第二人称、第三人称とも“这/那”のいずれとも共起できるが、後者は第一人称と“那”はいつでも共起できるわけではないことを指摘しており(徐丹 1988：129、牧野 1993：102)、牧野 1993 はその理由について次のように述べている。

> NP が人称代名詞から不可分である場合、「テクスト内的指示」の場合には、人称にかかわらず、指示対象が発話の場にある・ないのどちらのケースもあり得るので、「テクスト内的指示」の原則[30]により、発話の場にあるときには「这」が、ないときには「那」が選択される。また「テクスト外的指示」の場合、発話の場における距離が近い場合も、遠い場合もあり得るので、「テクスト外的指示」の原則[31]により、近いと認識されるときには「这」が、遠いときには「那」が選択される。よって、NP が可分であるときは、人称に関係なく「这/那」の両方が使える場面が容易に想定できるのである。一方、NP が身体の一部分のように不可分な場合、第 1 人称すなわち話し手自身に属するものは常に話の場にあり、しかも話し手から近いはずで、話の場になかったり、あるいは遠くにあるという状況は考えにくいので、原則により、「那」は使われにくいのである。(牧野 1993：102-103)

徐丹 1988 は、第一人称の後に分離不可能な“脸(顔)”が来た場合の次のような例を挙げている。

けを加えたニュアンスが読み取れる、つまり“书”の内容などの何らかの具体像が話し手の頭の中に浮かんでいて、あたかも指で指しているかのようであると指摘している(史雋 2012：52-53)。史雋 2012 は指示詞の使い分けについては述べていない。

30 牧野 1993 は「テクスト内的指示」の原則を次のように記している。
指示対象が発話の場にある→「这」
指示対象が発話の場にない→「那」(牧野 1993：101)

31 牧野 1993 は「テクスト外的指示」の原則を次のように記している。
発話の場における距離が近い→「这」
発話の場における距離が遠い→「那」(牧野 1993：101)

⑵你说，当时**我那脸**往哪儿搁！

因为例⑵中，“当时”指过去的概念，“那”与“过去”的概念可以形成呼应。但在实际对话中，“这”比“那”用得多：

⑶你说，当时**我这脸**往哪儿搁！(徐丹 1988：129)

⑵あのときは面目なかったぜ！

例⑵では、「当時」は過去の概念を指しており、“那”と「過去」の概念は呼応している。しかし実際の会話では、“这”が“那”よりも多く用いられる。

⑶あのときは面目なかったぜ！

牧野 1993 は、上の徐丹 1988 の例を引用し、この場合に“这/那”のいずれも使用できる理由について次のように述べている。

「当時の私の顔」は、いまこの場にないと考えれば、「テクスト内的指示」の原則によって当然「那」が使われるべきである。逆に「私の顔」自体はいまここにあると考えれば、「テクスト内的指示」の「その場にある」場合として、「这」も使用可能となるのである。(牧野 1993：103)

このように、先行研究は、指示詞選択に関わる基準として、分離可能か分離不可能かという点を指摘している。更に、第一人称の後に分離不可能なものが来た場合であっても、過去の概念を述べている場面においては、当時のものは、いまこの場にないと捉えれば“那”が、それ自体はいまここにあると捉えれば“这”も使用可能であることを指摘している。

筆者は、先行研究の指摘に加えて、指示対象が話者から分離不可能なものであって当然発話現場にあるにも関わらず“那”が使用される、更に別の特殊な事例を見つけた。それは、指示対象が話者自身の意思でコントロールできないという状況である。以下にその例を挙げる。

⑷ 忽然，我感觉到我左手的指甲插进我的左脸颊。我觉得有点疼痛，但却没法子让**我那只手**停下来。(BCC)

突然、私は自分の左手の爪が自分の左頬を突き刺していることに気づいた。私は少し痛みを感じたが、**自分のその手**をとめることができなかった。

(5) 我呆呆瞅着**我那只手**。它就像机器人似的，一字一字记录着丹尼斯在电话上讲的话。(BCC)

私はぼんやりと**自分のその手**を見つめていた。それはロボットのように、一字一字デニスが電話で言ったことを記録していた。

(6)我拿起笔来准备签下我的名字，却发现**我那只手**一直簌簌抖个不停。(BCC)

私はペンを持ち上げてサインしようとしたが、**自分のその手**がずっとざわざわと震えて止まらないこことに気づいた。

(4)(5)(6)は、《24 重人格》という小説の中にある例である。例文に出てくる“我”は解離性同一症(多重人格障害)を患っており、(4)では文脈の少し前の方で、“我忽然发觉，我已不能够控制住自己的身体（私は突然、自分の体をコントロールできなくなっていることに気づいた)。”と書かれている。(4)(5)(6)の文脈はいずれも、一人称代名詞の後に来ているのは、話者自身の手であり、物理的には話者と分離されていないが、話者自身の意思でコントロールできないという特殊な状況であり、“那”が用いられている。これらの例ではネイティブのインフォーマントも皆“那”の方がより自然であるとしている。

以上、人称代名詞とその後の名詞句が所属関係にある場合の指示詞選択に関する先行研究の指摘と、それに加え、話者から分離していない身体部位であっても、話者がそれを制御できないという特殊な状況のもとでは、この構造において“那”が用いられる場合があるということを示した。

５．３　人称代名詞と名詞句が同格関係にある場合の指示詞の選択基準

ここでは、人称代名詞と、後の名詞性成分が同格関係にある場合について分析する。

以降、「代＋指＋N」で指そうとする人物および集団を[対象人物]と呼ぶことにする。

５．３．１　一人称代名詞と二人称代名詞

筆者が CCLM で“我那个人”“你那个人”の用例を検索してみたところ、“我那个人”は 0 例で、“你那个人”は 2 例のみで全て所属関係であった。したがって、一人称、および二人称の代名詞が単数である場合、徐丹 1988 の述べるとおり、この構造において“那”の使用は排除されるといってよいだろう。一方、“我们那些人”“你们那些人”の用例を検索してみたところ[32]、“我们那些人”は 2 例あり、1 例は所属関係であるので、同格関係であるのは 1 例、“你们那些人”は 3 例であった。それらの例は、ネイティブ話者にとっても、特に不自然に感じられない。したがって、一人称、二人称の代名詞が複数の場合には、この構造において“那”の組み合わせの用例がわずかながら存在する。単数の場合には、一人称、二人称の代名詞と“那”の組み合わせが成立しないにも関わらず、複数の場合には“那”との組み合わせが成立することがあるのか、またその場合指示詞はどのように選択されているのかに関して指摘したものは管見の限りない。これからその点を詳細に検討し、答えを出す。

５．３．１．１　複数の一人称代名詞

単数の一人称代名詞の場合、[対象人物]が発話現場にいないという状況が発生し得ないのに対し、複数の場合には[対象人物]のメンバーのうち、発話現場にいない人物が存在しうるという点に違いがあり、それが選択可能な指示詞に違いを生じさせている。“*我那个人”が成立しないのに、複数の“我们那些人”という表現が現実にあり得るのはそのためである。(以降、何らかの人物(集団)が発話現場にいると述べる場合、話者はその人物(集団)を知覚できることとし、何らかの人物(集団)が発話現場にいないと述べる場合、話者はその人物(集団)を知覚できないこととする。)

32　検索結果のうち、“告诉他那个人是……(彼に、あの人は……であると話した)”や“我问他那个人有没有消息(私は彼に、あの人の情報はないかどうか尋ねた)”のような、二重目的語文の二つの目的語の並びががたまたま＜代名詞＞＜指示詞＋量詞＋名詞＞になっているだけの例や、“个人”が＜量詞＋“人”＞ではなく、「個人の～」という意味で用いられている例や、“人”がある名詞の一部である例は除いている。

(7) 过了一年，他就有点门了。以后我们就基本独立搞了。那时候常在野外跑，跑一圈要回乌鲁木齐，天很晚了，**我们那些人**呢都想早点住下了。专家他不行，半夜三更也得一直赶到乌鲁木齐，他老婆在乌鲁木齐啊。**我们这些人**都没家属，在哪儿住都一样，我们到那还没地方住，住食堂。(CCLM)

一年経って、彼はコツを掴んだ。それからは私たちは基本的に自分たちでやれるようになった。その頃はよく野外に出かけていて、ひととおり回ってウルムチへ帰ろうとしていたんだけど、日も遅くなったから、**私たち**ってさぁ、みんな早く泊まりたいと思っていた。専門家の彼は駄目で、夜中であってもまっすぐにウルムチに駆けつけなければならなかった、彼の奥さんがウルムチにいたからね。**私たちの方**には誰も家族がいなかったから、どこで泊まろうと一緒なんだけど、私たちはそこに着いてもまだ泊まるところがなくて、食堂に泊まった。

上の例の“我们那些人”という表現は、とりわけ不自然に感じられることはないようである。ここで“这”ではなく“那”が用いられている理由としてネイティブ話者が挙げてくれた点は、過去の出来事を回想しており、“我们”が指すメンバーのうち発話現場にいるのがおそらく話者一人だけで、他のメンバーがいないという点である。

[対象人物]のメンバーが複数である場合、そのメンバーのうち一人でも発話現場にいれば“这”を用いることが可能になるため、上のように代名詞が一人称であれば[対象人物]のメンバーが自動的に最低一人以上は発話現場にいることになり、上の状況では“这”と“那”の両方が共に使用可能である。もし、[対象人物]のメンバーが全員発話現場にいたとしたら、過去の出来事を回想して話していても“这”が選ばれることになる。すなわち、発話現場に[対象人物]のメンバーが全員いる場合には、観念的指示が不可能になる。

また、上の例では、最初に“我们那些人”が用いられているが、そのすぐ後では同じ指示対象に対して“我们这些人”が用いられている。上の例について、複数のネイティブのインフォーマントによれば、最初の箇所で仮に“我们这些人”が使われると、誰のことを指しているのか分からず唐突な感じがするという。二番目の箇所では、誰のことを指しているのか特定されているので、“我们这些人”がしっくりくる。したがって、短い間に用いられる指示詞が変化している理由は、最初の箇所では受信者からするとまだ具体的に誰が

メンバーとして含まれるのかはっきりと分からない不特定の集団を導入するために“那”が用いられているが、後の箇所では指示対象が導入済みで話題としての地位を確立しているために“这”が用いられていると見ることができる。これは文脈指示的選択基準が働いていることになる。二番目の箇所でも“我们那些人”を用いると、受信者は当時の“我们”の状況と今の状況に変化が生じているように感じられ、上の例であれば、“我们”のうち誰かが結婚したと捉えるという。したがって、話題としての地位を確立した後は必ず“这”が用いられなければならないというわけではなく、たとえば、過去の状態を回想し、現在の状況と異なることを示そうとする場合には“那”が使用される。これもまた、文脈指示的選択基準が働いている。

“我们这/那些人”はそもそも“这/那些人”はなくても文法上成立する。しかし上の例では“我们”だけでは、その中に“专家”が含まれるのか受信者にとって瞬時には判断し難く曖昧である。“这/那些人”を入れることで“专家”と対比していることを明確にすることができるので、“这/那些人”はあった方が良いという。したがって、“我们”を単独で用いるのではなく、“这/那些人”と共起するとき、特に“我们”という集団を際立たせて強調する効果があると考えられる。たとえば、下の例を見てもらいたい。

(8)<u>我们｛这/那｝些人</u>那时候，怎么那么傻？（作例）
<u>私たちったら</u>、あの頃、なんであんなに馬鹿だったんだろう？

上の例では、“这些人”“那些人”がなくても下のように文として成立する。

(8a)<u>我们</u>那时候，怎么那么傻？（作例）
<u>私たち</u>はあの頃、なんであんなに馬鹿だったんだろう？

しかし、(8a)のように“这/那些人”を入れない場合には、「馬鹿だった」という点に重きを置いていると感じられるのに対し、(8)のように“这些人”“那些人”を入れる場合には、人を強調していると感じられるという。したがって、“我们”と“我们这些人/那些人”という表現の違いは、その人物(集団)に重きをおいて示そうとしているかどうかであるといえる。

さきほど、[対象人物]のメンバーのうち、発話現場に何人いるかによって使用可能な指

示詞に違いが出る点について述べたが、その点をもう少し詳しく見ていきたい。

(8b)[話者は、今は自分たちが昔のように馬鹿ではないと考えている]
我们｛这/那｝些人那时候，怎么那么傻？（作例）
私たちったら、あの頃、なんであんなに馬鹿だったんだろう？

(8b)では、自分たちは、今は昔と違って馬鹿ではないと認識している話者が、過去のある時点で「馬鹿だった」自分たちのことを話している。指示詞は“这/那”のどちらであっても文として成立する。しかし、その[対象人物]のメンバーが全員発話現場にいれば、今はもう当時のように馬鹿ではないという自負があり、当時の回想をしている場合でも、“那”は使われない。メンバーが均質的であると設定すると、何人が発話現場にいれば、“这”が、あるいは“那”が用いられるのかについては、それぞれのネイティブインフォーマントが「おそらく人によって感覚は異なる」と前置きしつつ述べてくれる割合は、おおむね一致している。まず、一人称代名詞であれば、[対象人物]のメンバーの少なくとも 1 人が必ず発話現場にいるために、“这”は常に使用可能である。[対象人物]のメンバーが 3 人だとして、そのうち、2 人が発話現場にいると、“那”の使用は困難になる。[対象人物]のメンバーが 10 人だとして、発話現場にいるのが 3 人から 5 人の場合には“这/那”の両方が使用可能で、今発話現場にいる人の共感を重視する場合には“这”が、当時の情景の回想を重視したり、その場にいない人が[対象人物]には含まれることを表現しようとしたりするなら“那”が選択される。発話現場にいるメンバーが 10 人中 6 人以上になると、“这”が選択されやすい。さらに、[対象人物]のメンバーの全体数に対する現場にいるメンバーの数の割合というよりも、絶対的人数の方が重要視されるようである。というのは、[対象人物]のメンバーの全体数を 10 人ではなく 100 人として設定しても、そのメンバーのうち発話現場に 10 人或いは 20 人いれば(割合でいうと 1 割か 2 割にすぎないが)、10 人中 5 人いる場合の感覚とさして変わらないということであるからである。また、[対象人物]のメンバーが均質的であれば、その場にいない人のことよりも、その場にいる人の方が重視されやすいようである。つまり、100 人中、発話現場にいない 90 人のことよりも、発話現場にいる 10 人の方が重視されやすい。上で、「メンバーが均質的であれば」、と述べたのは、発話現場にいる人、またはいない人が、発話者にとってメンバーの中でどのような地位を占めるのかも指示詞の選択に関わるためである。たとえば、(8b)と同じ例文であるが、[対

象人物]の一部の人が愚かな判断をしたために、集団のメンバー全員がその愚かな判断の影響を受けたという状況である場面を設定する。

(8c) [愚かな判断をした人のは“我们”の一部のメンバーである場合]
我们｛这/那｝些人那时候，怎么那么傻？（作例）
私たちったら、あの頃、なんであんなに馬鹿だったんだろう？

(8c)で、“这”を用いると、[対象人物]のうち、愚かな判断をした一部の人が発話現場にいる、或いは発話現場にいるメンバーに責任があることを認めているのに対し、“那”を用いると、自分もその集団の一員であるものの、愚かな判断をしたメンバーは発話現場におらず、話者は発話現場にいないその愚かな判断をしたメンバーに責任があると考えている可能性が高い。
別の例も見てもらいたい。

(9)当年，**我们｛这/那｝些人**一起在战场上战斗。(作例)
当時、**私たち**は一緒に戦場で戦った。

上の例で、発話者が、[対象人物]の中のリーダーをこの集団の代表と認識し、その人抜きにはこの集団が成り立たないと捉えている場合、リーダーが亡くなって発話現場にいなければ、[対象人物]のほとんどが発話現場にいたとしても、指示詞は“那”が選択されやすい。“我们那些人”ということによって、[対象人物]には、発話現場にいないリーダーが含まれることを示そうとするのだという。これは話者が発話現場にいる人といない人のどちらを重視して発話するのかによるので、必ずしも集団内の身分の上下によって選ばれるわけではない。たとえば、話者が、戦場で一緒に戦ったものの、亡くなってしまった数人の兵士のことを強く想いながら発話するのであれば、亡くなった兵士が[対象人物]の集団の中で目立たない存在であったとしても“那”が用いられる。

(7)(8)(9)は過去を回想する場面の例文であったが、過去を回想する場面ではなく、現在の状態を述べる場面においても、発話現場にいる[対象人物]のメンバーの人数は指示詞の選択に影響している。

(10)[A には 20 人の仲間がいる。B は A と 20 人の仲間に英語の翻訳を手伝ってもらいたいとお願いする。それに対する A の返答]

A:“不行不行，**我们｛这/那｝些人**英语很差。”(作例)

A:「だめだめ、**私達**英語が下手なの。」

(10)の場合、過去を回想する場面ではなく、現在の状態を述べている場面であるが、上で見たのと同様、指示詞の選択には、発話現場に[対象人物]のメンバーのうちどれだけがその場にいるかが問題になる。発話現場に 20 人の仲間が全員いる場合には“那”は使用できず“这”になる。20 人中 10 人がその場にいると、“那”の使用は難しくなる。発話現場にいるのが 5 人くらいであれば、あまり深く考えずとっさに答えるときは“这”も“那”も使用される可能性があるが、“这”を用いると、英語が下手な“我们”とはその場にいる 5 人だけを指していると誤解される可能性があるので、やはり“那”の方がいいとのことである。

このように、この形式において、代名詞が一人称の場合、[対象人物]のうち全員が発話現場にいれば現場的指示により指示詞は“这”が選ばれる。“我们”のメンバーのうち一部が発話現場にいる場合には、[対象人物]には発話現場にいない人物も含まれることを明示的に表す場合には観念的指示により“那”が選択される。上で(5)の例のように、最初に“我们那些人”の話題がなされており、すでに[対象人物]には誰をが含まれるのかが明確な場合には、文脈的指示により、指示詞が“这”が用いられることがある。しかし、代名詞が一人称であるこの形式においては、[対象人物]が誰を含むのかが明確な場合を除いて、文脈的指示ではなく、観念的指示が優先される。次の例(10)のように、文の前方で話者が“我们”の具体的な愚行を述べ、その言語的文脈に現れた“我们”を指していることを意識しながら、＜“我们”＋指示詞＋“些人”＞で指し示すとしても、[対象人物]にはその場にいないメンバーが含まれることを明確にしたければ、やはり“那”が用いられるからである。

(11)我们每天晚上不学习，一起出去玩，对老师做恶作剧。**我们｛这/那｝些人**那时候，怎么那么傻？ (作例)

私たちは毎晩勉強せずに、一緒に遊びに出かけて、先生にいたずらしていた。**私たち**

<u>ったら</u>、あの頃、なんであんなに馬鹿だったんだろう？

以上、一人称複数代名詞と指示詞が共起し、同格関係にある場合の指示詞の選択について考察した。この場合の指示詞の選択をまとめると、[対象人物]のメンバーが発話現場に全員いる場合には現場的指示により、“这”が用いられる。しかし、発話現場にいるのがメンバーの一部であれば、指示詞は“这”、“那”の両方が使われる可能性がある。その場合、話者が[対象人物]は発話現場にいない人を含むことを明示したい場合には、観念的指示により“那”が用いられる。[対象人物]の指す対象が受信者にとって明らかで、誤解される心配のない場合には、文脈的指示により、最初は“我们那些人”で指示されていた同じ対象が後から“我们这些人”に変わることもある。

基本的に、この形式で一人称代名詞において、文脈的指示よりも観念的指示が優先される理由として考えられるのは、指示詞の最も基本的な役目は、受信者を間違いなく指示対象に導くことであり、＜“我们”＋指示詞＋“些人”＞の形式において重要なのは、その集団は一体どの人たちを指すのかを受信者に伝えることである。代名詞が一人称であれば、既に発話者自身が含まれていることは確実に伝えることができているので、残りのメンバーに一体誰を含むのかを話者は示そうとする。そして、話者は自分が発話現場にいないメンバーのことを念頭に置いていることを示す場合には、観念的指示を行って、“那”を用いるのである。

次に、二人称複数の代名詞と指示詞が共起し、同格関係にある場合について考察する。

５．３．１．２　複数の二人称代名詞

本節では、複数の二人称代名詞と指示詞が共起する場合の、＜“你们”＋指示詞＋“些人”＞という形式での指示詞選択について分析する。５．２．３で述べたように、先行研究では、この形式において、“那”は用いられないとされてきたが、実際には、“你们那些人”という言語形式が用いられる場合が存在する。

“你们那些人”が自然に使用できる一つの状況は、受信者を何らかの意味で区分し、話者は目線、体の向き、身振り等でその区分を示しながら、一つのグループと対比させて、もう一つのグループを“你们那些人”で指す場合である。

(12)[話者は手ぶり等を用いて受信者の区分が分かるようにしつつ述べる。]

你们这些人在这儿等一会儿。你们那些人先走。

(こちらの)皆さんはここでちょっと待っておいて。(そちらの)皆さんは先に行ってちょうだい。

この場合、区分した二つのグループと話者との物理的距離において、必ずしも明らかな差がある必要はない。話者から物理的に等しい距離にある二つのグループに対し、一方を“你们这些人”、もう一方を“你们那些人”と指し示すことも可能である。しかし、二つのグループと話者との物理的距離に明らかな差がある場合には、やはり話者から物理的に近い方のグループを“你们这些人”、遠い方のグループを“你们那些人”で指すことから、この対比的用法においては、[対象人物]と話者との距離は指示詞の選択基準となり得る。

もっとも、一つのグループと対比させてもう一つのグループを指し示す場合であっても、必ずしも“你们那些人”という言語形式を用いなければならないわけではない。区分した二つのグループが、話者からそれほど変わらない距離にいる場合には、たとえば下のように、区分したグループの両方に対して、“你们这些人”を使うこともできる。

(13)[話者は手ぶり等を用いて受信者の区分が分かるようにしつつ述べる。]

你们这些人在这儿等一会儿。你们这些人先走。

(こちらの)皆さんはここでちょっと待っておいて。(こちらの)皆さんは先に行ってちょうだい。

また、“你们那些人”と対比されるもう一つのグループは、常に“你们这些人”で表現されるとは限らない。たとえば下のように、別の表現方法で表わされることもある。

(14) [話者は手ぶり等を用いて受信者の区分が分かるようにしつつ述べる。]

大阪大学的学生在这儿等一会儿。你们那些人先走。

大阪大学の学生はここでちょっと待っておいて。(そちらの)皆さんは先に行ってちょうだい。

(15) [話者は手ぶり等を用いて受信者の区分が分かるようにしつつ述べる。]

你们在这儿等一会儿。你们那些人先走。

皆さんはここでちょっと待っておいて。(そちらの)皆さんは先に行ってちょうだい。

このように、受信者を区分し、一つのグループと対比的にもう一つのグループを表す場合には、[対象人物]が全員受信者となっている場合であっても、“你们那些人”の使用は排除されない。

では、対比する他のグループが存在せず、[対象人物]が全員受信者となっている場合、[対象人物]と話者との距離は指示詞の選択基準となり得るのだろうか。下の例を見てもらいたい。

(16) [話者は遠くにいる一群の集団に呼びかけて大声で叫ぶ。[対象人物]は全員受信者となっている]

“你们{这/*那}些人都不是好东西。”

あなたたちはろくでなしだ。

この場合、[対象人物]は話者から遠距離に位置しているが、“这”が用いられ、“那”は使用できない。“那”を用いて、“你们那些人都不是好东西。”と言う発話をネイティブ話者が聞くと、[対象人物]が話者から遠距離にいるとは感じられず、[対象人物]の一部が受信者となっていないと受け止められる。ネイティブのインフォーマントによれば、上のような場面では、わざわざ遠くの集団に大声で呼びかけるなら、話者は特に相手にそれを伝えたいという気持ちが強いはずであるので、ますます“那”ではなく“这”がふさわしいという。したがって、[対象人物]が全員受信者となっており、対比する他のグループが存在しない場合には、話者と[対象人物]との距離は指示詞の選択基準とならないことがわかる。

では、対比する明示化された別のグループが存在しない場合、“你们那些人”が用いられることはあるのだろうか。対比的な用法を除いても、“你们”、“你们这些人”が用い得ず、むしろ、“你们那些人”のみしか使用できない状況が存在する。それは、[対象人物]に受信者を含めない場合である。

(17) [話者は、自分が所属していないある集団と待ち合わせをしている。集合時刻になったが、その集団の大半の人たちはまだ到着していない。話者は、その集団の、到着しているメンバー(一人或いは数人)に向かって尋ねる。]

*你们为什么还没有来？”(*あなたたちどうしてまだ来ていないの？)

*****你们这些人为什么还没有来？(*****あなたたちどうしてまだ来ていないの？)

你们那些人为什么还没有来？(あなたの仲間たちはどうしてまだ来ていないの？)

上の例では、既に到着している受信者に向かって、“你们”、“你们这些人”を用いてなぜまだ来ていないのか、と尋ねることはできない。“你们那些人”を用いれば、受信者が属する集団のうち、受信者を含まない他のメンバーのことを指すことができる。ここでは“你们”、“你们这些人”、“你们那些人”のうち、“你们那些人”のみ使用可能である。ただし、“你们那些人”を用いることができるのは、既に到着している受信者が、その集団の中で例外的な存在である場合に限られる。もし、集団のうち、大半が到着しているという場面であれば、“你们剩下的那些人怎么还没有来？(あなたたちの残りの人たちはどうしてまだ来ていないの？)”という言い方になるのが自然であるという。

別の例を考えてみる。

(18) [話者は、自分が所属していないある集団をパーティーに招いた。向こうの方で、その集団の大半の人々が大騒ぎしている。話者は、その集団のメンバーであるが、大騒ぎしている集団から離れて静かにしている人(一人或いは数人)に話しかける。]

你们真吵闹。(あんたたち本当騒がしいわね。)

?你们这些人真吵闹。(あんたたち本当騒がしいわね。)

你们那些人真吵闹。(あんたの仲間たち本当騒がしいわね。)

上の場面では、受信者自身が大騒ぎしていようと、大騒ぎせず集団から離れて静かにしていようと、受信者はその大騒ぎしている集団に属している人間であることには変わりないという観点から、“你们”を使うこともできる。同様に、“你们这些人”を用いることも不可能ではない。しかし、“你们这些人”を用いると、受信者も必ず[対象人物]に含まれることを明示することになるため、受信者自身が騒いでいない場合には、“你们那些人”を使用する方が、より自然である。もしも話者が、受信者を[対象人物]に含めないことを明示するのであれば、“你们这些人”と“你们那些人”のうち、“你们这些人”は使用できず、“你们那些人”しか使用できない。

以上、受信者を区分し、一つのグループと対比的にもう一つのグループを指し示す場合には、[対象人物]と受信者が一致している場合であっても“你们那些人”の使用は排除さ

れないこと、また、受信者を[対象人物]に含めないことを明示する場合には“你们这些人”と“你们那些人”のうち、“你们那些人”のみの使用が可能であることについて見た。

では、対比的用法ではなく、かつ受信者が“你们”に含まれる場合、この形式において“那”が用いられる場合はあるのだろうか。以降、その点を検討していく。

以下は、CCLM の検索結果である“你们那些人”の例である。

(19)虽然考古学界怀疑那块石头的真实性，哥登却信心不移，猜想那 9 具田纳西骷髅可能是公元 132 年到 135 年之间为逃避迫害而逃出罗马的犹太难民后裔。“设身处地想想，”他说，“你是受压迫的少数民族的一分子，而**你们那些人**都是航海者和水手，于是你逃得越远越好，甚至渡过大西洋。”然后你可能驶入墨西哥湾，溯河而上，不知怎么却到了蝙蝠溪[33]。

考古学者はその石が本物かどうかを疑っているが、ゴードンは疑うことなく、9 個のテネシーの髑髏は西暦 132 年から 135 年の間に迫害を逃れるためにローマを逃げ出したユダヤ人難民の子孫のものであると推測している。「その身なって考えてみなさい」、と彼は言う、「あなたは抑圧を受けた少数民族の一分子で、**あなたたち**は皆航海者と船乗りである、そこであなたはなるべく遠くへ逃げたほうがよかった、大西洋を渡ることになるとしても」それからあなたはメキシコ湾に入り、河を遡って、知らないうちに Bat Creek に着いた。

(20)一个青年人，谁愿意顶着落后帽子过日子？看着**你们那些人**，我也眼热。过去你和我说的话，我也老记在心里。以后，人家看不起我，你也不理睬我了，我就不知怎么办好啦！

一人の若者として、誰が落ちこぼれとみなされて過ごしたいと思うだろうか？**あなたたち**を見ていると、私も羨ましい。以前あなたが私に言った事を、私はいつも心に留めている。以後、他の人が私を見下して、あなたも相手にしてくれなくなったら、私

[33] 例(19)は翻訳口調で、ごく自然な中国語とは感じられないというネイティブ話者もいる。ただし、特に翻訳口調と感じられるのは“信心不移”、“于是你逃得越远越好，甚至渡过大西洋。”等の部分で、本論文で検討している“你们那些人”の部分そのものが翻訳口調に感じられるというわけではないので、除外せずに検討することにする。

はどうしたらいいか分からない。

(21)如果我没弄错的话——我是真的很感激你把你自己的食物分给我们——但**你们那些人**真的一年到头全吃这些东西吗?

もし私が誤解をしているのでなければ——私はあなたが自分の食物を私達に分けてくれたことを本当に感謝している——しかし**あなたたち**は本当に一年中これらのものを食べているのか?

(19)-(21)の例では、“你们那些人”が使用されているが、いずれの例も、[対象人物]のメンバーのうち、受信者となっていないメンバーが存在している。

(19)は前方で、受信者に対して単数の二人称代名詞“你”を用いて呼びかけていることから、その後の“你们那些人”の[対象人物]は受信者以外を含んでいることは明らかある。この例文について、“你们那些人”の[対象人物]には受信者が絶対に含まれないと断定することはできないが、第一直感的には[対象人物]は受信者を含まないと捉えるネイティブのインフォーマントもいる。もしも、ここで“你们这些人”を用いると、必ず受信者を含むことを表現することになるため、話者が、[対象人物]には受信者を含まないことを明示する場合には“你们那些人”のみが使用される。“你们那些人”の[対象人物]は受信者を含むと捉える場合には、“你们这些人”の使用は排除されないものの、実際の[対象人物]のメンバーが現実には一人も受信者となっておらず、また想像させている内容が過去のことであることも加わり、やはり“那”の方が好まれる。

(20)も、[対象人物]の一部しか受信者となっていないと想定される。もし、[対象人物]のメンバーが全員受信者となっていれば、指示詞は“这”しか用いられない。話者は、[対象人物]が受信者になっていない人を含んでいることを表すために、観念的指示を行って“那”を用いているのである。もし、(20)の例文の前に先行文脈を置いて(20a)のように書き換え、かつ話者が前方の言語的文脈で話題に上った対象を指示することを意識するなら、文脈的指示による指示詞選択が優先になり、“这”がより自然になる。

(20a)你们当中有的人小接受良好的教育，有的人家庭生活宽裕，有的人长得好看，有的人很能干。一个青年人，谁愿意顶着落后帽子过日子？看着**你们{这/?那}些人**，我也眼热。

过去你和我说的话，我也老记在心里。以后，人家看不起我，你也不理睬我了，我就不知怎么办好啦！

(20a)あなたたちの間ではある人たちは小さいころから良い教育を受け、ある人たちは家庭が裕福で、ある人たちは美しく、ある人たちは能力がある。一人の若者として、誰が落ちこぼれとみなされて過ごしたいと思うだろうか？**あなたたち**を見ていると、私も羨ましい。以前あなたが私に言った事を、私はいつも心に留めている。以後、他の人が私を見下して、あなたも相手にしてくれなくなったら、私はどうしたらいいか分からない。

(20a)で、観念的指示を行うことよりも文脈的指示による指示詞選択が優先されるのは、受信者となっていない人は、既に前方文脈の“你们”に含まれているため、[対象人物]が受信者となっていない人を含んでいることが明確であるからである。文脈的指示による指示詞選択が観念的指示を行うことよりも優先されるのは、基本的に[対象人物]が一体どの人たちを指すのかが誤解なく伝わる場合に限られる。したがって、下の(20b)のように、似た文脈ではあるが、前方文脈で述べるのを“你们”ではなく“你”にした場合、話者は、＜“你们”＋指示詞＋“些人”＞が前方の言語的文脈で話題に上った対象を指示することを意識していたとしても、観念的指示が行われ、“那”が用いられる。それは、受信者となっていない人が[対象人物]に含まれることを明示し、[対象人物]が一体どの人たちを指すのかを誤解なく伝える方が重要であるからである。

(20b)你从小接受良好的教育，家庭生活也宽裕。你长得好看，又能干。一个青年人，谁愿意顶着落后帽子过日子？看着**你们{?这/那}些人**，我也眼热。过去你和我说的话，我也老记在心里。以后，人家看不起我，你也不理睬我了，我就不知怎么办好啦！

あなたは小さいころから良い教育を受け、家庭も裕福だ。あなたは美しく、能力もある。一人の若者として、誰が落ちこぼれとみなされて過ごしたいと思うだろうか？**あなたたち**を見ていると、私も羨ましい。以前あなたが私に言った事を、私はいつも心に留めている。以後、他の人が私を見下して、あなたも相手にしてくれなくなったら、私はどうしたらいいか分からない。

(21)は、“你们那些人”の前方で、“感激你把你自己的食物分给我们”と述べられており、単数の二人称代名詞で受信者に語りかけていることから、[対象人物]のうち、受信者となっているのは一人のみであると考えられる。[対象人物]には受信者以外の人が含まれることを示すため、観念的指示により“那”が用いられている。この場合も、下の(21a)のように、[対象人物]のメンバーが全員受信者となっていると設定すると、観念的指示は不可能になり、“那”は用いられない。

(21a) [[対象人物]のメンバーが全員受信者となっている]
如果我没弄错的话——我是真的很感激你们把你们自己的食物分给我们——但**你们{这/*那}些人**真的一年到头全吃这些东西吗？

もし私が誤解をしているのでなければ——私はあなたたちが自分たちの食物を私達に分けてくれたことを本当に感謝している——しかし**あなたたち**は本当に一年中これらのものを食べているのか？

また、[対象人物]のメンバーのうち、受信者となっているのが一人であっても、前方に言語的文脈を追加して(21b)のようにし、話者がその前方の言語的文脈で話題に上った“你们”を指示していることを意識して＜“你们”＋指示詞＋“些人”＞の指示詞を選ぶなら、文脈的指示による指示詞選択が優勢になり、“这”が使用される。

(21b)[[対象人物]のメンバーのうち、発話現場にいるのは受信者一人である。話者は前方の言語的文脈で話題に上った対象を指示することを意識して＜“你们”＋指示詞＋“些人”＞を用いる。]
你们都是素食者。从来不吃荤的。如果我没弄错的话——我是真的很感激你把你自己的食物分给我们——但**你们这些人**真的一年到头全吃这些东西吗？

あなたたちは皆菜食主義者だ。今まで、生臭物を食べたことがない。もし私が誤解をしているのでなければ——私はあなたが自分の食物を私達に分けてくれたことを本当に感謝している——しかし**あなたたち**は本当に一年中これらのものを食べているの

か？

(21b)で観念的指示を行うことよりも文脈的指示による指示詞選択を優先できるのは、やはり前方で、受信者となっていない人がすでに“你们”に含まれているために、[対象人物]には受信者となっていない人が含まれることを、＜“你们”＋指示詞＋“些人”＞の部分で明示する必要がないからである。したがって、似たような前方文脈があったとしても、話者は受信者一人が菜食主義者であることを知っていて、[対象人物]の他のメンバーが皆菜食主義者かどうかは知らないという場合には、(21c)のように観念的指示を行うことが優先され、“那”が使用される。

(21c) [[対象人物]のメンバーのうち、受信者となっているのは一人である。]
你是素食者。从来不吃荤的。如果我没弄错的话——我是真的很感激你把你自己的食物分给我们——但**你们{?这/那}些人**真的一年到头全吃这些东西吗？

あなたは菜食主義者だ。今まで、生臭物を食べたことがない。もし私が誤解をしているのでなければ——私はあなたが自分の食物を私達に分けてくれたことを本当に感謝している——しかし**あなたたち**は本当に一年中これらのものを食べているのか？

以上、一つのグループと対比的にもう一つのグループを表す場合でなければ、[対象人物]のメンバー全員が受信者となっている場合には“你们那些人”は用いられないこと、[対象人物]の一部が受信者となっている場合には、“你们这些人”、“你们那些人”の両方の可能性があるが、前方文脈により既に[対象人物]が明確で、前方の文脈で話題になった“你们”を指示していることを意識して＜“你们”＋指示詞＋“些人”＞の指示詞を選ぶなら、“这”が用いられることを見てきた。

ここから、[対象人物]の一部が受信者となっている場面について、より詳しく検討していく。次の例をみてもらいたい。

(22) [[対象人物]の一部が受信者となっている。受信者は話者から遠くても近くてもよい]
“**你们{这/那}些人**都不是好东西。”

あなたたちはろくでなしだ。

上のように、[対象人物]の一部のみが受信者となっている場合、“这”“那”の両方が使用可能である。特に、“那”を使用する場合には次のような場面が想定できる。ある集団の一部の人間が不祥事を起こして世間で話題になっている。不祥事を起こしたのは、その集団の一部の人間ではあるが、その不祥事の件で、発話者はその集団全体に悪いイメージを持っている。発話現場にその集団の一部のメンバーがいたので(22)を発話する。“你们这些人”を使うと、受信者を責めているように聞こえる。一方、“你们那些人”を使うと、受信者と、受信者となっていないメンバーの両方を含んだ集団全体を責めているというネイティブのインフォーマントと、受信者そのものを責めているようには聞こえず、受信者となっているのはたまたまその集団に所属しているにすぎないことを認めつつその集団を批難している、というネイティブのインフォーマントがいるが、いずれにせよ、話者は[対象人物]の中の受信者以外のメンバーについて強く意識していることには変わりない。

このように、“你们这些人”と“你们那些人”は、受信者となっているのが[対象人物]の全部か一部か、また、受信者となっているのが[対象人物]の一部の場合には、受信者となっていないメンバーをどれほど意識するのかによって使い分けられている。[対象人物]を均質的であると設定したとき、[対象人物]全体のうち何人が受信者となっていれば“这”が、あるいは“那”が用いられるのかについては、人称代名詞が一人称代名詞であったときに、[対象人物]のメンバーのうち、何人が発話現場にいるのが何人であれば“这”が、あるいは“那”が用いられるのかについてネイティブのインフォーマントが述べてくれた割合とほぼ一致している。

このように、対比する明示化された別のグループが存在しない場面では、“你们这些人”と“你们那些人”は、[対象人物]のうち、受信者となっていないメンバーを意識しているのかどうかによって使い分けられているため、たとえ[対象人物]が全員発話現場にいたとしても、“你们那些人”を使うことによって、話者は[対象人物]の集団全体ではなく、その中の一部のみを受信者として捉えていることを表現できる。次のような場面を設定する。

(23) [学級委員と学級委員が対立して、お互いの学級を批判する。二つの学級はそれぞれ学級委員を先頭にして対峙しあっており、学級委員の後ろには、お互いの学級の生徒が全員その場にいる。(A クラスの学級委員 a、B クラスの学級委員 b)]

班长 a：“**你们那些人**都不是好东西。”

班长 b：“**你们那些人**才都不是好东西。”

学級委員 a：**お前たち**はみんなろくでなしだ。

学級委員 b：**お前たち**こそみんなろくでなしだ。

(23)のように、[対象人物]のメンバーが全員その場にいるにもかかわらず、“那”を使うと、話者が受信者として捉えているのは、[対象人物]のうち、自分が語りかけているその人しかいないかのように表現される。したがって、上でお互いが“你们那些人”を用いると、a 単独と b 単独の争いになるのである。もし学級委員 a が、“你们这些人都不是好东西。”というとすれば、もはや学級委員同士の対立ではなく、a が B 学級の生徒全員に向かって発話しているようになる。

したがって、たとえば、b のセリフだけを“你们这些人”に変えて下のようにすると、中国語母語話者は、第一印象的に次のような場面を想像する。

(24) [b が A 学級の教室の中に入っている。教室の中は全て A 学級の生徒たちで、B の学級の人たちは教室にいない。]

学級委員 a：“**你们那些人**都不是好东西。”

学級委員 b：“**你们这些人**才都不是好东西。”

学級委員 a：**お前たち**はみんなろくでなしだ。

学級委員 b：**お前たち**こそみんなろくでなしだ。

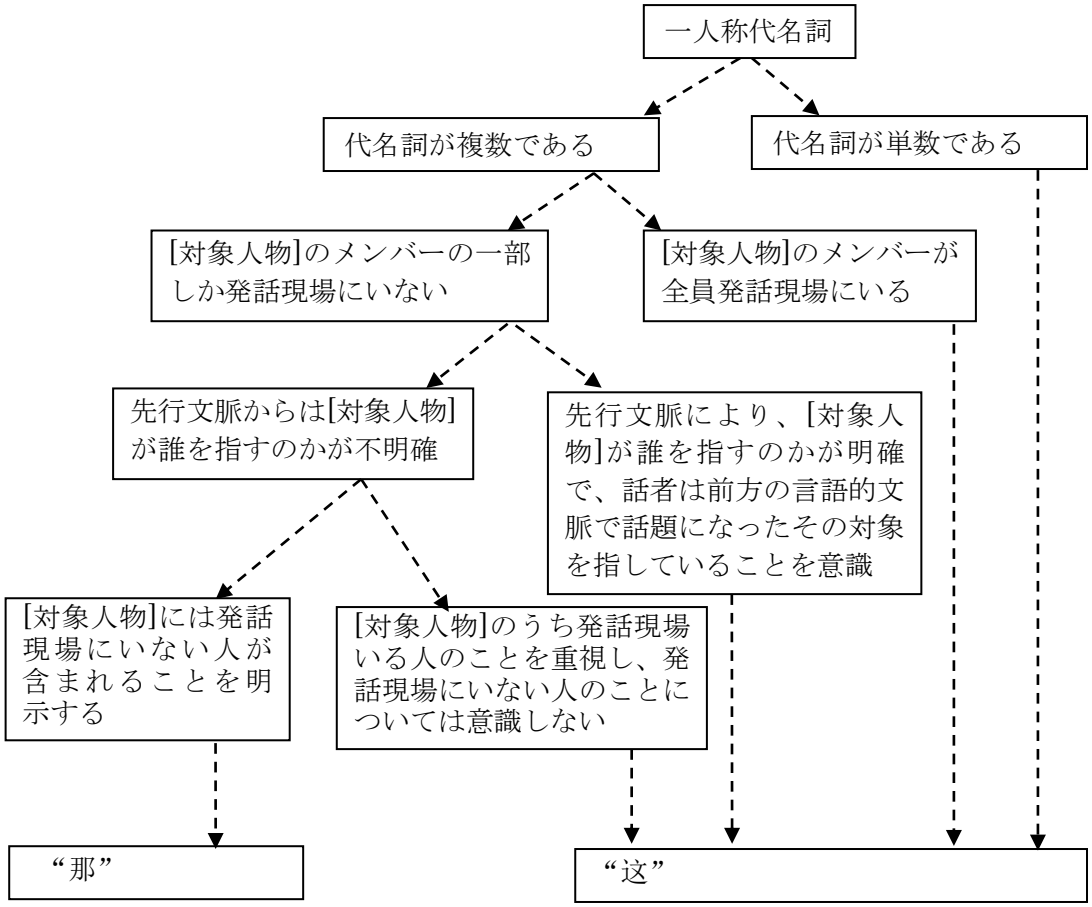
以上、二人称複数代名詞と指示詞が共起し、同格関係にある場合の指示詞の選択について考察した。分析の結果、見出されたのは、対比する明示化された別のグループが存在しなければ、この形式では、[対象人物]が全員受信者となっている場合、話者と[対象人物]との物理的な距離は指示詞の選択にほとんど関わりないということである。[対象人物]が遠距離に位置している場合でも、[対象人物]が全員受信者となっていれば、“这”を用いる

からである。つまり、この形式においては、話者と、受信者となっている[対象人物]との物理的遠近によって指示詞が使い分けられているのではなく、まず、受信者を[対象人物]の中に含むかどうか、もし含む場合には、[対象人物]のメンバーのうち受信者となっているのが全員かそれとも一部かによって指示詞が使い分けられていることになる。そして、受信者となっているのが、[対象人物]の一部の場合には、受信者となっているメンバーとなっていないメンバーの人数や話者の認識における位置づけから、受信者となっていないメンバーをどれほど重視するのかという点が関わっている。

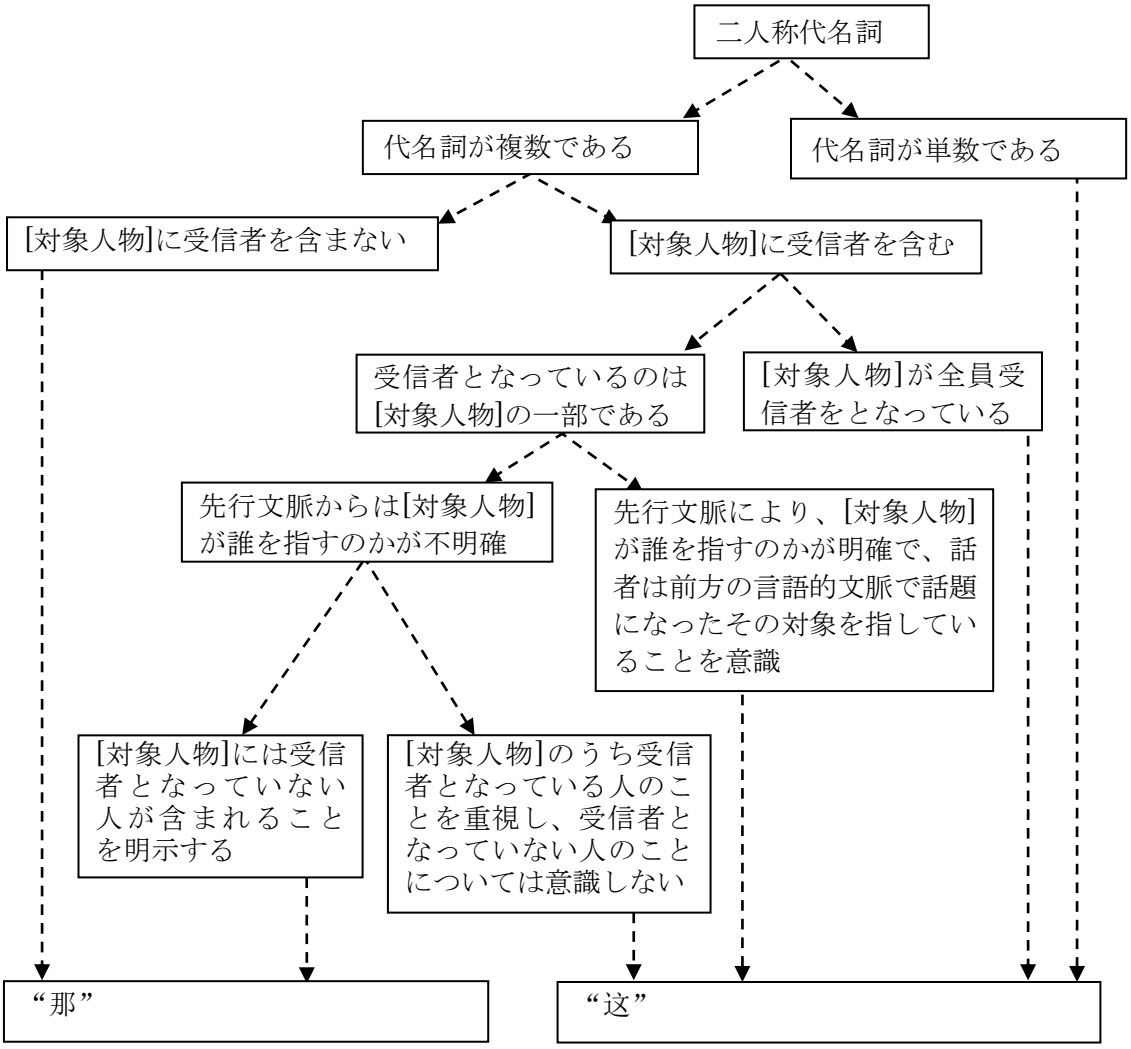
したがって、徐丹 1988 が指摘した、人称代名詞が“这/那”の前に現れて、その後の成分と同格関係を形成するとき、一人称代名詞と二人称代名詞の場合は“那”の使用が排除されるというのは、代名詞が単数の場合にはあてはまるが、代名詞が複数の場合には必ずしもあてはまらないことがわかった。

５．３．１．３　一人称代名詞、二人称代名詞のまとめ

一人称と二人称代名詞の場合の「代＋指＋N」の指示詞の選択基準を図にまとめると次のようになる。



(集団を区分し、一方のグループと対比的に指し示す用法以外の場合)



５．３．２　三人称代名詞

５．３．２．１　指示詞選択に関する先行研究

５．２．３で見たように、〈三人称代名詞＋指示詞＋量詞＋名詞〉(以下「三代＋指＋N」と称する)という形式における指示詞の選択について言及したものは、管見の限り杨玉玲 2010 の、「どうやら、“那+X”で再度指示するときは一般にその前の“他/他们”に否定的態度をとっており、心理的距離の遠さを表現しているのに対し、“这+X”のときはその前の“他/他们”に肯定的であっても、中立的であっても、さらには否定的態度であっても良いようである(杨玉玲 2010：145)」という曖昧な記述のみであった。

筆者が CCLM で“他那个人”、“他们那些人”“她那个人”“她们那些人”を検索し、重複している例や、二重目的語文の目的語でたまたまその形になった例を除くと、人称代名詞と、後の名詞性成分が同格関係にある例はそれぞれ、“他那个人”12 例、“他们那些人”30 例、“她那个人”6 例、“她们那些人”は 1 例であった。また、CCLM、及び BCC で、この形式で“这”が用いられている例と“那”が用いられている例を見比べてみると、確かに杨玉玲 2010 の指摘どおり、“那”が用いられる場合は、話者が三人称代名詞で表されている人や組織に対して否定的態度をとっている例が多かった。以下の例はその一部である。

(25)铁锁也悄悄道：“跟他相跟上，应酬查路的那一伙子倒是有办法，可是**他们那些人**我实在不想看见！”(CCLM)
鉄鎖は声をひそめて言った。「彼と一緒に行けば、荷物検査係のあの人たちに適当にやってもらう方法があるだろうけど、でも**彼ら**には会いたくない！」

(26)那决不会，我跟**他们那些人**太不同了，合不起来。(CCLM)
それは絶対にありえない、私は**彼ら**とは違い過ぎる、合いっこない。

(27)一天，他在医院同有关人员的谈话中愤然提到：**他们那些人**(指“四人帮”)有些事做得太过分了！(CCLM)
ある日、彼は病院で関係者との会話の中で憤然として言及した。「**彼ら**(「四人組」を指す)はところどころやり方がひどすぎる！」

しかし同時に下のように、否定的態度をとっているとは考えられないのに“那”が用いられている例も存在する。この現象はどのように説明すればよいのだろうか。

(28)“小曹，听说康生同志借了几幅不错的明清山水画，不知还了没有？恩来说，想借来看看呢。**他那个人**，别看忙，也喜欢看画，真的，看一幅好画，也是一种不错的享受呢！”(CCLM)

「曹くん、康生くんは明清代の山水画を借りていたが、返したかどうか知らない？恩

来が、借りてちょっと見たいそうなんだ。彼って、忙しいけれど、絵を見るのも好きなんだ、本当、一幅の良い絵を見るというのも、一種のすばらしい楽しみだね！」

(29)他们那些人的那种文化使命感和保护文化遗产的这种责任感，现在真的回想起来，他们可能比我们更强烈。(CCLM)

彼らのあの種の文化使命感と文化遺産を守るというこの種の責任感は、今本当に思い返してみると、彼らは私達よりもさらに猛烈だったかもしれない。

このように、“那”が用いられていても、必ずしも否定的態度をとっているわけではないということは、他にも指示詞の選択基準があり、他の要素が働いているのではないかと考えられる。以下、現場的要素、文脈的要素、観念的要素の全ての側面を考慮しながら、この形式における指示詞の選択基準を探っていくが、まず、この「代＋指＋N」という形式を使用するにあたっての語用論的制約を簡単に述べておく。

５．３．２．２　現場的指示と非現場的指示

５．３．２．２．１　語用論的制約

この構造が要求する語用論的制約について簡単に触れておく。これは、中国語学習者が、この形式を使用する上で予め知っておく必要のあることだからである。(５．３．１．１で述べた通り、引き続き、何らかの人物(集団)が発話現場にいると述べる場合、話者はその人物(集団)を知覚できることとし、何らかの人物(集団)が発話現場にいないと述べる場合、話者はその人物(集団)を知覚できないこととする。)以降、５．３．２の中では、説明の便宜を図り、話者をA、受信者をB、指示代名詞が指す人物をCとする。また、これまでと同様、「代＋指＋N」の形式が指す対象を[対象人物]とする。Cは代名詞が表す、実際に存在するその人そのものを表し、[対象人物]はCと一致することも、言語的文脈、あるいは話者の頭の中の像であることもある。

Cが発話現場にいたとしても、“他这个人”“他们那些人”のような＜三人称代名詞＋指示詞＋量詞＋“人”＞という形式(以下「三代＋指＋N」と称する)が必ずしも現場指示的に

使用されるわけではない。たとえば、次のような場面を考える。

(30)[A は C のことを知っている。遠くにいる C を見ながら A は B に向かって話す]

(30a) A：“{*这/那}个人 学习很好。” あの人は勉強がよくできる。

(30b) A：“他学习很好。”彼は勉強がよくできる。

(30c) A：“他这个人学习很好。”彼という人は勉強がよくできる。

(30d) A：“他那个人学习很好 。”彼という人は勉強がよくできる。

上の例では、(30a)の“那”、(30b)(30d)が全て成立するのは当然のこと、話者 A は遠くにいる C を見ながら(30c)のように、“他这个人”を使用して評価を述べることができる。しかし、その場合、“他这个人”は遠くにいる C を現場指示的に指しているのではない。遠くにいる C はたまたまそこにいるにすぎない。その証拠に、C を見ながら“他这个人”と言うことはできるが､遠くにいる C を指さしながら“他这个人”と言うことはできない。遠くに C が見えることは、A が C の話をするきっかけにはなっているかもしれないが、それだけで「三代＋D+N」が現場指示的に使用されているとは限らない。話者はその現場にいる C を指さしているのではなく、頭の中にある C の像或いは言語的文脈に登場した C を指している場合がある。ただし、「三代＋D+N」という構造を用いるには、前方文脈で C についての話があるか、A が C について何らかの情報を知っていることが必要である。したがって、下の例(31)のように、前方で全く話題になっておらず、発話現場に今現れた見知らぬ人に対しては、“他”と“这/那个人”をそれぞれ単独で用いることは可能であるが、共起させた形である「三代＋D+N」は使用できない。

(31) [A は、発話現場に現れた全く知らない C について B に尋ねる]

(31a) A: “那个人是谁？”(A から遠い場所に C がいる) (「あの人は誰？」)

(31b) A: “这个人是谁？”(A から近い場所に C がいる) (「この人は誰？」)

(31c) A: “他是谁？”(「彼は誰？」)

(31d) A:* “他这个人是谁？”(*「彼って誰？」)

(31e) A:* “他那个人是谁？”(*「彼って誰？」)

言語的に話題になっていなくても、その状況が一種の文脈を作りだし、「三代＋D＋N」

を使用できる場合は次のような状況である。

(32) [A と B が一緒に勉強をしていると、その場にいる C が場違いに大声で長時間歌い続けている。A が B に話しかける。]
A:“他那个人怎么一直在那里唱歌？”(彼はなぜずっとあそこで歌っているんだ？)

(32)のような例では、「三代＋D＋N」の使用が可能であるが、それは、A と B はお互い C が大声で歌っていることに注意が向いているということが分かっているからである。この状況が、前方で C のことが話題になっているのと同様の環境を作りだしているのである。

また、“他”と“这/那个人”を単独で使わず、わざわざ共起させて「三代＋D+N」という形式を用いて何か述べるからには、述語部分はあまりに客観的すぎる事実であれば不自然であり(史隽 2012：49)、たとえ前方文脈があっても、A が C のことを詳しく知っており、前方で C のことが話題になっていたとしても、(33)のような発話は常にいささか不自然である[34]。

(33) [A は C のことを知っている。A は偶然 C をみかけて、B に向かって言う]
(33a) A：?“哎哎哎，她这个人是林志玲啊!”
(33b) A：?“哎哎哎，她那个人是林志玲啊!”
(33a/b) A：?「あれれ、彼女という人はリン・チーリンだよ！」)

上のような例は下の(34a)(34b)(34c)のように、“这/那个人”或いは“他”を単独で使うのであれば非常に自然である。

(34)[A は C のことを知っている。A は偶然 C を見かけて、B に向かって言う]
(34a) A：“哎哎哎，这个人是林志玲啊!”(A と C は近い)
「あれれ、この人リン・チーリンだよ！」
(34b) A：“哎哎哎，那个人是林志玲啊!”(A と C は遠い)
「あれれ、あの人リン・チーリンだよ！」

[34] 史隽 2012 は、「N1＋指示詞＋N2」構造の場合は明らかに話し手によって N1 への主観的評価のニュアンスが感じられる、と述べている(詳しくは 5.2.1 参照)。

(34c) A：“哎哎哎，**她**是林志玲啊!”(「あれれ、彼女、リン・チーリンだよ！」)

以上、指示詞の選択を考慮する前に、「三代＋D+N」という構造が要求する語用論的制約について簡単に述べた。次に三人称代名詞が単数の場合で、かつ C が発話現場にいる場合から順に指示詞選択を分析していく。

５．３．２．２．２　三人称代名詞が単数のとき

まず、C が単数で、発話現場にいる場合について考える。

(35) [A、B、C はクラスメートで、3 人で会話している]
B：(C に向かって)我们快要高考了，你倒每天去游戏厅玩儿，你想什么呢？
A：(B に向かって)你别看他像不良少年，其实**他｛这/*那｝个人**学习很好。

B：(C に向かって)俺たちそろそろ大学入試だっていうのに、お前は毎日ゲームセンターに遊びに行って、何を考えているんだ？
A. (B に向かって) 彼は不良少年のように見えるけど、実は**彼って**勉強がよくできるんだよ。

(35)の例では、指さし行為を伴うかどうかに関わりなく、“那”を用いることはできない。次に、C が発話現場の遠くにいる場面を設定する。

(36)[A、B、C はクラスメートで、A はゲームセンターで遊んでいる遠くの C を見て、B に言う。]
B：(C を見ながら)我们快要高考了，但，你看，他每天去游戏厅玩儿，他想什么呢？
A：(C を見ながら)你别看他像不良少年，其实**他｛这/那｝个人**学习很好。

B：(C を見ながら)俺たちもうそろそろ大学入試だっていうのに、見ろよ、彼毎日ゲームセンターに行って遊んで、何を考えているんだ？
A. (C を見ながら) 彼は不良少年のように見えるけど、実は**彼って**勉強がよくできるん

だよ。

(36)の場合、指示詞は“这/那”の両方が可能である。しかし、指さし行為を伴うと“那”しか用いることはできない。このことから、C が遠くにいる場合には、話者はその遠くにいる C を現場的に指示する以外に、観念的に、或いは文脈的に指示することができることがわかる。現場的に指示する場合には話者と C との距離の遠近によって指示詞は使い分けられる。

(35)のように、発話現場に C がいて、C も会話に参加している場合には、指さし行為を伴わっていなかったとしても、“这”を用いることはできなかった。これは、会話に参加している目の前にいる対象を無視して、頭の中にある観念或いは言語的文脈に登場した[対象人物]を指すということが認知的に甚だ難しいためであると考えられる。しかし、目の前にいる対象を“他那个人”で指すことのできる次のような場面もある。

(37)[C が B に対してとても失礼なことをした。その場にいた A が、B に対して次のように述べる。]
A：他**这个人**不懂事儿。你别跟他计较。(**彼って**分別がない。彼のこと相手にしないで。)
A：他**那个人**不懂事儿。你别跟他计较。(**彼って**分別がない。彼のこと相手にしないで。)

上の(37)では、C は近くにいるものの、“他这个人”、“他那个人”の両方が使用可能である。“他这个人”が使用可能であるのは、いうまでもなく C が発話者の近くにいるためである。そして、“他那个人”が使用可能であるのは、近くに C がいるにもかかわらず、観念的指示を行って、その場にいないかのように扱うことで、A がわざと C と距離をおき、B に対して「私はあなたの見方だよ」という気持ちを表現できるからである。

以上、単数の三人称代名詞の場合について、発話現場に C いる場合について、A と C の距離が近い場合、遠い場合、また近くにいる C を意図的に無視していないかのように扱う場合の例で、指示詞がどのように使い分けられているのかを見た。

次に、複数の三人称代名詞の場合について、発話現場に C がいる場合、指示詞はどのように使い分けられているのかについて検討する。

５．３．２．２．３　三人称代名詞が複数のとき

結論を先に述べると、複数の一人称代名詞の場合には、指示詞の選択によって、発話現場にいるのが[対象人物]のメンバーの全員なのか、一部なのかを示し分けていたが、複数の三人称代名詞の場合には、「三代＋指＋N」が発話現場にいる C を現場的に指示していることが明確なとき､指示詞の選択によって､発話現場にいるのがメンバーの全員なのか、一部なのかを示し分けることはなく、指示詞は話者とその場にいる集団との距離によって使い分けられている。

(38) [A が歌手である B に対して、コンサート会場に集まっている C について述べる]
(38a) A：**他们这些人**都是你的铁杆歌迷。
(38b) A：**他们那些人**都是你的铁杆歌迷。
(38a/b) A：**彼ら**はみなあなたの忠実なファンです。

上の例で、A が、発話現場であるコンサート会場に集まっている C について述べているのが明確である場合に、(38a)も(38b)も、“他们”は発話現場にいる人たちだけを表していると理解され、(38b)のように“那”を用いると、C のメンバーの一部が発話現場にいないと理解されるのではなく、話者と C との距離が遠いと感じられる。

また、現場的に指示する場合には、話者と C との距離が指示詞の選択基準となり、話者が C に対して否定的態度を抱いているか、肯定的態度を抱いているか、という点は指示詞の選択基準として話者と C との物理的距離より優先されることはない。次のような場面を見てもらいたい。(39)-(43)はいずれも、話者 A が受信者 B に向かって述べていることとする。

(39) [A は、コンサート終了後、C が皆でゴミ拾いをしているのを目にする]
(39a) A：**他们这些人**真了不起！（A と C は近い）
(39b) A：**他们那些人**真了不起！（A と C は遠い）
(39a/b) A：**彼ら**は本当にすごい！

(40) [A は、コンサート終了後、C が乱闘騒ぎを起こしているのを目にする]

(40a) A：**他们这些人**太过分了！（A と C は近い）

(40b) A：**他们那些人**太过分了！（A と C は遠い）

(40a/b) A：**彼ら**はひどい！

現場的指示では、(39a)(39b)のように肯定的な感情を抱いているか、(40a)(40b)のように否定的感情を抱いているかにかかわりなく、C が話者 A から近ければ(39a)(40a)のように“这”が、遠ければ(39b)(40b)のように“那”が用いられる。

ただし、発話現場に二つのグループが共に話者から近く、話者から等距離に位置し、一つのグループを“他们这些人”、もう一つのグループを“他们那些人”で対比的に指し示す場合には、(41a)のように、ゴミ拾いしている方のグループを“他们这些人”、乱闘騒ぎを起こしている方のグループを“他们那些人”で指し示しやすい。ただし、(41b)のように、乱闘騒ぎを起こしている方のグループを“他们这些人”、ゴミ拾いしている方のグループを“他们那些人”で指したとしても、不自然とまではならないという。なお、二つのグループが話者から等距離に位置していても、共に話者から遠い場合には、“他们这些人”と“他们那些人”を使って指すグループを示し分けることはできず、共に“他们那些人”を使って指し示すことになる。

(41) [A は、コンサート終了後、C1 が皆でゴミ拾いをしており、C2 が乱闘騒ぎを起こしているのを目にする。C1 と C2 は A から近く、等距離に位置している]

(41a) A：**他们这些人**真了不起！**他们那些人**太过分了！

(41b) A：**他们这些人**太过分了！**他们那些人**真了不起！

(41a) A：**彼ら(C1 を指す)**は本当にすごい！**彼ら(C2 を指す)**はひどい！

(41b) A：**彼ら(C2 を指す)**はひどい！**彼ら(C1 を指す)**は本当にすごい！

もっとも、これら二つのグループが話者から等距離に位置する場合には、話者は身振りなどで自分が指し示しているグループを明示すれば、下のように、二つのグループを共に“他们这些人”或いは、共に“他们那些人”で指し示すこともできる。この場合、C1 と C2 が共に A から等しく近い位置にいる場合には(42a)のように“他们这些人”を、C1 と C2 が共に A から等しく遠い位置にいる場合には(42b)のように“他们那些人”を用いる。

(42) [A は、コンサート終了後、C1 が皆でゴミ拾いをしており、C2 が乱闘騒ぎを起こしているのを目にする。C1 と C2 は A から等距離に位置している]

(42a) A：他们这些人真了不起！他们这些人太过分了！(C1 と C2 は A から等しく近い)

(42b) A：他们那些人真了不起！他们那些人太过分了！(C1 と C2 は A から等しく遠い)

(42a/b) A：彼ら(C1 を指す)は本当にすごい！彼ら(C2 を指す)はひどい！

また、物理的距離が心理的距離よりも優先される根拠として、ゴミ拾いをしているグループが乱闘騒ぎを起こしているグループよりも話者から遠い場合には、ゴミ拾いをしているグループを“他们这些人”、乱闘騒ぎを起こしているグループを“他们那些人”で指し示すことはできない、という点も指摘しておきたい。

(43) [A は、コンサート終了後、C1 が皆でゴミ拾いをしており、C2 が乱闘騒ぎを起こしているのを目にする。C1 は C2 よりも A から離れたところに位置している]

(43a) A：　他们那些人真了不起！他们这些人太过分了！

(43b) A：* 他们这些人真了不起！他们那些人太过分了！

(43a/b) A：彼ら(C1 を指す)は本当にすごい！彼ら(C2 を指す)はひどい！

これらのことから、[対象人物]の一部が発話現場におり、それを現場指示的に指す場合、“他们那些人”を用ると現場にいない他のメンバーのことを指すことはできず、その発話現場にいる[対象人物]が話者から遠いことを示すことがわかる。複数のグループが共に話者から近く、等距離に存在し、一つのグループを“他们这些人”、もう一つのグループを“他们那些人”で指す場合には、話者が[対象人物]に対して抱く心理的距離が指示詞の選択に影響を及ぼすことはあるが、そのような特殊な状況を除けば、この形式を用いた現場的指示においては、基本的には、話者と発話現場にいる[対象人物]との物理的距離によって指示詞は選択されている。

代名詞が複数の第一人称の場合、指示詞の使い分けによって、発話現場にいるのが[対象人物]のメンバーの一部なのか、それとも全部なのかが表現し分けられており、話者と[対象人物]との距離は指示詞選択に影響していなかった。また、代名詞が複数の第二人称の場合も、対比する明示化された別のグループが存在しなければ、指示詞の使い分けによって、[対象人物]に受信者以外の人が含まれることを明示的に示そうとするかが表現し分けられ

ており、話者と[対象人物]との距離は指示詞選択に影響していなかった。それに対して、代名詞が複数の第三人称の場合、現場的指示においては、指示詞の使い分けによって、発話現場にいるのが[対象人物]のメンバーの一部なのか、それとも全部なのかは表現し分けられておらず、話者と[対象人物]との距離が指示詞選択基準となるのはなぜだろうか。それは次のように考えられる。指示詞の最も大切な機能は、受信者を間違いなく指示対象へと導くことである。複数の代名詞が第一人称の場合は話者が、第二人称の場合は受信者が、[対象人物]のグループに属していることは既に明らかなので、話者は[指示対象]がどの集団を指すのか、位置を示すことによって導く必要はない。[対象人物]をより厳密に規定するのに残されている点は、話者或いは受信者以外のメンバーに誰が含まれるのかである。その手がかりを与えるために、指示詞の使い分けが利用されていると考えられる。一方、複数の代名詞が第三人称で、現場的指示を行う場合には、[対象人物]は話者と受信者以外であれば、現場にいるあらゆる人々全てに可能性がある。そのため、指示詞の使い分けは、その現場にいるあらゆる人々のうち、どの集団を指すのかを示すことに用いられるのが当然である。それで、代名詞が三人称の場合には指示詞の使い分けは話者から[対象人物]までの距離を表すのに用いられ、受信者を間違いなく[対象人物]へと導く道具立てとなっているのである。

５．３．２．３　非現場的指示

ここでは、C が発話現場にいない場合、また、C が発話現場いたとしても、話者はその C を現場的に指示しているのではなく、頭の中にある C に関する概念や像、或いは言語的文脈に登場したその C を指している場合の指示詞の選択基準について考える。ネイティブ話者にアンケートと個人的に詳しくインタビューを行っていくうちに次第に明らかになってきたのは、①文脈的要素の差異に敏感で、「三代＋指＋N」が言語的文脈で話題になった[対象人物]を指しているのかどうかを重視して指示詞を選択する(以下、「文脈的要素考慮型」と称する)インフォーマントと、②話者が指しているのが言語的文脈かどうかよりも、話者と C の人間関係的要素を重視して指示詞を選択する(以下、「人間関係的要素考慮型」と称する)インフォーマントと、③「文脈的要素」や「人間関係的要素」よりも、C が現場にいないという事実を重視して基本的には常に“那”を使用する(以下、「基本“那”使用型」と称する)インフォーマントに分かれるという点である。ただし、「文脈的要素考慮型」、「人

間関係的要素考慮型」及び「基本“那”使用型」話者は、それぞれ他の要素を一切考慮しないというわけではない。そうではなく、主に第一直感ではどの要素を優先的に考慮するかの問題である。よって、たとえば「文脈的要素考慮型」のインフォーマントであっても、顕著な人間関係的要素(C を部外者とみなす等)があれば、それに促されて指示詞を選択することもある。

したがって、ある特定の場面で、より自然だと母語話者が判断する指示詞は必ずしも一致しないが、同一の話者において、指示詞選択はかなり系統立って行われている。以下には、「文脈的要素考慮型」、「人間関係的要素考慮型」、「基本“那”使用型」の話者がそれぞれどのような要素を考慮して指示詞を選択しているのかについて分析していく。

５．３．２．３．１　「文脈的要素考慮型」話者の場合

ここでは、「文脈的要素考慮型」のネイティブ話者の場合を見ていく。以下の例(44)から(46)は全て現場には C がいないと設定している。(44)から(46)について、“这”を使う場合と“那”を使う場合とでは、どのようにニュアンスが変わるのかについての「文脈的要素考慮型」のインフォーマントの内省は以下のとおりである。

(44)最近有名的张天王的歌迷，演唱会的时候每次都打架真的很过分。**他们｛这/那｝些人**太暴力了。(作例)
最近有名なスーパースター張さんのファンは、コンサートの度に殴り合いになって本当にひどい。**彼ら**はあまりに暴力的だ。

(44)では、どちらの指示詞も同じぐらい自然に使用できるが、話者が、前方の言語的文脈に出てきた、その“最近有名的张天王的歌迷(最近有名な張さんのファン)”を指していることを意識しているのであれば“这”が用いられる。話者が“那”を用いるとすれば、それは前方の言語的文脈に現れた「張さんのファン」を指しているのではなく、話者の頭の中にある張さんのファンの像を指している。

次の例も同様である。

(45) 他成了你男朋友了啊，**他{这/那}个人**怎么样？(作例)

彼はあなたの彼氏になったんだ、**彼**ってどういう人？

(45)で指示詞は、“这”であっても“那”であってもどちらでも自然である。しかし、話者が前方で述べた「あなたの彼氏になった彼」を指していることを意識してれば“这”が用いられる。“那”が用いられるときは、言語的文脈ではなく、実際に存在していてその場にいない、話者が頭の中に思い浮かべているCのイメージを指している。

(46)“我和他根本没有办法谈话，每次都会生气，每次都弄了个脸红脖子粗，不是他对我吼，就是我对他吼……你不知道**他那个人**有多难弄……我一定是前辈子欠了他的！”(CCLM)

(46)「私は彼と話し合うことができない、毎回怒ってしまう、毎回癇癪を起こしてしまう、彼が私に怒鳴るのでなければ、私が彼に怒鳴ってしまう……君は**彼って人**がどれだけ扱いにくいか分かっていない……私はきっと前世で彼にいっぱい借りがあるんだろうね！」

上の例も、指示詞はどちらも可能であるが、前方の言語的文脈で述べている、その[対象人物]を指しているのであれば“这”を用い、“那”を用いる場合には、言語的文脈に現れた[対象人物]ではなく、頭の中の彼の像を指している。

「文脈的要素考慮型思考」のインフォーマントが述べてくれた上記の内省は、以下のペアになった例文において、他の複数の「文脈的要素考慮型思考」のインフォーマントの回答に共通して見られた次の事実と一致する。

たとえば、下の(47a)と(47b)において、(47a)では、“这”より“那”が自然だとした複数の同じインフォーマントが、前方の言語的文脈に“他”についての具体的なエピソードを付け加えて(47b)のようにすると、“这”のほうがより自然になると回答している。

(47a) 你肯定会跟我一样喜欢他的。**他（　）个人**生性欢快、有趣，是个很好的好人。(CCLM)

あなたはきっと私と同じくらい彼が好きになる。**彼って**天性が晴れやかで、面白くて、とってもいい人なんだ。

(47b) 我以前住院的时候，他来看过我好多次。你肯定会跟我一样喜欢他的。**他（　）个人**生性欢快、有趣，是个很好的好人。(波線部筆者追加)

私が以前入院していたとき、彼は何度も私を見に来てくれた。あなたはきっと私と同じくらい彼が好きになる。**彼って**天性が晴れやかで、面白くて、とってもいい人なんだ。

次の例でも、(48a)では、“那”が非常に自然で“这”は不自然であるとした複数の同じインフォーマントが、前方の言語的文脈に“他”についての具体的なエピソードを付け加えた(48b)では、“这”も使用可能になると回答している。

(48a) 你肯定会跟我一样讨厌他的。**他（　）个人**生性阴郁、无趣，是个很不友善的人。(作例)

あなたはきっと私と同じくらい彼が嫌いになる。**彼って**天性が暗くって、面白味がなくて、愛想が悪い人だ。

(48b) 我以前住院的时候，他总是来找我麻烦。你肯定会跟我一样讨厌他的。**他（　）个人**生性阴郁、无趣，是个很不友善的人。(作例)

私が以前入院していたとき、彼はいつも私を煩わせてきた。あなたはきっと私と同じくらい彼が嫌いになる。**彼って**天性が暗くって、面白味がなくて、愛想が悪い人だ。

また、(28a)のように前方文脈を提示しないで指示詞の選択を考えた場合には、“这”と“那”の使用が等しく可能であると答えた、その同じインフォーマントが、下の(28)のように前方文脈と提示すると、“这”の方がより自然に感じると答えている。

(28a) **他（　）个人**，别看忙，也喜欢看画，真的，看一幅好画，也是一种不错的享受呢！(CCLM)

彼って、忙しいけれど、絵を見るのも好きなんだ、本当、一幅の良い絵を見るというのも、一種のすばらしい楽しみだね！

(28)“小曹，听说康生同志借了几幅不错的明清山水画，不知还了没有？恩来说，想借来看看呢。**他（ ）个人**，别看忙，也喜欢看画，真的，看一幅好画，也是一种不错的享受呢！”(CCLM)

「曹くん、康生くんは明清代の山水画を借りていたが、返したかどうか知らない？恩来が、借りてちょっと見たいそうなんだ。**彼って**、忙しいけれど、絵を見るのも好きなんだ、本当、一幅の良い絵を見るというのも、一種のすばらしい楽しみだね！」

当然、前に文脈があったからといって、話者は必ずしもその文脈を指すかどうかは確定できないために、文脈を加えると“那”が一切使用不可能になるというわけではない。それでも、C に対して評価を述べる具体的エピソードを前方で述べると、話者が言語的文脈に現れた C を指そうとして意識が強く感じられるようになり、上で見たように、より自然であると答える指示詞に違いが生じるインフォーマントが複数いる。また、「文脈的要素考慮型」のインフォーマントは共通して、下のように、C についての具体的内容が詳細に語られる例では、“这”がより自然だと答える。

(49) 她毫不迟疑地在好几个年轻小伙子的怀里偎坐过，或是到门背后同几个为了她而争风吃醋的人说悄悄话。有时候，这不免让他泄气而又恼火，觉得自己再也不能同她交往了——**她这个人**太卑劣，太庸俗，太轻率了。(CCLM)

それでも、彼女は何の躊いもなしにさまざまな男たちの膝に座ったり、ドアの陰で男たちと囁きあっているのを見た。そして一時は、そんな場面を見たせいで落胆し、また同時に腹がたって、もうあの女とはつきあえない、つきあうものかと思った——安っぽくて、卑俗で、つまらない女なのだから。(宮本陽吉訳 1975：67)

次の例でも、C が前方で話題になっている上に、話者は C について詳細に語っている。「三代＋指＋N」の指示詞を選ぶ時点で、話者はこれから C について語ろうとしていることは明らかなので、文脈指示用法の後方指示の指示詞選択に近い心境[35]でやはり“这”がより自然であるとされる。

[35]文脈指示用法において、後方指示で“这”が用いられるのは、話者の注意がこれから述べられる部分に集中しているからである(邝萍 2005：140)。

(50) 虽然铃兰屋里的人一个接一个，但松江却总揽不上客。**她这个人**，长得难看脸又黑，像个半老徐娘。她又不梳装打扮，把慈菇般的头发盘在头上。她又驼背，简直像个老婆婆。那一天我亲眼看到她招客遭到拒绝，又招又遭到拒绝。(BCC)

铃兰のところの人は次々と接客をしていったが、松江はいつも客を捕まえられずにいた。**彼女という人**は、見にくくて顔も黒く、年甲斐もなく色気を売りにしているような女のようだった。彼女は身づくろいに気をつかわず、クワイ頭をしていた。彼女はまた猫背で、まるでおばあさんのようだった。その日私は彼女が客引きをして断られ、また客引きをして断られているのを直接見た。

次の例(51)は、杨玉玲 2010 が、「否定的態度・肯定的態度・中立的態度」について述べたときに、三人称代名詞と那が共起した場合について挙げた唯一の例文である。

(51)〔若干年后他回忆说：“我那时候对**他们那些人**仍有偏见，以为他们要杀害我们的家人，夺走我们的家园。〕但是渐渐我发现曼德拉可能天生是个领袖，我开始尊敬他。”(杨玉玲 2010：146) (杨氏は〔　〕内のみを引用しているが、本論文ではより広い文脈で抜き出した。)

〔幾らか年が経ってから彼は回想して述べた:「私は当時彼らに対してまだ偏見を持っていました。彼らは身内を殺して、私達の郷里を奪うのではないかと考えていました。〕しかし、しだいに私はマンデラは天性の指導者かもしれないと気づき、彼を尊敬し始めました。

(51)の例においても、「文脈的要素考慮型」話者は、前方で[対象人物]が話題になっていれば、“这”を使っても構わないと述べる。このように、「文脈的要素考慮型」のインフォーマントは、言語的文脈の差異に非常に敏感で、話者が言語的文脈を指して「三代＋指＋N」を用いていることを意識している場合には、“这”を用いようとする。しかし、「文脈的要素考慮型」のインフォーマントも、それをベースにしているが、他の要素を一切考慮しないわけではない。例えば次の例をみてもらいたい。

(52) 他成了你男朋友了啊，**他{这/那}个人**怎么样？

彼はあなたの彼氏になったんだ、彼ってどういう人？

(53) 他成了你男朋友了啊，<u>他{?这/那}个人</u>我见都不想见。

彼はあなたの彼氏になったんだ、彼、私顔も見たくない。

(52)のように彼に対して特に強烈な感情を抱いていない場合には、“这”、“那”の両方が共に使用可能で、前方文脈に出てきた、その彼を指していることを話者が意識している場合には“这”が用いられると述べる、同じ話者が、(44)になると、たとえ言語的文脈を意識していても、“那”がより自然に感じられると述べられるからである。したがって、話者が言語的文脈を指示する場合には“这”を用いるという基準は、特別に顕著な人間関係的要素によって覆されることがある。「文脈的要素考慮型」のインフォーマントに、話者が前方文脈あらわれた[対象人物]を指していることを意識しながら、かつ C に排他的感情を抱いている場合、どちらが優先されると思うかインタビューしたところ、排他的を抱いている度合による、少し気に食わないなぐらいであれば“这”を用いるが、顔もみたくないほどの排他的感情であれば“那”を用いる、と述べている。つまり、「文脈的要素」の基準は、ときに「人間関係的要素」と対立し、それぞれの程度により互いに拮抗することがある。

また、「文脈的要素考慮型思考」のインフォーマントは、前方文脈に出てきたその人物を指していることを意識すると、文脈的指示により“这”が用いられるが、頭の中にある像を指しているからといって、必ずしも“那”が用いられるわけではないことを認めている。複数のネイティブ話者の感覚によれば、話者の頭の中にあるのがその人物の評価に至る具体像である場合には“这”が、その人物に関する抽象的な全体像である場合には“那”が用いられているようである。

たとえば、下の例文で、話者が前方で話題になっているその人物のことを指しているという意識であれば“这”が用いられるが、特にそのような意識がなく、頭の中にある観念を指しているのであれば下の例(1)は“那”の方がより自然だという。噂に聞いて頭の中で想像している“帅(かっこいい)”というイメージは、具体像ではなく、彼に関する抽象的な全体像だからである。

この点で、史隽 2012 の次の記述はこの形式における一部のケースにしかあてはまらないといえる。史隽 2012 は「『N1＋指示詞＋N2』構造の例文において、指示詞が指示しているのは文に出ている事物ではなく、それと関連のある話し手の頭の中に存在している具

体像である(史隽 2012：54)」と述べた。しかし、この記述は、「代＋指＋N」が、現場にいる[対象人物]でも、言語的文脈に現れた[対象人物]でもなく、話者が頭の中に描いている[対象人物]を指しているときで、かつ“这”で指示するような場合に限られる。たとえば下の例(1)では、話者は具体的なエピソードはおろか、C の顔を思い浮かべることも不可能であり、ある人物がかっこいいという噂を聞いただけであるのに「N1＋指示詞＋N2」の形式の一つである“他那个人”を用いて C を指すことができる。

(1)我没见过他，可听说他那个人很帅。

私は彼に会ったことは無いが、彼という人はとてもかっこいいらしい。

上の例では、話者は頭の中で彼の具体的な顔や姿を浮かべているのではなく、C がかっこいいという抽象的な全体像を浮かべている。そして、そのような場合には“那”が用いられる。したがって、話者の頭の中の[対象人物]の像を指している場合についても、次のような基準が存在していると考えられる。話者が指している頭の中の像が、[対象人物]の具体像の場合には“这”が、[対象人物]の抽象的な全体像である場合には“那”が用いられる。

以上、「文脈的要素考慮型」の場合の、指示詞の選択について見てきた。次は、「人間関係的要素考慮型」のインフォーマントの指示詞選択基準について分析する。

５．３．２．３．２　「人間関係的要素考慮型」話者の場合

ここでは、「人間関係的要素考慮型」の話者の指示詞選択を分析する。「人間関係的要素考慮型」のインフォーマントが指示詞の選択において主に考慮するのは、話者と C との人間関係的要素である。具体的には、話者が C と親交が厚いかどうか、また C を仲間とみなすか部外者とみなすかという点である。その点を見極める手がかりが少ない場合には、その判断材料を話者が[対象人物]に対して述べる評価から得ようとするため、評価内容にも比較的敏感に反応して、指示詞を選択する。たとえば、次のような一組の場面を設定する。

(54)[A は C と面識がない。C は B の友人である。A は、しばしば B から C を称賛する話をきいている。A は B に向かって、C のことを述べる]

A：你很幸福。**他(　)个人**生性欢快、有趣，是个很好的好人。

A：君は幸せ者だ。**彼って**天性が晴れやかで、面白くて、とってもいい人。

(55)[A は C と面識がない。C は B の友人である。A は、しばしば B から C の悪口をきいている。A は B に向かって、C のことを述べる]

A：你很可怜。**他(　)个人**生性阴郁、无趣，是个很不友善的人。

A：君は可哀想だ。**彼って**天性が暗くって、面白味がなくて、愛想が悪い人だ。

「人間関係的要素考慮型」のインフォーマントは、肯定的評価をする(54)では“这”を、否定的評価をする(55)は“那”がより自然だと答える。「人間関係的要素考慮型」ネイティブ話者にインタビューすると、(54)の例で“这”を使用するのは、話者 A は、C を自分たち(A と B)の仲間とみなしているためであり、(55)で“那”を用いるのは、話者 A は、自分と B を仲間とみなし、C を自分たち(A と B)から遠ざけて部外者の人として扱おうとしているため指示詞は“那”がより自然である。

(54)(55)の例では、C は B の友人という設定を行ったが、次に、C は B の夫という設定に変えてみる。

(56)[A は C と面識がない。C は B の夫である。A は、しばしば B から C を称賛する話をきいている。A は B に向かって、C のことを述べる]

A：你很幸福。**他(　)个人**生性欢快、有趣，是个很好的好人。

A：君は幸せ者だ。**彼って**天性が晴れやかで、面白くて、とってもいい人。

この場合、C が B の友人の場合と同様に、多くのネイティブのインフォーマントは、話者 A は、C を自分たち(A と B)の仲間としてみなして“这”を用いる。ただし、あるネイティブ話者によれば、当然友人の場合と同様に A と B と C 共に仲間とみなして“这”を用いることができるが、C が B の夫であるという特別な関係ゆえに、話者 A が、自分は B と C の中には入り込めないと感じて、A が一方、B と C が他方とみなす、つまり話者と受信者の包合方視点に立つのではなく、対立型視点に立つのであれば、指示詞は“那”を用いると述べた。したがって、“那”を使っているからといって、必ずしも、話者が C に対して嫌悪感を抱いているわけではないことがわかる。但し、A が C に否定的感情を抱く場

合と、C を部外者として扱う状況は重なることが多い。否定的感情を抱いているからこそ部外者扱いをするのであり、部外者であるからこそ批判的な噂話をするというわけである。下の(25)(26)(27)はそのような例である。

(25)铁锁也悄悄道:“跟他相跟上，应酬查路的那一伙子倒是有办法，可是他们那些人我实在不想看见！”(CCLM)

鉄鎖は声をひそめて言った。「彼と一緒に行けば、荷物検査係のあの人たちに適当にやってもらう方法があるだろうけど、でも彼らには会いたくない！」

(26)那决不会，我跟他们那些人太不同了，合不起来。(CCLM)
それは絶対にありえない、私は彼らとは違い過ぎる、合いっこない。

(27)一天，他在医院同有关人员的谈话中愤然提到：他们那些人(指“四人帮”)有些事做得太过分了！(CCLM)
ある日、彼は病院で関係者との会話の中で憤然として言及した。「彼ら(「四人組」を指す)はところどころやり方がひどすぎる！」

また、次の例文(57)では、評価内容自体は称賛的な内容ではないが、中国人の筆者が、中国人についている可能性が高いと読みとられ、日本軍隊に対して[対象人物]が部外者ではなく仲間であるので、「人間関係的要素考慮型」話者はこのような場合でも“这”がより自然であると判断する。

(57)他的人数虽然只有二百多号，那可是真能打。只不过因为他们这些人缺乏政治领导，没有明确的战斗方向，又是各怀野心，不能够统一行动，被日本军队各个击破而失败了。(CCLM)
彼の人数は二百余りしかなかったとはいえ、それは実に戦闘力が高かった。ただ彼らが政治的指導を欠き、明確な戦闘目標が無く、更には各自が野心的で、一致した行動ができなかったために、日本軍隊の各個撃破を受け失敗したに過ぎない。

下の例は、特に否定的評価はなされていないが、話者は現代の自分たちと、当時の彼らを対比的に見ているために、“那”が用いられているといえる。

(29) 他们那些人的那种文化使命感和保护文化遗产的这种责任感，现在真的回想起来，他们可能比我们更强烈。(CCLM)
彼らのあの種の文化使命感と文化遺産を守るというこの種の責任感は、今本当に思い返してみると、彼らは私達よりもさらに猛烈だったかもしれない。

「人間関係的要素考慮型」の話者が優先的に考慮する指示詞の選択基準は、他の型の話者に比べると、杨玉玲 2010 が指摘した「肯定・中立・否定的態度」という要素に最も近いと思われるが、それでも単純に「態度」だけで指示詞の選択を説明することは到底できないことがみてとれる。「肯定・中立・否定的態度」は、「三代＋指＋N」の指示詞選択に関わるたくさんの要素のごくごく一部にすぎないため、その要素のみでは説明のできない現象が非常に頻繁に起きているのである。以上、「人間関係的要素考慮型」話者の場合に、第一印象として何が考慮されて指示詞が選択されているのかを述べた。「人間関係的要素考慮型」話者は、C を仲間とみなすか部外者とみなすかという点を主に考慮して指示詞を選択基準とする。

「文脈的要素考慮型」話者の場合、話者が指している頭の中の像が、[対象人物]の具体像の場合には“这”が、[対象人物]の抽象的な全体像である場合には“那”が用いられるという点について前に述べたが、「人間関係的要素考慮型」話者の場合も、これに共通する部分が多いと考えられる。即ち、話者が[対象人物]を仲間とみなして、「三代＋指＋N」の形式で[対象人物]を指す場合、話者は[対象人物]と親密であり、抽象的イメージではなくその人についての評価判断を述べる具体像を持っているはずだからである。

５．３．２．３．３　「基本“那”使用型」話者の場合

少数ではあるものの、もう一つのグループは、「文脈的要素」も「人間関係的要素」も優先的な指示詞選択要素ではなく、まず C が現場にいないという事実によって、ほとんど基本的には“那”を用いることが決まってしまうという話者である。そのような話者は、「文脈的要素考慮型話者」が口をそろえて“这”がより自然である、と述べた(49) (50)の例に

おいても、“那”を使いたいと述べる。その理由は「その場にいないから」である。

(49) 她毫不迟疑地在好几个年轻小伙子的怀里偎坐过，或是到门背后同几个为了她而争风吃醋的人说悄悄话。有时候，这不免让他泄气而又恼火，觉得自己再也不能同她交往了——她这个人太卑劣，太庸俗，太轻率了。(CCLM) (原文は“这”)

それでも、彼女は何の躊いもなしにさまざまな男たちの膝に座ったり、ドアの陰で男たちと囁きあっているのを見た。そして一時は、そんな場面を見たせいで落胆し、また同時に腹がたって、もうあの女とはつきあえない、つきあうものかと思った——安っぽくて、卑俗で、つまらない女なのだから。(宮本陽吉訳 1975：67)

(50) 虽然铃兰屋里的人一个接一个，但松江却总揽不上客。她这个人，长得难看脸又黑，像个半老徐娘。她又不梳装打扮，把慈菇般的头发盘在头上。她又驼背，简直像个老婆婆。那一天我亲眼看到她招客遭到拒绝，又招又遭到拒绝。(BCC)(原文は“这”)

铃兰のところの人は次々と接客をしていったが、松江はいつも客を捕まえられずにいた。彼女という人は、見にくくて顔も黒く、年甲斐もなく色気を売りにしているような女のようだった。彼女は身づくろいに気をつかわず、クワイ頭をしていた。彼女はまた猫背で、まるでおばあさんのようだった。その日私は彼女が客引きをして断られ、また客引きをして断られているのを直接見た。

そして、「基本“那”使用型」話者にとっては、話者が C に対して好意的な感情を持っているかどうかという点も、指示詞選択の決定的要素とはならない。たとえば、下の例は「文脈的要素重視型」「人間関係的要素重視」話者は共に“这”の使用が可能であると述べている例であるが、「基本“那”使用型」話者の場合、この(28)においても“那”を用いたいと述べる。

(28) “小曹，听说康生同志借了几幅不错的明清山水画，不知还了没有？恩来说，想借来看看呢。他那个人，别看忙，也喜欢看画，真的，看一幅好画，也是一种不错的享受呢！” (CCLM)

「曹くん、康生くんは明清代の山水画を借りていたが、返したかどうか知らない？恩来が、借りてちょっと見たいそうなんだ。**彼って**、忙しいけれど、絵を見るのも好きなんだ、本当、一幅の良い絵を見るというのも、一種のすばらしい楽しみだね！」

「基本“那”使用型」話者の一人は、C が発話現場にいない場合の数十にわたる様々な例文の中で、唯一的に“这”の方がより自然だとしたのは、次の例であった。

(57)他的人数虽然只有二百多号，那可是真能打。只不过因为**他们这些人**缺乏政治领导，没有明确的战斗方向，又是各怀野心，不能够统一行动，被日本军队各个击破而失败了。(CCLM)
彼の人数は二百余りしかなかったとはいえ、それは実に戦闘力が高かった。ただ**彼ら**が政治的指導を欠き、明確な戦闘目標が無く、更には各自が野心的で、一致した行動ができなかったために、日本軍隊の各個撃破を受け失敗したに過ぎない。

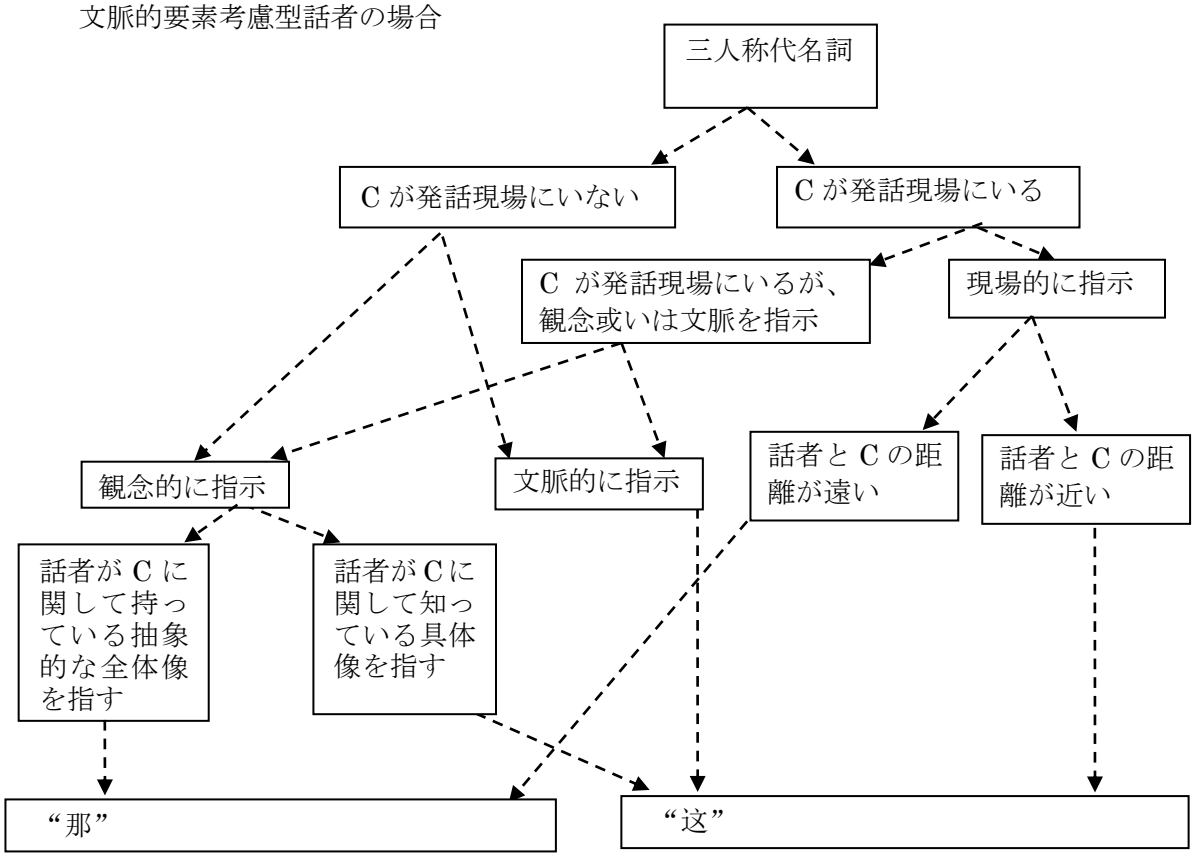
(57)が、なぜ“这”の方が自然と判定したかについて、そのインフォーマントは、[対象人物]が単数の場合は、その人が発話現場にいるのかどうかの方が大事であるが、このように複数(特にこの例では[対象人物]が 200 人余り)であるために、具体的に指し示すことが難しく、またその人たちが現場にいないことは容易に想像ができる。そのような言語環境が整っているので、ここでは[対象人物]が現場にいないことよりも、[対象人物]が自分たちの仲間なのか、それとも部外者なのかという点の方が指示詞選択に重要になる。この例文では、中国人が書いている文章であるので、[対象人物]が自分たちの仲間であることを表す“这”の方がふさわしい、とのことである。

したがって、一部の話者は、発話現場にいないということを示すことが、指示詞選択において、非常に重要な位置を閉めており、そのことが確実に受信者に伝わることが特に明らかな場合以外は、文脈的要素や人間関係的要素はほとんど考慮されることなく、基本的には“那”を用いるという語感を持っている。

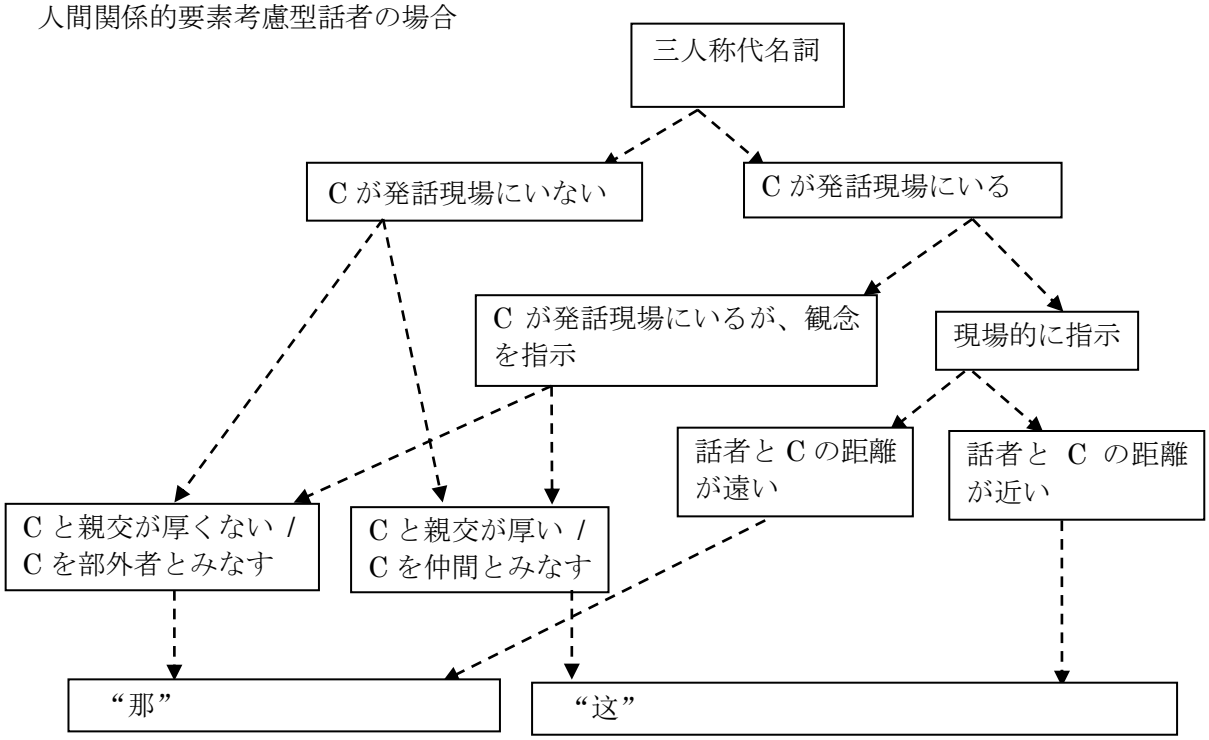
５．３．２．４　三人称代名詞の場合の指示詞選択

以下に、「文脈的要素考慮型」、「人間関係的要素考慮型」、「基本“那”使用型」に分けて、それぞれの話者の指示詞の選択基準を以下の図に記す。本文の中でも述べたように、それぞれの型の話者は、それぞれ第一印象として以下のような点を考慮するが、他の要素で非常に強烈なものがあるときは、それが考慮されることがある。

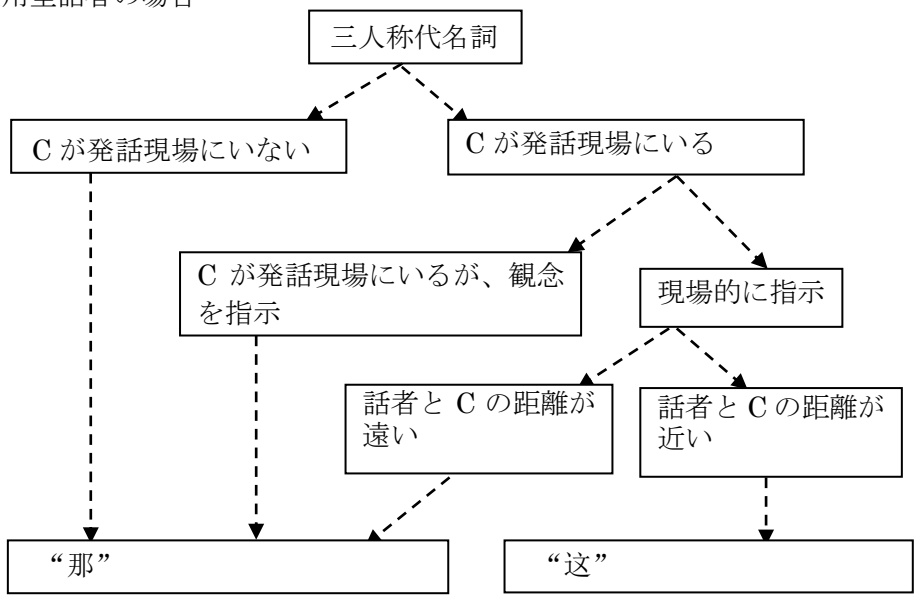
文脈的要素考慮型話者の場合



人間関係的要素考慮型話者の場合



基本“那”使用型話者の場合



５．３．２．５　考察

上で見てきたように、「三代＋指＋N」の形式における指示詞の選択は、同一の話者の中ではかなり系統だって行われているが、C が発話現場にいない場合、また C が発話現場にいたとしても現場的指示を行わない場合には、特に何に注目して指示詞選択を行うのかが話者によって異なっていた。ここではなぜそのような違いがあるのか、またそれぞれタイプの話者の共通するところは何かを考察する。指示詞の最も重要な役割は、受信者を間違いなく指示対象へと導くことである。指示詞は、その役割を果たして初めて指示対象に関する他の付随的な情報を示すのに用いてよい。その点で、「基本“那”使用型」話者は、C が発話現場にいないという点を表現しておくことを非常に重要視し、それを明示しなければ、受信者に誤解を招くのではないかという考えが他の型の話者に比べて強いと言える。このような語感を持つ話者が実際に存在するということを中国語学習者が知っていることは有益である。なぜならば、杨玉玲 2010 は、「どうやら、“那＋X”で再度指示するときは一般にその前の“他/他们”に否定的態度をとっており、心理的距離の遠さを表現している……ようである(杨玉玲 2010：145)」と述べたが、その先行研究を鵜呑みにしてしまうと、中国人話者が誰かのことを“他那个人”のように言ったのを聞いたとき、話者はただ発話場にいないということを示そうとしたにすぎないのに、否定的態度をとっている可能性が高い、と誤解してしまうかもしれないからである。また、これらのタイプの異なる話者が

存在するために、ある特定の場面で用いる指示詞に、個々の話者によって判断が異なることがあることも理解でき、また、なぜ、“这”が用いられている場合には、肯定・中立・否定的態度のいずれもあり得るのかが理解できる。話者が C についてとる態度というのは、この形式において指示詞選択に影響し得る数多くの要素の中の限られた一部の要素でしかないからである。

一方、「文脈的要素考慮型」、「人間関係的要素考慮型」話者は、「三代＋指＋N」の指示詞を選択するのに、それぞれ文脈的要素、人間関係的要素に敏感であった。これらのタイプの話者は、おそらく、C が発話現場にいないことは既に受信者に誤解されることなく明らかであるとみなす過程が「基本“那”使用型」話者よりも早い段階でなされると考えられる。そのため、[対象人物]の特定という役割よりも、[対象人物]がさきほど述べたその人物であることを強調して[対象人物]にまつわる情報に注意を促したり、話者と C との人間関係を表したりという、[対象人物]についての更なる情報を表現する役割を指示詞に担わせるのである。

しかしどのタイプの話者にも共通していることは、まず受信者を確実に誤解なく[対象人物]に導くことを第一目標としていることである。それは、現場的指示においては、指示詞の使い分けが何を示すのか、複数の[対象人物]との距離を示すのか、それとも発話現場にいるのが複数の[対象人物]のメンバーのうち全員なのか一部なのかを示すのか、といった点は、どのタイプの話者も同じであるからであることからもわかる。そして、どのタイプの話者も、受信者を誤解なく[対象人物]に導くというという点が成し遂げられるまでは、指示詞を[対象人物]に関する付随的な情報を示すために用いることはしない、という点も共通している。

５．３．３　結論

以上、「代＋指＋N」という形式において、代名詞と後方の成分が同格関係にある場合の指示詞選択を分析した。

代名詞が一人称と二人称の場合には、代名詞が単数であれば、指示詞は“这”が選択される。

複数の一人称代名詞の場合、[対象人物]が発話現場に全員いれば“这”が選択される。発話現場にいるのが[対象人物]の一部である場合、先行文脈により、[対象人物]が誰を指す

のかが明確で、話者は前方の言語的文脈で話題になったその対象を指していることを意識している場合には“这”が選択される。先行文脈からは[対象人物]が誰を指すのかが不明確なとき、[対象人物]のうち、発話現場にいる人のことを重視し、発話現場にいない人のことについては意識しない場合には“这”が、[対象人物]には発話現場にいない人が含まれることを明示する場合には“那”が選択される。

複数の二人称代名詞の場合、[対象人物]に受信者を含まない場合には“那”が選択される。[対象人物]が全員受信者となっている場合には“这”が選択される。受信者となっているのが[対象人物]の一部である場合、先行文脈により、[対象人物]が誰を指すのかが明確で、話者は前方の言語的文脈で話題になったその対象を指していることを意識している場合には“这”が選択される。先行文脈からは[対象人物]が誰を指すのかが不明確なとき、[対象人物]のうち、受信者となっている人のことを重視し、受信者となっていない人のことについては意識しない場合には“这”が、[対象人物]には受信者となっていない人が含まれることを明示する場合には“那”が選択される。

一人称代名詞と二人称代名詞に関しては、複数の二人称代名詞の場合の、一つのグループと対比させてもう一つのグループを指し示すという対比的用法を除けば、話者と発話現場にいる[対象人物]との物理的距離は指示詞の選択基準とはならない。

三人称代名詞の場合、まず「三代＋指＋N」という形式を用いる語用論的制約を満たす必要がある。その上で、[対象人物]を現場的に指示する場合には、基本的には指示詞は[対象人物]が話者から遠ければ“那”が、近ければ“这”が選択される。ただし、至近距離に[対象人物]がいる場合でも、意図的に[対象人物]をその場にいないものとして扱う場合があり、その場合には“那”が用いられる。

「三代＋指＋N」という形式で[対象人物]を非現場的に指示する場合の選択基準は、話者の語感により主に 3 つの思考タイプに分けられる。

「文脈的要素考慮型」の話者は、言語的文脈に現れた[対象人物]を指す場合には“这”を用いようとする。したがって、このタイプの話者は、文脈的要素の差異に敏感で、前方文脈で[対象人物]について詳細な描写があれば、“这”の使用をより自然に感じる傾向を持っている。文脈に登場した[対象人物]を指しておらず、頭の中にある[対象人物]を指しているとき、頭の中の像が[対象人物]に関する具体像である場合には“这”が、頭の中の像が[対象人物]の抽象的な全体像であるときには“那”が用いられる。ただし、このタイプの話者は、第一直感的に文脈的要素を考慮するが、それと拮抗する人間関係的要素別の要素(たと

えば C を部外者とみなす等)があれば、程度により、文脈的要素による指示詞選択をキャンセルして人間関係的要素によって指示詞を選択することもある。

「人間関係的要素考慮型」の話者は、主に話者が[対象人物]と親交が厚いかどうか、また[対象人物]を仲間とみなすか部外者とみなすか、という視点から指示詞を選択しようとする。このタイプの話者は、話者と[対象人物]の関係を示唆する要素に敏感で、上記の点を見極める判断材料が少ない場合には、話者が[対象人物]に対して述べている評価から人間関係の根拠を得ようとする。したがって、肯定的評価を述べている場合には話者は[対象人物]を仲間として扱っているとみなし“这”を、否定的評価を述べている場合には部外者として扱っているとみなし“那”をより自然に感じることが多いが、肯定的評価や否定的評価に関わらず、話者と[対象人物]の関係がはっきりしている場合には、その関係に基づき指示詞を選択する。たとえば、否定的な評価を述べていても、[対象人物]が明らかに話者の側の人物であれば“这”を用いる。

「基本“那”使用型」の話者は、主に[対象人物]が現場にいるのかいないのかという点が最も重要で、多くの場合文脈的要素や人間関係的要素によってほとんど左右されることなく、[対象人物]が発話現場にいなければほぼ一律に“那”を用いようとする。

このように考えると、杨玉玲 2010 の指摘した、肯定・中立・否定的態度という要素は、「三代＋指＋N」の形式の指示詞を選択する上でネイティブ話者が考慮し得る様々な要素のうちの、限られた一部の要素にしかすぎなかったということがわかる。そのため、肯定・中立・否定的態度という基準だけでは説明できない事例が多く存在したのである。また、先行研究では、「三代＋指＋N」の形式における指示詞の使い分けに注目したものはほとんどなかったことから、現場的要素、文脈的要素、観念的要素の全ての側面を考慮した上で、ネイティブ話者が何を考えて指示詞を選択しようとし、またネイティブ話者によって異なる意見が出ることがあるのはなぜなのかを明らかにしたのは本研究が初めてであると思われる。特に、非現場的指示における指示詞の選択基準については、特定の例文にインフォーマント全員の判定を重ねて見ていたときには、基準を一般化するのが難しく思われたが、一人一人に詳細にインタビューをしていくうちに、アンケートからは見えてこなかったネイティブ話者の思考が幾つかのパターンに分類されることが見えてきた。そして、特定の例文の全ネイティブの判定を横断的に観察した場合には一致していないように思えるものの、一人の話者があらゆる例文に対して下す判断は基本的に系統だって行われているということを発見し、本論文ではその思考の型を記述し、整理した。

６．　まとめ

６．１　本論文から得られた指示詞選択基準

本論文の 2 章で既に述べていた指示詞の選択基準に加え、第 3 章、及び第 4 章における考察から、更に以下のような指示詞の選択基準が得られた。

[指示対象が相手の発言の場合]

(i)話者が相手の発言内容を重視している程度が相手と同じほどかそれ以上に高いことを示す場合、また話者が自分の相対的重視度の低さをわざわざ示す必要の無い場合は“这”を用いる。

(j)話者が指示対象を相手ほど重視していないことをはっきり示す場合には“那”を用いる。

[指示対象が自分の発言内容である場合]

(k)単独用法の指示詞では、受信者が指示対象に対して抱く考えを、話者が想定済みであることを明示的に表現しながら指示するときは“那”を用いる。

(l)単独用法の指示詞では、受信者が指示対象に対して抱く考えを、話者が想定済みであることを表現する意図が特に無く指示を行う場合には“这”を用いる。

６．２　指示詞選択基準の優先順位

６．２．１　前方指示用法における指示詞選択

第 3 章と第 4 章における研究成果によって得られた選択基準(i)(j)(k)(l)と、小野 2013 で既に選択基準として妥当であると結論付けられ、本論文の２．１で紹介した図表 1 の前方指示より下側の部分に関わる指示詞の選択基準として指摘されていた以下の選択基準(e)(f)(h)のうち、複数の基準が関わり合い、かつそれぞれの基準が主張する指示詞が対立するときには、どの基準がより高い優先度をもって指示詞の選択が行われているのかについて調べていく。

(e)話者が指示対象に組み込まれることを示そうとする場合は“这”を用いる[36]。

(f)話者が指示対象との関係を否定し、距離を置く場合は“那”を用いる。

(h)指示対象が話題成分としての地位が確立していない場合“那”を用いる。

まず、指示対象が相手の発言内容である場合に関わる基準について考える。指示対象が相手の発言内容である場合には、(h)の「指示対象が話題成文としての地位を確立しているか否か」はまず問題でなくなる。また、指示対象が相手の発言内容であれば、そもそも相手の考えを指しているので、(k)(l)の「受信者が指示対象に対して抱く考えを、話者が想定済みであることを明示的に表現するかどうか」という基準によって指示詞を選択するというのも意味をなさない。したがって、検討すべきは、(e)(f)の話者が指示対象に組み込まれることを示すか否かという対立と、(i)(j)の指示対象に対する相対的重視度という対立に基づく指示詞選択基準の優先度である。

指示詞選択基準 (指示対象が相手の発言内容)	(e)話者が指示対象に組み込まれることを示そうとする場合は“这”を用いる	(i)指示対象に対する自分の相対的重視度が低いことを示さない場合は“这”を用いる
(f)話者が指示対象との関係を否定し、距離を置く場合は“那”を用いる		I
(j)話者が指示対象を相手ほど重視していないことをはっきり示す場合には“那”を用いる	II	

Ⅰ． 基準(e) 話者が指示対象に組み込まれることを示そうとする場合は“这”を用いる VS 基準(j) 話者が指示対象を相手ほど重視していないことをはっきり示す場合には“那”を用いる

[36] (e)(f)の具体的な内容については、本論文の 2 章、主に 2.4.2.2.2 から 2.4.2.2.6 を参照されたい。

規準(e)と(j)が対立する状況が現実に存在するかどうかを考えてみる。「話者が指示対象に組み込まれることを示す」とは、基本的には話者が指示対象と関係があることを示すという意味であり、指示対象が話者に影響を及ぼすこと、指示対象を自分が取り組まなければならない事柄として真剣に考慮していること等を示そうとしていることであるので、指示対象に組み込まれることを示すとしていると同時に、話者が指示対象を相手ほど重視していないことをはっきり示すということは両立しない。したがって、基準(e)と(j)の対立が問題になる状況は存在しない。

Ⅱ．基準(f) 話者が指示対象との関係を否定し、距離を置く場合は“那”を用いる VS 基準(i) 相手の発言内容を自分が相手と同じかそれ以上に重視していることを示す場合、及び自分の相対的重視度の低さをわざわざ示す必要の無い場合には“这”を用いる

規則(f)と(i)が対立する状況が現実に存在するかどうかを考えてみる。「話者が指示対象と距離を置く」とは、基本的に話者が指示対象と関係が無いことを示そうとしていることを意味し、指示対象が話者に影響を及ぼさないこと、話者が指示対象について真剣に考慮するつもりが無いこと等を示そうとしていることが含まれるので、話者が指示対象と距離を置くと同時に、指示対象を相手と同じかそれ以上に重視していることを示すことは両立しない。

したがって、Ⅰ、Ⅱより、指示対象が相手の発言内容である場合、相対的重視度を考慮して指示詞を選択すれば、必然的に、話者が指示対象に組み込まれることを示そうとしているか否かに基づく基準にもかなうものになり、対立が問題になる状況は存在しない。

次に、指示対対象が自分の発言内容である場合について考えてみる。指示対象が自分の発言内容である場合、検討すべきは、(e)(f)の「話者が指示対象に組み込まれることを示そうとするか否か」の対立、(k)(l)の「単独用法の指示詞では、受信者が指示対象に対して抱く考えを、話者が想定済みであることを明示的に表現しようとするか否か」の対立、(h)の「指示対象が話題成分としての地位が確立していない場合“那”を用いる」という規則である。

指示詞選択規則 (指示対象が自分の発言内容)	(e)話者が指示対象に組み込まれることを示そうとする場合は“这”を用いる	(l)単独用法の指示詞では、受信者が指示対象に対して抱く考えを、話者が想定済みであることを表現する意図が特に無く指示を行う場合には“这”を用いる。
(f)話者が指示対象との関係を否定し、距離を置く場合は“那”を用いる		Ⅲ
(k)単独用法の指示詞では、受信者が指示対象に対して抱く考えを、話者が想定済みであることを明示的に表現しながら指示するときは“那”を用いる。	Ⅳ	
(h)指示対象が話題成分としての地位が確立していない場合“那”を用いる	Ⅴ	Ⅵ

Ⅲ．基準(f)話者が指示対象との関係を否定し、距離を置く場合は“那”を用いる　VS
基準(l)単独用法の指示詞では、受信者が指示対象に対して抱く考えを、話者が想定済みであることを表現する意図が特に無く指示を行う場合には“这”を用いる。

基準(f)と(l)に対立が生じる場合について考えてみる。

(1)（年上の女性教師が、問題を起こした年下の女性教師を激しく責め立てている場面。）
あなたのせいで、あたくしたちが、少なからず迷惑を被っているということ、そのことだけは、どうぞお忘れにならないように。(父親の意思に背いて)あなたがおやめに

ならないのは(φ)勝手だけれど、でも、あなたに出来ることといったら、一日中職員室にいることぐらいじゃないですか?(*魔女の条件*、(　)内筆者挿入)

因为你的关系，给我们增添了莫大的麻烦。这件事请你不要忘记。你不听从你父亲的意思。那是你的自由，但是如果说有什么事你可以做的话，那就是一整天都待在职员室里。(《魔女的条件》)

この例では、「あなたがおやめにならないのは勝手」すなわち、話者が自分には関係が無いことを強烈に示していると同時に、受信者が指示対象について抱く考えを、話者の方で想定済みであることを表現する意図があるとは考えられない場面である。そこでは、"那"が用いられている。したがって、この例では、(f)と(l)が対立しているが、(f)の基準が優先ていることがわかる。もう一つ別の例を見てみる。

(2)Imagine that one day you are out for a walk in the woods. Suddenly you see a small spaceship on the path in front of you. A tiny Martian climbs out of the spaceship and stands on the ground looking up at you . . .

What would you think? Never mind, it's not important. But have you ever given any thought to the fact that you are a Martian yourself? (*Sophie's World*) (Translated by Paulette Mφller1996：16)

请你想象，有一天你去树林里散步。突然间你看到前面的路上有一艘小小的太空船，有一个很小的火星人从船舱里爬出来，站在路上抬头看着你……

你会怎么想？算了，这并不重要。但你是否曾经想过你自己也是个火星人？(*苏菲的世界*、萧宝森(译)1995：17)

さあ、想像してみて。ソフィーは森を散歩しています。突然、行く手に小さな宇宙船を見つけます。宇宙船の上には一人の小さな火星人がよじ登って、ソフィーをじっと見降ろしている……。

さあ、そんな時、ソフィーなら何を考えるだろう。まぁ、それはどうでもいいとして。でも、自分を異星人のように感じたことはない？(池田香代子訳 1995：28、上の日本語訳において、「じっと見降ろしている」の部分は、英語訳及び中国語訳からすると「地面に立って見上げている」の意味と思われ、他の部分も英語や中国語訳と正確には一致しない部分があるが、原文ママ載せている)

(2)の例は、前方で受信者に向けて疑問を投げかけつつも、すぐにその後で“算了(Never mind)”と述べ、受信者がこの質問をそれ以上深く考えないようにさせているため、話者が指示対象に対する受信者の考えを想定していることを表現しながら指示しているとは考えにくい。同時に、“并不重要(どうでもいい)”と述べて、指示対象について真剣に考える必要はないことを示している、すなわち指示対象と距離を置いている。そしてそこでは、“这”が用いられている。したがって、この例では、(f)と(l)が対立しているが、(f)の基準が優先されていることがわかる。

このことから、(f)と(l)が対立した場合、どちらが優先されるかは、話者が(f)と(l)のどちらのニュアンスを表現したいかによって選ばれるのであって、基準そのものに優先度があるわけではないことが伺える。(1)では、指示対象に対し、“是你的自由(あなたの勝手である)”と述べているように、指示対象との関係を否定し、突き放す態度を表現することがより重要であり、それに比べると受信者が指示対象に対して抱く考えを特に想定していないことを示すことは重要ではないために、(l)の基準が優先されている。逆に(2)では、“并不重要(どうでもいい)”と述べて指示対象について真剣に考える必要がないことを示しているものの、(1)ほど強烈に指示対象と距離を置くという態度は見られず、どちらかというと、“算了(Never mind)”と述べて、相手が指示対象について深く考えようとするのを阻んでいるように、受信者が指示対象(この場合は疑問文)にどのような答えを出すかを踏まえた上で続く部分を話そうとしているわけではなく、受信者の考えとは関係なく自分の述べたいことを述べようとしていることを示すことに重きが置かれているために、(f)の基準が優先されている。このように、(f)と(l)が対立する場合には、話者がより伝えたいことは何かによって指示詞は選ばれる。

Ⅳ. 基準(e)話者が指示対象に組み込まれることを示そうとする場合は“这”を用いる　VS (k)単独用法の指示詞では、受信者が指示対象に対して抱く考えを、話者が想定済みであることを明示的に表現しながら指示するときは“那”を用いる。

(3)亲爱的席德：

我现在内心满溢有关你生日的秘密，以致我一天里不得不好几次克制自己不要打电话回家，以免把事件搞砸了。{?这/那}是一件会愈长愈大的事物。而你也知道，当一个东西愈

长愈大，你就愈来愈难隐藏它了。(*苏菲的世界*、萧宝森(译)1995：158)

愛するヒルデ!

きみの誕生日のための秘密の計画で、わたしははちきれそうだ。一日に何度もたいへんな努力をして、電話をかけてなにもかもぶちまけてしまいたくなるのをぐっとこらえている。この思いは毎日ますますふくらむばかりだ。何かがどんどん大きくなると、自分の胸一つにしまっておけなくなるってこと、わかるだろう？(池田香代子訳1995：190)

この例では、指示対象である、ヒルデのための秘密の計画で、話者自身がはちきれそうだ、と述べている通り、明らかに指示対象は話者に関係しており、影響を及ぼしている。つまり、話者が指示対象に組み込まれていることを示している。しかし、同時に、その「秘密の計画」が一体何なのか、当然受信者であるヒルデが知りたくなるということを想定して書いていることも読み取れる。そして指示詞は“那”が使われている。したがって、(e)と(k)が対立した場合、(k)の規則の方が優先される。

Ⅴ．基準(e)話者が指示対象に組み込まれることを示そうといする場合は“这”を用いる
VS
基準(h)指示対象が話題成分としての地位が確立していない場合“那”を用いる

この対立は、小野 2013 で既に検討されており、(e)(h)が対立した場合は、(h)の規則の方が優先されるという結論が出されている(小野 2013：74)。

Ⅵ．基準(h)指示対象が話題成分としての地位が確立していない場合“那”を用いる VS 基準(I)単独用法の指示詞では、受信者が指示対象に対して抱く考えを、話者が想定済みであることを表現する意図が特に無く指示を行う場合には“这”を用いる。

筆者の知る限り、話題成分としての地位が確立していない指示対象を単独の指示詞で指す例は未だに見ない。丁启阵 2003 は何を話題成分として認め、何を非話題成分とみなすのかについて、定義を述べていないが、非話題成分の例として挙げられている下の例では、

指示詞は単独用法で用いられている。(例文番号は原文のまま記している。)

(25)如果把这悖理的不孝之子描绘出来，让它和父母的养育之恩形成鲜明的对比，给予鞭挞，而不像现在的结构，四个子女个个孝顺。(当然也写了罗西的不孝顺，但**那**毕竟是副线，并且是儿媳)(丁启阵 2003：30)

もしこの理にもとる親不孝な子を描写するなら、それと父母の養育の恩がはっきりしたコントラストをなすようにし、鞭撻を与え、今の構成のような、四人の子どもがそれぞれ親孝行である、というようにはしない。(当然ロッシの親不孝についても書いたが、**それ**は結局は副次的な話の筋であり、かつ息子の妻である。)

丁启阵 2003 は上の例について次のように解説している。

例(25)中括号里的“也写了罗西的不孝顺”,是作为话题之外的一种插进说明,本身并没有成为话题，所以用“那”指代。

例(25)の括弧の中の“也写了罗西的不孝顺”は、話題の外の一種の挿入の説明であり、それ自身は話題とはなっていないために“那”を用いて代用指示している。

しかし、上の例のように、一度はっきりと前方文脈で提起された指示対象を、あるものは話題成分とし、あるものは非話題成分として扱い、それによって指示詞を決定するという方法を本研究はとらない。なぜならば、そのようにするなら、話題成分と非話題成分の境界が曖昧に過ぎるからである。なお、上の例で“那”が用いられる理由については、もし話者が、受信者から「ロッシの親不孝についても書いていたが、それはどうなのか」という指摘を受けることを想定して述べているのであれば、(k)「受信者が指示対象に抱く考えを想定済みであることを示す場合は“那”を用いる」という基準で説明でき、特にそのような想定をせず、単に自分の述べたい補足情報を述べているのであれば、“毕竟是副线(結局は副次的な話の筋である)”という言葉から、話者が指示対象について真剣に考慮していくつもりが無いことを示していることが分かるので、(f)「話者が指示対象に距離を置く場合は“那”を用いる」という基準から説明がつく。

上で得られた結果をまとめると以下のようになる。ますの中に記されている基準の記号は、一対一で突き合わせて基準を比較したときに、優先度が高かった規則である。

指示詞選択基準 (指示対象が相手の発言内容)	(e)話者が指示対象に組み込まれることを示そうとする場合は“这”を用いる	(i)指示対象に対する自分の相対的重視度が低いことを示さない場合は“这”を用いる
(f)話者が指示対象との関係を否定し、距離を置く場合は“那”を用いる		I 対立が問題になる状況が存在しない
(j)話者が指示対象を相手ほど重視していないことをはっきり示す場合には“那”を用いる	II 対立が問題になる状況が存在しない	

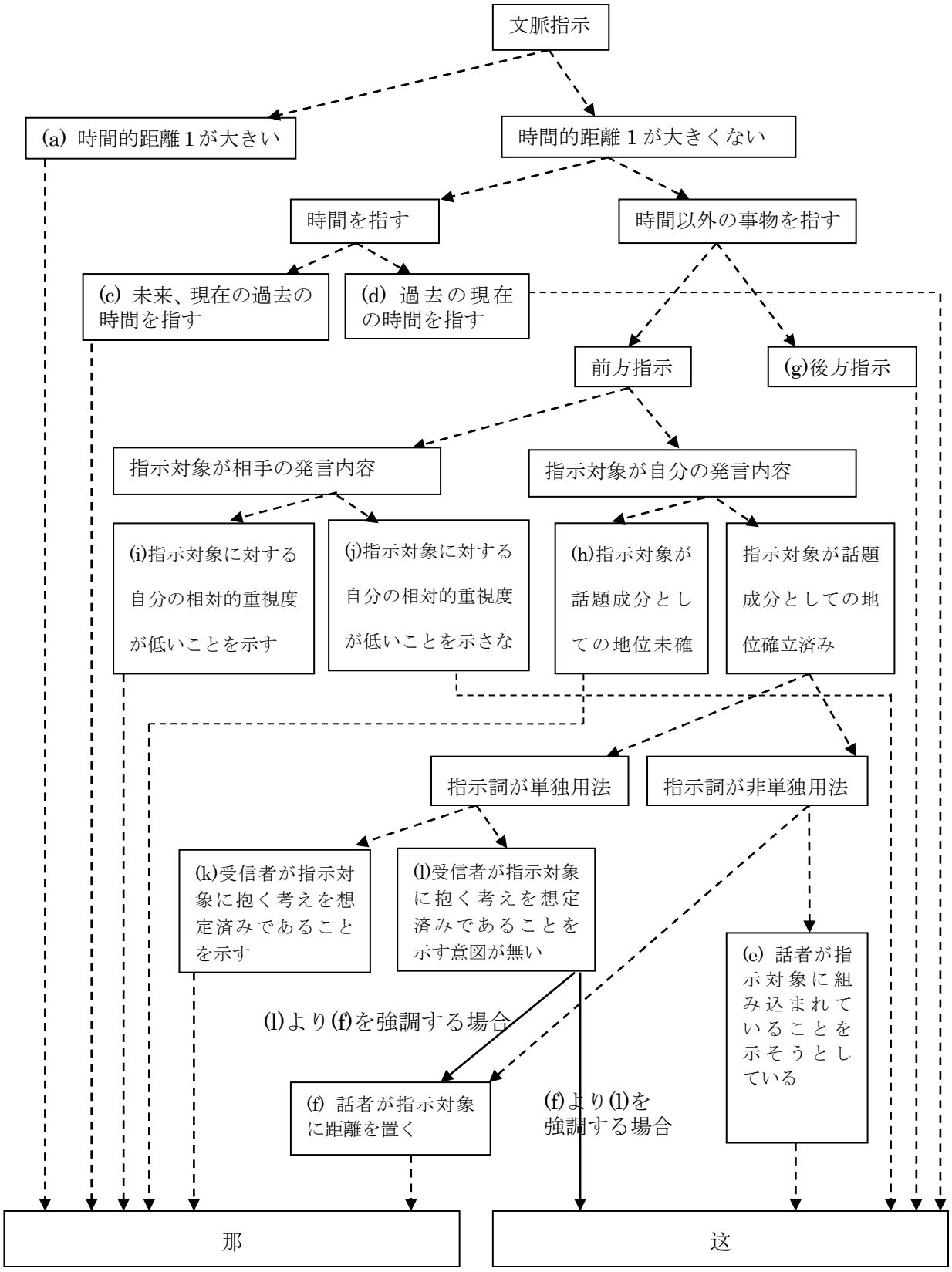
指示詞選択規則 (指示対象が自分の発言内容)	(e)話者が指示対象に組み込まれることを示そうとする場合は“这”を用いる	(l)単独用法の指示詞では、受信者が指示対象に対して抱く考えを、話者が想定済みであることを表現する意図が特に無く指示を行う場合には“这”を用いる。
(f)話者が指示対象との関係を否定し、距離を置く場合は“那”を用いる		III 話者がどちらのニュアンスを伝えたいかで場合による (f)＝(l)
(k)単独用法の指示詞では、受信者が指示対象に対して抱く考えを、話者が想定済みであることを明示的に表現しながら指示するときは“那”を用いる。	IV (k)	
(h)指示対象が話題成分としての地位が確立していない場合“那”を用いる	V (h)	VI 事例無し

本節では、指示詞選択基準の優先順位を探るため、(e) (f) (h) (i) (j) (k) (l)の基準が対立する場合があるか、対立する場合はどの規則が優先されて指示詞が選択されているのかを実際の例を通して観察した。そして、次のような結果を得た。

e>k、h>e(優先度がより高い＞優先度がより低い)、 f＝l(選択基準自体には優劣が無く、話者がどちらの意図を伝えたいかで選ばれる)

本章で得られた前方指示用法における指示詞の選択基準の優先順位と、これまでに得られてきた研究結果を合わせ、中国語の文脈指示用法における指示詞選択を二分法で示してまとめると次の図のようになる。

６．２．２文脈指示用法における指示詞選択の全体像



６．３　文脈指示、現場指示、観念指示用法の関係と中国語の指示詞の特徴

純然たる文脈的指示と、他の用法の指示が可能な状況における文脈的指示とでは、指示詞の選択にどのような違いがあるのだろうか。ここでは、本論文で見てきた純然たる文脈指示用法における指示詞選択と、「代＋指＋N」という形式における指示詞選択を通して分析した、文脈指示用法・現場指示用法・観念指示用法の全ての要素が重なったときの指示詞選択を比較し、中国語の指示詞選択の特徴を述べる。第 2 章から第 4 章で主に見てきたように、純然たる文脈指示の場合には、非常に多くの要素が関わって指示詞は選択されてきた。ところが、ひとたび文脈的・現場的・観念的指示が関わり合う状況が生じると、どの用法を採用して対象を指示するのかが重要になり、採用する用法が決定した後の指示詞の選択は非常に単純化されると言える。特に、文脈的指示、現場的指示、観念的指示のうち、言語的文脈で話題になった対象を指示することが重要であると話者が捉え、文脈的指示を採用すると、その時点で指示詞は“这”が用いられることが決定し、それ以降複雑な指示詞選択は行われない。

この現象から、中国語の指示詞には本質的に次のような特徴があると考えられる。指示詞は、指示詞が持つ根本的な機能である、受信者を指示対象へと確実に導くという機能を果たす点で不可欠な役割を果している場合、たとえば指示対象の候補となり得るものが複数あり、受信者は指示詞を頼りにしなければ対象をはっきりと理解できないときには、指示詞によって表す意味を、物理的な遠近に近い、より初歩的な意味に限定する。一方、言語環境によって、指示対象が明白で、受信者を指示対象へと間違いなく導くという面での指示詞の負担が少なくなるにつれて、指示詞は指示対象に対する付加的な情報、すなわち指示対象に対する話者の見方や関係性といった、より高度な意味を表すものへと機能を変化させる。

７．　むすびに

７．１　本論文の研究成果の意義

本論文では、前方指示用法について、自分の発言内容を指示する場合と、相手の発言内容を指示する場合とにわけ、それぞれにおいて指示詞がどのように使い分けられているのかを検討してきた。先行研究では、指示詞の選択に関わる要素として、ありとあらゆる対立が取り上げられてきた。それらの先行研究の多くは、指示詞選択に関わると予想される対立の一部を取り上げてはいるものの、他の要素との関わりや、また他の基準によれば他方の指示詞が選択されるような場面では、どの基準が優先されるのかについてはほとんど議論されてこなかった。本論文では、それらの先行研究で指摘されてきた選択基準と、更に本研究で明らかになった基準とを、部分的にではなく包括的に扱い、また、それぞれの選択基準によって選ばれるはずの指示詞が異なるとき、どの基準がより優先度が高いのかを一つ一つ検討して示したという点で、これまでにはない研究であると言える。

また、本論文は、文脈指示用法における前方指示を出発点としながら、第 5 章では、文脈的指示、現場的指示、観念的指示の全ての要素を考慮した上で、中国語の指示用法全体からの視点で文脈指示を見ることもした。6.3 で述べたように、同じく言語的文脈を指示する場合であっても、純粋な文脈指示における指示詞選択と、文脈指示のみならず、現場指示と観念指示が同時に可能な場合における指示詞選択とでは何が違うのかを検討した。

そして、中国語の指示詞の本質的特徴として、受信者を確実に指示対象に導くという責任が指示詞にどれほど課せられているのか、その度合によって、指示詞に表現させる意味が、初歩的なものから高度なものまで多様に変化する。言語環境に、指示対象となりえる事物が多く、指示対象の同定が指示詞に大きくかかっているときには、指示詞は物理的な遠近により近い初歩的な意味だけを示すのに対し、指示詞が指示対象の同定に大きな責任を持たない言語環境では、たとえば、第 4 章でみたように、指示対象に対する受信者の考えを想定していることを示すような、高度な意味まで表すことができるようになる。中国語の指示詞にはこのような特徴があるのである。

このように、本論文は、特に非母語話者にとって単純な遠近からは推測が困難な点を重点的に、中国語の文脈指示用法を広く深く検討して全体像を示しつつ、更に中国語の文脈指示用法が、現場指示や観念指示という他の用法と関わったときにはどのようなふるまい

をするのかまでを扱っており、このような研究はこれまでになかったといえる。

７．２　今後の課題

本論文では、中国語における指示詞の選択基準を扱ったが、いつか英語のネイティブ話者のインフォーマントを十分に確保できる状況に身をおくことができたら、日本語と英語と中国語の本格的な対照研究を行うことができたら、どんなにおもしろいだとうかと想像せずにはいられない。筆者は、博士後期課程在学中に、学会で「中国語の文脈指示用法における指示詞の使い分けに相当する英語表現」というテーマで研究発表を行った。その内容は簡単に述べれば、談話において相手の述べた事柄を指示する場合の文脈指示用法について言えば、中国語では指示詞“这”と“那”の使い分けによって区別されて表現される話者の心理過程は、英語では、“it”と “that”の使い分けによってかなりの程度区別されて表現されている、というものである。

中国語では、指すものが相手の発言であっても近称指示詞“这”と遠称指示詞“那”のどちらもが用いられる可能性を持っており、そのどちらで指すかによって話者の異なる意図が豊かに表現されている。ところが、英語では相手の発言を“that”で、自分の発言を“this”で指す傾向がある(Halliday and Hasan 1976：60)ため、指すものが相手の発言である時点で、指示詞“this/that”のうち、“this”が選択される場合が圧倒的に少なくなる。よって、相手の発言を指示する場合において、中国語の指示詞 “这/那”の使い分けが英語の指示詞“this/that”の使い分けと平行的であるとはもはや言い難い。

たとえば、相手を安心させる場面における指示表現について考えてみると、3.5 でみたように、中国語の場合には、相手の発言を受けて「それは心配いらない」と相手を慰める場合、相手が問題としている事柄を“这”で指示すれば、話者自身も相手と同じぐらいその件を重要なこととして捉え、真剣に考えた上での判断として述べることができ、“那”で指示すれば「そんなことで悩むなんて馬鹿げている」というニュアンスを含む。よって話者が主張する「心配いらない」という判断が同じでも、相手が問題としている事柄を“这/那”のどちらで指示するのかによって、その判断に至るまでの表現している心理過程は異なる。

これに類似した点として、英語では、大竹芳夫 2009 は相手の謝罪や感謝に対する応答表現について、“That’s all right.”と“It’s all right.”の違いを分析し、Kamio and

Thomas1999 が指摘した「it の指示対象は相手の発話に先立って話し手が持っている情報、「既獲得情報」でなければならないのに対し、that の指示対象にはそのような制約がなく、相手の発話などにより話し手がはじめて得た情報「新獲得情報」であってもよい(Kamio and Thomas1999：291)」という特性に調和して、「it でその事柄を指す場合、話し手は相手の発話に先立ってそのことがらを承知しており、そのうえで全く構わないのだという評価を下していることになる。一方、…(明らかに相手の発話に先立ってその事態を)話し手が知っている状況で、あえて that を用いてそのことを指示する場合、…(相手の)発話に先立ってそのことを全く気にもとどめていないし意識もしていなかったということを相手に示すことになる。…この場合、話し手は実はすでに承知していた事態を that で表示し、新しい情報として装って提示していることになるわけであるが、聞き手を考慮し、その場で即座に安心させることを優先していることの表れとみてよいように思われる(大竹 2009：16-25)と述べた。

このことからすると、中国語で相手を安心させる場合の、“这”と“那”の使い分けによって表現されている二つの異なった話者の心理過程は、英語では、相手が気にしていることを“it”と“that”のどちらで受けて「構わない」という判断を述べるかによって表現される話者の二つの異なった保証過程と、ある程度平行的であることがわかる。

そもそも、“这/那”の使用の違いを生じさせていると本研究が主張する「相対的重視度の高/低」という基準と、“it/that”の使用の違いを生じさせていると Kamio and Thomas1999 及び大竹 2009 が主張する「既獲得情報/新獲得情報」という基準は異なっている。しかし、この一見全く別の土俵に立っているように見える二つの選択基準から、中国語の“这/那”と英語の“it/that”という対立同士が、互いに平行的であると言える現象を数多く生み出される。たとえば、Kamio and Thomas1999 は英語の“I’m glad to hear it.”や“I’m sorry to hear it.”のような慣用的な表現では、実際には「新獲得情報」であるものを「既獲得情報」として扱い “it”で指すことができることを指摘し、それは話者が相手に告げられた知らせに自分のことのように誠実に参加していることを示すためであるとしている(Kamio and Thomas1999：300)。Kamio and Thomas1999 は「新獲得情報」を it で指す例外として、次の例を挙げている。

(1) A: My daughter Paula has been offered an excellent job at a school in Virginia.
B: Oh, I’m glad to hear **it**.

A:私の娘のポーラに、バージニアにある学校の素晴らしい仕事の声がかかっていましてね。

B:まぁ、<u>それ</u>はよかったですね。

Kamio and Thomas1999 は、例(1)について、「B が、娘の業績に満足する親 A の満ち足りた気持ちに自分のことのように参加していることを示すために it を用いている(Kamio and Thomas1999：300、日本語訳筆者)」と述べている。実は、英語で起きているこの現象は、まさに、中国語の指示詞の選択基準として筆者が主張している「相対的重視度」そのものであり、家族同士の対話のように自分のことのように喜ぶ(=指示対象を自分が相手と同じかそれ以上に重視していることを示す)か、それともただの一クラスメートが他人としての立場をとってコメントを述べるかで“这”“那”が選択されるとしてインフォーマントが挙げてくれた下の例とよく一致する。

⑵ 息子：妈，我考上大学了。

母親：真的吗! <u>这</u>/*那可真是太好了! 我们家终于有大学生了!

息子：お母さん、僕大学に合格したよ。

母親：本当?<u>それ</u>は本当によかった!うちの家にもとうとう大学生ができたわ!

⑵ A: 告诉你一件事，我考上公务员了！

B1: *这/<u>那</u>可真是不错！以后就不用担心饭碗了。(クラスメートが他人としてコメント)

B2: <u>这</u>/*那可真是不错！以后就不用担心饭碗了。(親友が自分のことのように喜ぶ)

A: お知らせがある、僕公務員に合格したんだ！

B1、B2: <u>それ</u>はすごいじゃないか！これからは飯に困らないな。

このように考えると、中国語の「相対的重視度」と英語「獲得情報の新既」という一見全く別の土俵に立っている二つの選択基準は、照応詞の分かれ目となる基準値が異なっているものの、核となる部分はかなりの程度重なりあっていると見ることができる。

また、これは言い訳、弁解における表現でもやはり平行的な現象が見られる。3.4.2 でみたように、中国語では、相手に指摘されている事柄を、とるに足りない些細な問題とみなそうとする場合には“那”が用いられる。もし、反抗的な意図なく、真摯な態度で、相手

に責められていることがらに対する釈明、事情説明を行う場合や、相手が知り得ない事情について正々堂々と弁明を行う場合には、中国語でも“这”が用いられる。

(3)［公的な場で、企業がマスコミに対して記者会見を開いている場面］

A：「汚染水を知っていながら川に流していたのはどうしてですか。」

B:「**それ**は、水質検査を委託していた下請け会社と、弊社の一部の従業員の間に、会社が把握していない談合がおこなわれていたからです。」

B 中国語 :{**这/那**}是因为我们所请的检查水质的公司与本公司的部分工作人员之间存在着暗中勾结。

(3)では、企業側が謝罪の気持ちを込めて誠実な態度で事の経緯を述べるなら“这”が用いられるが、責任を回避しようとする「言い訳」的な態度で事の経緯を述べるなら“那”が用いられるという。一方、英語における弁解に関して大竹 2009 は次のように述べている。

> It is that 節構文は聞き手には同定しがたい事情を話し手が解釈して説明することから、謝罪の弁解、弁明や言い訳を提示する場合にしばしば用いられる。……It is that 節構文は単なる思い付きを相手に伝えるのではなく、話し手が先行情報を発話に先立って十分に認識処理したうえで解釈を断言する。このことから相手を納得、安心させる談話機能が発生する(大竹 2009：68-70)。

(4) “Nothing’s any different that it was a minute ago.”“I know that,” he assured me. “**It’**s just that this time I’ve lowered my standars.”(Reader’s Digest, July 1992)

「さっきと何も変わっていないじゃないか。」「わかっているよ。」と彼は自信をもって私に行った。「今度は私は基準を下げただけなんだ。」

中国語: 但是**这**/*那只是因为我这次降低了标准罢了。

(大竹 2009：71、中国語訳はインフォーマントから得た調査結果をもとに筆者作成)

このように考えると、中国語では言い訳をする場合、相手がその件を問題として提起するまで、気にもとめていなかった、という気持ちを装い、そもそも問題を考慮に値しないささいな事柄として表現することで、自分の行為を正当化しようとするのに対し、英語ではそもそも「言い訳」であるか正当な弁明であるかにかかわりなく、共に相手が知り得ない真相を話者自身は十分考慮済みであることをアピールすることで、自分の弁解に説得力

を持たせ、自分の行為を正当化しようとするという違いがある。しかし、中国語でも、言い訳ではなく真摯な態度で事の真相や実情を披瀝するような釈明や弁解、また、むしろ話者が積極的に事の真相を語る機会を作りだして行う弁明については、当該事象が“这”で指示されることから、相手の知り得ぬ真相を説明するという面において、弁解という場面でも、やはり中国語の“这”・“那”の使い分けによって表現される事柄と英語の it・that の使い分けによって表現される事柄は大きく重なり合って対応していると言える。

このように、中国語と英語の照応表現についてほんの少し考え始めただけでも、もはや各言語の指示詞の枠内だけでは議論できず、代名詞全般が関係してくることが予想される。しかし、それぞれの言語で表現し分けられていることが、指示詞という枠を超えて英語や日本語では他のどのような言語ツールで表現し分けられているのかを示すことができれば、それは大変意義深い研究になるだけでなく、教学においても大いに役立つ資料になることは間違いない。このことを今後の課題としたい。

参考文献

【日本語書籍】

安藤貞雄 1986『英語の論理・日本語の論理 : 対照言語学的研究』大修館書店。

庵功雄 2007『日本語におけるテキストの結束性の研究』くろしお出版。

王福祥(著)、高橋弥守彦・続三義(訳)2008『中国語談話言語学概論』白帝社。

大江三郎 1975『日英語の比較研究 : 主観性をめぐって』雲南道。

大竹芳夫 2009『「のだ」に対応する英語の構文』くろしお出版。

影山太郎 2011『日英対照名詞の意味と構文』大修館書店。

金口儀明 1958『名詞・代名詞』研究社。

神尾昭雄 1990『情報のなわ張り理論』大修館書店。

———— 2002『続・情報のなわ張り理論』大修館書店。

神崎高明 1994『日英語代名詞の研究』研究社出版。

木村英樹 1982『日本語・中国語対応表現用例集　Ⅲ　——指示詞——』昭和 56 年度科学研究費補助金(総合研究 A)研究成果報告書。

———— 2012『中国語文法の意味とかたち——「虚」的意味の形態化と構造化に関する研究』白帝社。

金水敏・田窪行則 2004『日本語研究資料集　指示詞』ひつじ書房、第 1 期第 7 巻。

國廣哲彌 1986『理論言語学』大修館書店。

国立国語研究所 1981『日本語の指示詞』大蔵省印刷局。

斎藤武生・安井泉 1983『名詞・代名詞』研究社出版。

佐久間鼎 1983『現代日本語の表現と語法』くろしお出版。

篠原和子・片岡邦好 2008『ことば・空間・身体』ひつじ書房。

白川博之 2006『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク。

鈴木一彦・林巨樹 1972『名詞・代名詞』明治書院。

益岡隆志編 2006『シリーズ言語対照<外から見る日本語>　第 6 巻　条件表現の対照』くろしお出版。

三上章 1981『続・現代語法序説』くろしお出版。

安井稔・中村順良 1984『代用表現』研究社出版。

山梨正明 1992『推論と照応』くろしお出版。

李長波 2002『日本語指示体系の歴史』京都大学学術出版会。

呂叔湘 1992『中国語用例辞典』東方書店。

呂叔湘 2003『中国語文法用例辞典――《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』東方書店。

【日本語論文】

有田節子 2006「条件表現研究の導入」『シリーズ言語対照<外から見る日本語>　第 6 巻　条件表現の対照』くろしお出版、pp.3-9。

小野絵理 2013「現代中国語における指示詞の選択基準」大阪大学大学院言語文化研究科、修士論文。

――――― 2014a「現代中国語における指示詞の選択基準――相手の発言内容を指示する場合――」『EX ORIENTE』大阪大学言語社会学会、第 21 巻、pp. 89-120。

――――― 2014b「中国語の文脈指示用法における指示詞の使い分けに相当する英語表現」2013 年度秋季 大阪大学言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会（大阪大学言語文化学会）第 44 回大会報告要旨、『EX ORIENTE』大阪大学言語社会学会、第 21 巻、pp. 251-254。

――――― 2015「“……(，/。)这/那就是［注解］”と“……(，/。)就是［注解］”――現代中

国語の注解表現における文脈指示詞の有無について――」2014 年度秋季大阪大学言語社会学会・言語文化学会合同研究発表会(大阪大学言語文化学会)第 46 回大会報告要旨、『EX ORIENTE』大阪大学言語社会学会、第 22 巻、pp. 275-278。

木村英樹 1997「中国語指示詞の『遠近』対立について――『コソア』との対照を兼ねて」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版、pp.181-211。

小泉保 1987「譲歩文について」『言語研究』三省堂第 91 巻、pp.1-14。

高芃 2004「現代中国語“这”“那”の指示内容に関する考察――心理的な遠近概念との関与――」『多元文化』名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、第 4 号、pp.1-13。

――― 2006a「中国語の指示詞“那”の機能分析――観念指示という立場から――」『ことばの科学』名古屋大学言語文化研究会、pp.87-98。

――― 2006b「中国語の指示代詞“这”“那”の虚化について」『多元文化』名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、第 6 号、p.123-136。

――― 2007「中国語における指示詞と視点移動―文脈指示を中心に―」『多元文化』名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、第 7 号、pp.119-134。

阪田雪子 1971「指示語『コ・ソ・ア』の機能について」『東京外国語大学論集』東京外国語大学、pp.125-138。

迫田久美子 1991「学習レベル別の指示詞「コ・ソ・ア」の運用能力に関する研究」『中国四国教育学会　教育学研究紀要』第 37 巻第 2 部。

讃井唯允 1988「中国語指示代名詞の語用論再検討」『人文学報』東京都立大学人文学部、第 198 号、pp.1-19。

史隽 2008「文脈における日中指示詞の対照研究」『一橋大学留学生センター紀要』第 11 巻、pp.65-77。

――― 2012「日中指示詞の対照研究」一橋大学大学院言語社会研究科博士課程、博士論文。

田窪行則・木村英樹 1997「中国語、日本語、英語、フランス語における三人称代名詞の対照研究」『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版、pp.137-152。

東郷雄二 1999「談話モデルと指示――談話における指示対象の確立と同定をめぐって――」、『京都大学総合人間学部紀要』第 6 巻、pp.35-46。

———— 2000「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』第 7 巻、pp.27-46。

服部四郎 1961「「コレ」「ソレ」「アレ」と this, that」『英語青年』第 107 巻、第 8 号、pp.412-413。

堀口和吉 1978「指示詞の表現性」『日本語・日本文化』大阪外国語大学研究留学生別科、第 8 号、pp.23-44。

单娜 2003「中国人学習者の指示詞「コ・ソ・ア」の習得に関する研究―ダイクシスと照応を統合した観点から―」『言語文化と日本語教育』お茶の水女子大学日本言語文化学研究会、第 26 巻、pp.61-66。

牧野美奈子 1993「中国語の指示詞とテクスト」『中国語学』日本中国語学会、第 240 号、pp.99-108。

三上章 1970「コソアド抄」『文法小論集』くろしお出版、pp.145-154。

劉驫 2010「『那』の文脈指示と観念指示――談話モデル理論による分析」『日本語用論学会第 12 回大会論文集』第 5 号、pp.313-316。

———— 2011「日本語の文脈指示『この』の対立型と融合型――談話モデル理論による分析をもとに――」『KLS』関西言語学会、第 31 号、pp.72-83。

———— 2012「物語における日本語と中国語の文脈指示詞の対照研究―談話構造の観点から」『日中言語対照研究論集』第 14 号、p.78-92。

———— 2012「中国語の近称指示詞『这』の歴史的な変化について」『KLS』関西言語学会、第 32 号、pp.301-310。

———— 2014「基于话语模型理论分析日语文脉指示词『この』和『その』的选择原理」『日語研究』第 9 巻、pp.66-90。

梁慧 1986「『コ・ソ・ア』と『这・那』――日本語・中国語の比較対照研究――」『都立大学方言学会会報』都立大学方言学会、第 116 号、pp.9-22。

【中国語書籍】

北京大学中文系 1955 1957 级语言班编 1986《现代汉语虚词例释》，商务印书馆。

陈玉洁 2010《汉语指示词的类型学研究》，中国社会科学出版社。

储泽祥 2010《汉语空间短语研究》，北京大学出版社。

金锡谟 1983《汉语代词例解》，书目文献出版社。

吕叔湘 1985《近代汉语指代词》，学林出版社。

——— 2000《现代汉语八百词》(增订本)，商务印书馆。

王力 1985《王力文集 第二卷》，山东教育出版社。

徐赳赳 2003《现代汉语篇章回指研究》，中国社会科学出版社。

许余龙 2004《篇章回指的功能语用探索:一项给予汉语民间故事和报刊语料的研究》，上海外语教育出版社。

杨寄洲、贾永芬 2003《1700 对近义词语用法对比》，北京语言大学出版社。

杨玉玲 2010《"这"、"那"系词语的篇章用法研究》，中国广播电视出版社。

杨自俭、李瑞华 1990《英汉对比研究论文集》，上海外语教育出版社。

叶盼云、吴中伟 2001《外国人学汉语难点释疑》，北京语言大学出版社。

张伯江、方梅 1996《汉语功能语法研究》，江西教育出版社。

郑宪信、辛永芬 2005《汉日篇章对比研究》，河南大学出版社。

【中国語論文】

薛向颖、谢芳芳 2011 英汉指示系统对比研究，《太原大学学报》，第 12 卷，第 4 期(总第 48 期)。

陈平 1981 英语代词的前指与后指，《外语学刊》，第 1 期。

——— 1987 释汉语中与名词成分相关的四组概念，《中文语言》，第 2 期。

陈平著、徐赳赳译 1996 汉语中结构话题的语用解释和关系化，《国外语言学》，第 4 期。

陈艳芳 2005 这/那、this/that 指示照应语篇衔接功能对比，《莱阳农学院学报(社会科学版)》，第 17 卷，第 4 期。

成海涛 2006 "就+是"的句法性质及"就是"的形成机制分析，《佛山科学技术学院学报(社会科学版)》，第 6 期。

崔艳丽 2014 回指的语篇功能研究，《鄂州大学学报》，第 21 卷，第 3 期。

崔应贤 1997 "这"比"那"大，《中国语文》，第 2 期。

刁世兰 2006 "这"、"那"的下指用法探析，《新余高专学报》，第 11 卷，第 1 期。

丁启阵 2003 现代汉语 "这"、 "那"的语法分布，《世界汉语教学》，第 2 期。

董一灵 2007 "这""那"的指示作用在篇章中的运用及不对称综述，《现代语文(语言研究版)》，第 5 期。

范围 2001 关与"这是……"和"这个是……"用法差异的认知解释，《语言教学与研究》，第 3 期。

方梅 2002 指示词“这”和“那”在北京话中的语法话，《中国语文》，第 4 期。

付琨 2008 试论和话题有关的几个概念，《衡水学院学报》，第 10 卷，第 5 期。

郭莉琳 2012 “就是说”的话语标记功能及其词汇化过程，《牡丹江师范学院学报(哲社版)》，第 4 期。

郭玉玲 2000 “说说指代时间的“这”和“那”，《首都师范大学学报(社会科学版)》增刊。

黄国文 2006 语篇分析与话语分析，《外语与外语教学》，第 10 期(总第 211 期)。

蒋华 2005 释“这个”，《四川教育学院学报》，第 21 卷，第 9 期。

——— 2007 试论指示代词“这/那”的本质，《怀化学院学报》，第 26 卷，第 2 期。

邝萍 2005 英汉文中指示代词照应作用的比较研究，《贵州民族学院学报(哲学社会科学版)》，第 4 期。

潘红娅、李海娟 2009 中日指示词的对比研究—以文脉指示为中心，《湖南财经高等专科学校学报》，第 25 卷，第 120 期。

刘弘 2006 指称和指示，《文教资料》，第 30 期。

刘倩 2009 连词“那么”分析，《文学教育(下)》，第 11 期。

南二丽 2009 英汉远近指示词的语篇衔接功能对比分析，《河南理工大学学报(社会科学版)》，第 10 卷，第 2 期。

劉驫 2014 “那”的非典型语用功能，《中国语学》，日本中国語学会，第 261 号。

刘顺 2004 现代汉语无指的分类和分布位置，《云南师范大学学报》，第 2 卷，第 2 期。

吕叔湘 1977 通过对比研究语法，《语言教学研究》，北京语言学院，第 2 集，第 6 页(1992，《语言教学与研究》，北京语言大学，第 2 期)。

钱榕 2009 第三人称单数“他”在直指现场的常用情况，《商业文化(学术版)》，第 5 期。

冉永平 2007 指示语选择的语用视点、语用移情与离情，《外语教学与研究(外国语文双月刊)》，第 39 卷，第 5 期。

桑彤 2013 回指理论研究综述，《现代语文》，第 12 期。

沈家煊 2010 英汉否定词的分合和名动的分合，《中国语文》，第 5 期(总第 338 期)。

石毓智 1997 指示代词回指的两种语序及其功能，《汉语学习》，第 6 期。

——— 2005 判断词“是”构成连词的概念基础，《汉语学习》，第 5 期。

史金生、胡晓萍 2013 “就是”的话语标记功能及其语法化，《汉语学习》，第 4 期。

孙志 2009 从功能语言学看中英语篇的磨合，《湖北广播电视大学学报》，第 29 卷，第 9 期。

汪涛 2005 大学英语写作测试中的转承语探究，《和田师范专科学校学报》，第 5 期。

王灿龙 2006 试论“这”“那”指称事件的照应功能，《语言研究》，第 26 卷，第 2 期。

王灿龙 2004 说“这么”和“那么”，《汉语学习》，第 1 期。

王道英 2004 “这”“那”的情景指示，《重庆大学学报(社会科学版)》，第 10 卷，第 6 期。

王芳、喻家楼 2014 论指示现象与话语意义，《淮南师范学院学报》，第 2 期。

肖薇、郭晓华 2005 英汉指示语用法差异，《广西社会科学》，第 5 期。

薛向颖、谢芳芳 2011 英汉指示系统对比研究，《太原大学学报》，第 12 卷，第 4 期。

徐丹 1988 浅谈这/那的不对称性，《中国语文》，第 2 期。

徐默凡 2001 “这”、“那”研究述评，《汉语学习》，第 5 期。

徐学平 2011 正负情感对空间指示语选择的影响，《外语与外语教学》，第 5 期。

徐学平、周榕 2009 指别距离和指别方式对空间指示语选择的影响，《现代外语(季刊)》，第 32 卷，第 4 期。

许余龙 1989 英汉远近称指示词的对译问题，《外国语》，第 4 期(杨自俭 1990，《英汉对比研究论文集》，上海外语教育出版社，pp.348-362)。

——— 2007 英汉语下指的篇章功能和语用分析——兼谈汉语第三人称代词照应的单相幸问题，《外语教学语研究》，第 39 卷，第 6 期。

——— 2013 释几对与语篇回指相关概念，《外文研究》，第 1 卷第 2 期。

谢爽 2012 英汉语篇中指示指称对比及分析，《文学界(理论版)》，第 3 期。

杨玉玲 2006 单个“这”和“那”篇章不对称研究，《世界汉语教学》，第 4 期。

——— 2011 可及性理论及“这”、“那”篇章不对称研究，《河南社会科学》，第 19 卷，第 2 期。

姚双云、姚小鹏 2012 自然口语中“就是”话语标记功能的浮现，《世界汉语教学》，第 26 卷，第 1 期。

岳岩 2006 浅谈“这-”“那-”的语用和话语功能，《滁州学院学报》，第 1 期。

张伯江 2010 汉语限定成分的语用属性，《中国语文》，第 3 期。

张春燕 2011 “这/那”继续分句的功能语法分析，《外语艺术教育研究》，第 4 期。

张德禄、张时倩 2014 回指可及性影响因素的认知心理学研究述评，《外语学刊》，第 1 期。

张惟、高华 2012 自然会话中“就是”的话语功能与语法化研究，《语言教学与研究》，第 1 期。

张雪莲 2012 英汉远近指示语移情指示差异的文化解读，《吉林工程技术师范学院学报》，第 28 卷，第 4 期。

张谊生 2002 “就是”的篇章衔接功能及其语法化历程，《世界汉语教学》，第 3 期。
赵世开 1981 英-汉指示代词的对比研究，《中英语文教学》，第 1 期(杨自俭 1990，《英汉对比研究论文集》，上海外语教育出版社，pp.223-238)。
宗守云 2001 也谈“这是……”和“这个是……”，《语言教学与研究》，第 3 期。

【英語書籍】

Dwight Bolinger 1972, That's that, ZND printers, ‘s-Hertogenbosch, Netherlands.
M. A. K. Halliday, Ruqaiya Hasan 1976, Cohesion in English, Longman Inc., New York.
Tom McArthur 1981 Longman Lexicon of Contemporary English,
Trygve Heltveit 1967, Studies in English demonstrative pronouns：a contribution to the history of English morphology, Oslo：Universitetsforlaget.
Yi’an Wu 2004, Spacial Demonstratives in English and Chinese: Text and Cognition, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam / Philadelphia.

【英語論文】

Susan Strauss 2002, This, that, and it in spoken American English: a demonstrative system of gradient focus, Language Sciences 24(2002) 131-152.
Kamio, Akiko and Margaret Thomas 1999 Some Referential Properties of English It and That. In Kamio, Akiko and Ken-Ichi Takami(eds.), *Function and Structure: In Honor of Susumu Kuno*, 289-315. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.

【辞書類】

『现代汉语词典 第 5 版』2005、中国社会科学院语言研究词典编辑室编、商務印書館。
『应用汉语词典』2000、商务印书馆辞书研究中心编、商务印书馆出版。
『ジーニアス英和辞典《改訂版》2 色刷』2001、小西友七編集主幹、大修館書店。
The Oxford English Dictionary. 1961 Vol.5 Oxford University Press.
The Oxford English Dictionary. 1961 Vol.11 Oxford University Press.
The Oxford English Dictionary. Second Edixion. 1989 Vol.8 Oxford University Press.
The Oxford English Dictionary. Second Edixion. 1989 Vol.11 Oxford University Press.

【対訳資料】

Alice's Adventures in Wonderland

英語原文：Lewis Carroll, ed. with an introduction by Roger Lancelyn Green 1971 Alice's adventures in wonderland and through the looking-glass：and What Alice found there, Oxford University Press, London.

中国語訳：陈复庵(译)、杨静远(校)1981《阿丽思漫游奇境记》、中国对外翻译出版公司。

日本語訳：尾上政次訳 2005『不思議の国のアリス』南雲堂。

山形浩生訳 2000『不思議の国のアリス』日本語訳、杉田玄白プロジェクト、http://www.genpaku.org/alice01/alice01j.html。

An American Tragedy

英語原文：Theodore Dreiser, 2003, Distributed to the trade in the U.S. by Penguin Putnam, New York.

日本語訳：宮本陽吉(訳)1975 愛蔵版　世界文学全集 27『アメリカの悲劇』綜合社、東京。

中国語訳：《美国悲剧》

http://www.etstory.cn/tags.php?/%E7%BE%8E%E5%9B%BD%E6%82%B2%E5%89%A7/、2015 年 9 月 1 日最終閲覧日。

Sister Carrie

英語原文：Theodore Dreiser, 1932 "*Sister Carrie*"、by Theodore Dreiser with a new foreword by the author, Ramdom、House, New York.

中国語訳：天涯在线书库 2002

http://www.tianyabook.com/waiguo2005/d/delaisai/jlmm/index.html、2013 年 12 月 3 日最終閲覧日。

日本語訳：村山淳彦(訳)1997a『シスター・キャリー(上)』ドライサー作、岩波書店、東京。

1997b『シスター・キャリー(下)』ドライサー作、岩波書店、東京。

Sophie's World

英語訳：Translated by Paulette Mφller, 1996 "*Sophie's World*" 、Jostein Gaarder, Berkley books、New Yourk.

中国語訳：萧宝森(译)1995《苏菲的世界》乔斯坦・贾德(著)、作家出版社、北京。

日本語訳：池田香代子(訳)1995『ソフィーの世界～哲学者からの不思議な手紙』ヨースタイン・ゴルデル(著者)、須田朗(監修者)、日本放送出版協会、東京。

The Great Gatsby

英語原文：F. Scott Fitzgerald, 1925 “The Great Gatsby”、

http://ebooks.adelaide.edu.au/f/fitzgerald/f_scott/gatsby/、2012 年 4 月 18 日取得。

中国語訳：巫宁坤(译)1996《了不起的盖茨比》、

http://www.shuku.net:80/novels/fcjldzpj/gcb/gcb01.html、

2012 年 4 月 18 日最終閲覧日。

日本語訳：小川高義(訳者)2009『グレート・ギャッツビー』光文社。

村上春樹 (訳者) 2006『グレート・ギャツビー』中央公論新社。

野崎孝(訳者)1993『グレート・ギャツビー』新潮社。

Vingt mille lieues sous les mers

中国語訳：白鹿书院『海底两万里』

http://www.oklink.net/99/1124/seabed/index.html、2013 年 12 月 2 日最終閲覧日。

日本語訳：朝比奈美知子(訳)2007a『海底二万里(上)』岩波書店、東京。

2007b『海底二万里(下)』岩波書店、東京。

【話劇台本】

车站

高行健 1986「车站」中国戏剧出版社编辑部编『有争议的话剧剧本选集(二)』中国戏剧出版社、北京。

飯塚容(訳)2000「バス停」話劇人社中国現代戯曲集編集委員会編『中国現代戯曲集　第二集』晩成書房社、東京。

【ドラマ】

《爱的创可贴》、《唐山大地震》、《恋了爱了》

【論文】

冯胜利 2010《汉语的韵律、词法与句法（修订版）》、北京大学出版社。

【コーパス資料】

北京大学中国语言学研究中心(CCL)http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/。

北京语言大学现代汉语语料库(BCC)http://bcc.blcu.edu.cn。